

文學士 佐々政一 著

近松

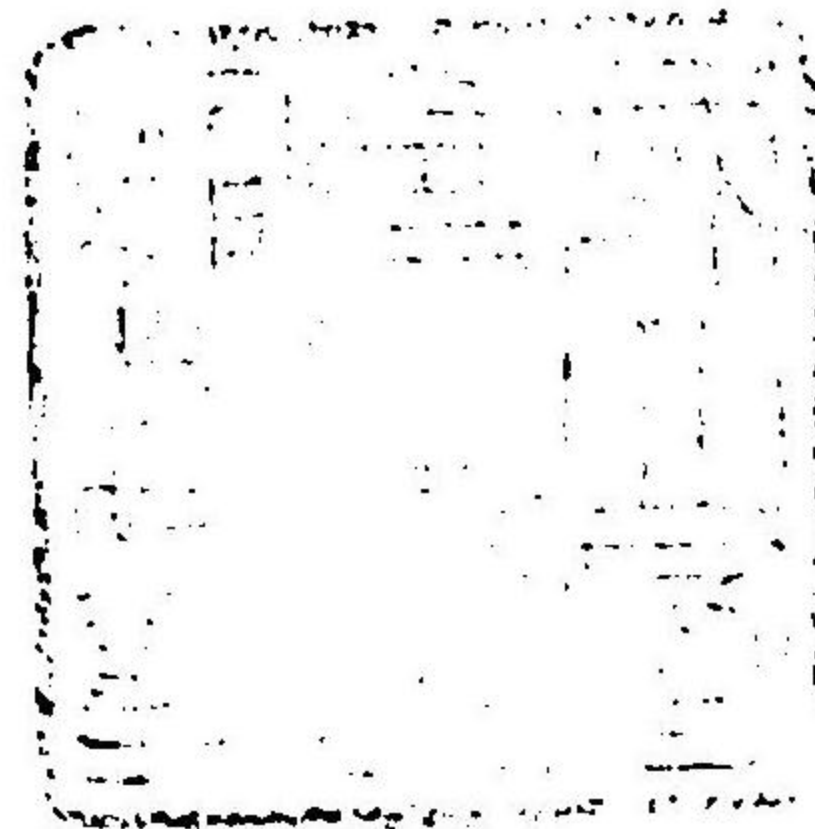
評釋

天の網嶋 全

東京

明治書院 發行

912.4Ti238St



337267

### 緒言

我が文學史上、近松巢林子の研究の忽諾に附すべからざることは、今更に絮説すること、を要せじ。但其研究の方法に至つては、學者間に見解を異にすることあるを免かれず。雖も、予が近代文學に於る研究法の態度は、既に本書第一編輯衣評釋の卷首に説けるが如し。ことに巢林子に於ては、所謂國文學者が源氏枕草紙の類を解釋し得る程にだに解釋し得るに非ずば、未だ其文學上の批評に入るべき準備の完からざるものといはざるべからず。予が數年以前より主張し來りし所なり。

予は、僻遠の地に村夫子たること多年、志常にこの研究に在つて、交友同好に乏しく、坐右群籍を備ふる能はず。研鑽の完からんことを望まんは、遂に不可能の事に屬すべきを知るや、即ち、又、こゝに管見を披瀝して、切に江湖の是正を仰がんとするなり。

我既に完からず、まかもなほ、完からざる我を盡すは、我が義務なるべし。されば、少しく淨溜瑣本中、ことに近松が丸本の沿革を説いて、而して後に、本書にかくの如

き体裁を取りし所以を明かにせん。

元來、淨溜璃本の開板は、京阪地方にも頗古くより行はれしことにて、嬉遊笑覽等によれば、寛永年中に既に、南無右衛門の正本、京都二條通御幸町西へ入町つるや喜右衛門より開板せられたれど、それは十四行本にして、所々に半丁づゝの挿繪ありと見ゆれば、かの聲曲類纂に見ゆる、江戸淨溜璃の古板に似たるものなりしならん。降つて竹本義太夫の師なる井上播磨に至つては、床本、稽古本なり、勿論節附けしたるものなりしならん。を堅く秘して他見を許さず、唯其文句のみに挿繪を加へたる細字の小本は、京都にて刊行せられしかど、童幼の翫びたるに過ぎざりき。後年心齋橋筋の寫本、屋井上彌兵衛といふもの、播磨に所縁ありしかば、僅かに其床本の一部を乞ひ得て寫本として發賣せしことありしのみ。ざるを、播磨と同時代なる宇治加賀は、貞享二年、七ついろはを大字八行本に謄ひ本の如く節附をなして、初めて京都四條小橋の盛屋より上梓しぬ。これ今日の如き丸本の嚆矢なりとぞ。嬉遊笑覽、聲曲類纂、音曲道智論には、近松の徒然草を丸本の初といへり。

播磨より出で、加賀の長所を探り、所謂義太夫節を大成し、よく近松が偉才を利

近松義太夫  
其書を治兵衛  
トアリ

用したる竹本筑後、即ち義太夫は、すべて其床本を出板せしめしことは勿論、その奥書には、秘事はまつげとやらと喝破しぬ。今日、近松が戯曲の、不充分ながらも、吾人の坐右に置かるゝことを得るは、かつは筑後が資なり。

近松の古板に二様あり。かの南無右衛門の正本の如き繪入のものは、つる屋喜右衛門より出板し、繪のなきものは、京都二條通寺町西へ入町、山本九兵衛より出板せり。當時なほ出板事業などの中心は京都に在りければなるべし。後、大坂高麗橋通二町目に山本の出店を置きたるは、思ふに、近松死後のことならん。この外に、寺町通松原上ル町西側とありて、書肆の名の破れ損じたる國姓爺の十行本を見たることあれば、他所よりも出板したること、稀々にはありしなるべし。その奥書きは、山本九兵衛が板と全く同様なり。

鶴屋板は極めて稀なれば、或は、ことに流行したる者のみを童幼の讀本としたるものか。其体裁は、武藏屋本、近松世話淨溜璃の巻首に、氷の朔日のの摸刻あり、聲曲類纂にも、國姓爺の挿繪の摸刻あり、就て見るべし。而して、繪のなき本の体裁は、思ふに、加賀が正本を學びしものか、すべて節附したれども、其行數は、元祿享保ころのものと思はるゝは、多く十一行、或は十行本にして、(巻首數頁を十行にして、終に至

つては十一行となれるもありときけど未だ見ず。終始十一行なるは予が藏するものにて、相摸入道千正犬國姓爺後日合戦等あり。これ等は蓋し初板のものなるべし。而して十行本にも國姓爺合戦等後日合戦より以前のものあるは思ふに再板なるべし。されど東京大學の研究室なる網島の十行本は其の奥書きなどより見ても確に初板なるが如くなれば或は網島の出版前後即ち近松が晩年に至りて従來十一行なりしものを十行に改めしにはあらぬか。稀に九行本あり。予が藏するものにも梅川忠兵衛等一二部あり体裁紙質等より推すに亦享保元文頃の再板なるべしと思はる。淺見若し謬りなくば當初十一行なりしものが近松の晩年に十行となり死後久しからずして九行となりさらに出雲の全盛時代に至つて七行本となりしものか。而して其七行本は今日にても稍容易く究め得べし。この各種の丸本は節附其他の体裁には大なる異同なけれども七行本に至つては往々言語の轉訛あり又音調の爲め或は言語の變遷に應せん爲に多少改竄したりと見ゆる所あり。これを網島に就て見ても十行本には「み」を「や」がきたりける「づさん」とあるを七行本には身をのがれが「云々」と變じ「まつ」とまらせの合圖のまばぶきを「まて」と云々と變じたるなどは全く語り手の文旨なるより語り誤り

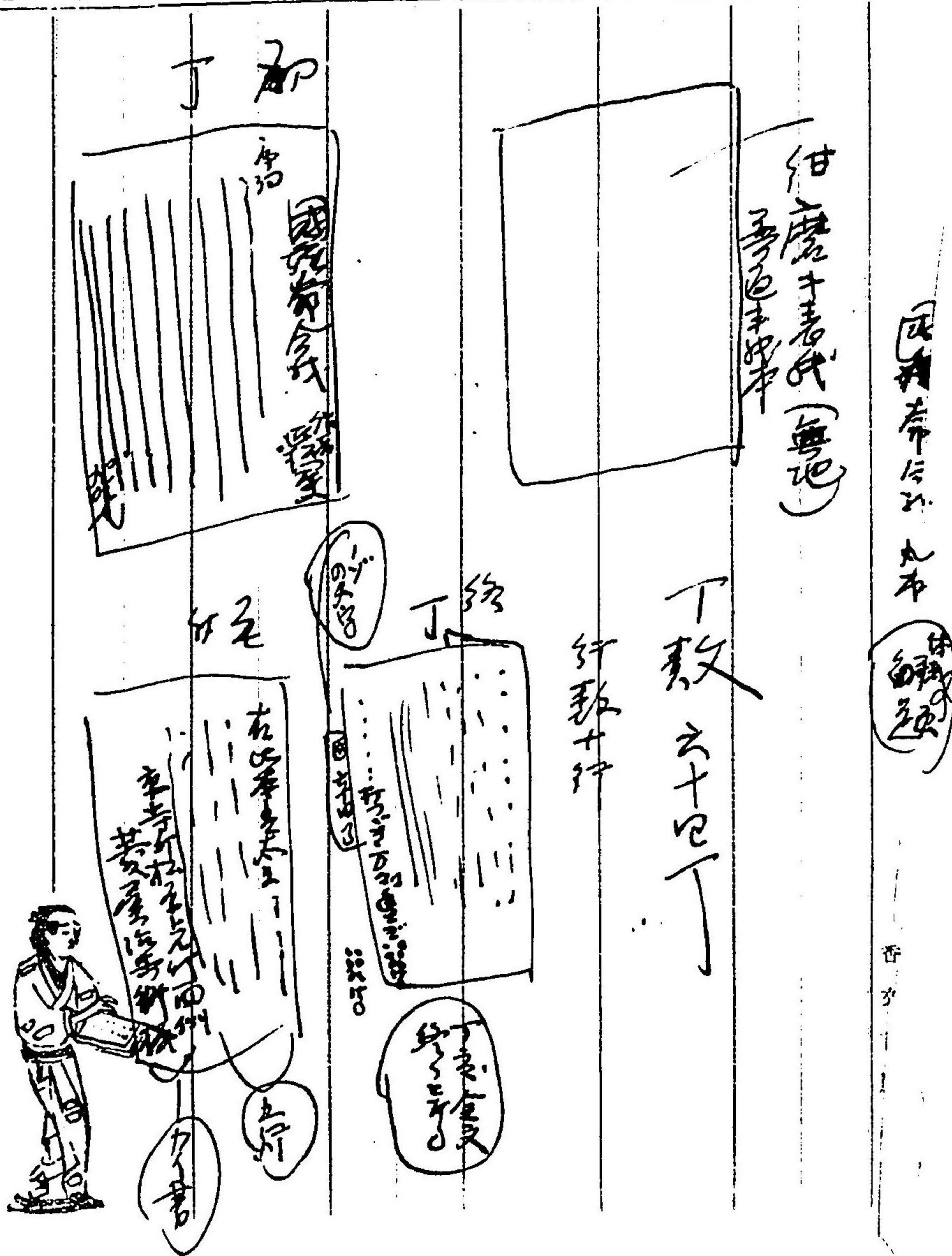
りしものなるべく「まあこ」で枕ならべて「ありしを」まあ是こ「で云々」と改め「戀ひまたふお女郎」を「戀ひまたふたお女郎」と改めたるは思ふに音調の爲なるべし。されば七行本は充分なる證本とはなし難しといふべきなり。されどかゝる異同は全巻に通じて唯此の四ヶ所のみなれば勿論今日の頗る不穩當なる文字をあてたるが上にまゝ誤刷ある活字本と同視すべきにはあらず。今原板によりて精密なる研究に従はんとする人々の爲にこゝに各種の丸本の奥書を示さんか其最も古くして又最も信用すべきものは表紙に竹本筑後掾直傳正本とあり卷尾に、

我等かたり本の通りちろひなく寫させをわんぬ。此外口傳とてさろみむつかしき事もなくい。たゞ人の心を慰むるを秘傳にいたし。まかしふし付の作意と文句のはだるが大事にては。秘事はまつけとや。しむ。

山本九兵衛板

といふ義太夫が奥書きあり。この本はすべて十行以上の細字本なり。予が見たるは十行本のみなれど勿論十一行本もあるべし。

これより稍後のものにして多くは再板なるべしと思はる。本には左の奥書き



竹田出雲

竹田出雲

竹田出雲

竹田出雲

あり。

結言

右此本を、太夫ちきり正本をもつて板行致し、されば初心稽古のため、とくくうきだににして、ふし、しやうくきり、三味線のりりうさ、など、ひやうし、三重たくりのまきく、ひまゆを殘さまわらひし、令板行者也。

山本九兵衛板

これは十一行本も十行本もあり、寺町松原なる逸名の書肆の板なるもあり、九行本もこれと同時代のものと思はるれど、種類も抄なきが如く、予が見しものは、皆奥書きの所破損して考ふるによしなし。

更に新らしきは、竹田出雲時代なる七行本なり。

竹本筑後高弟

予以著述之原本校合一過、可爲正本者也。

竹田出雲 椽 滴定

京二條通寺町西へ入町 正本屋 山本九兵衛版

大坂高麗橋二丁目出店 山本九右衛門版

といふ奥書きあり。表題には、竹本筑後椽真傳、山本九兵衛新板と記し、第一頁に、作者近松門左衛門とあることは、先の各種の書と同様なり。蓋し、出雲時代に至つて、再板又は三板に附したるものは、すべて出雲の奥書を用ゐしものなるべし。以上三種は、皆、参考に資すべきものなり。其奥書きの漸く業々しく成り來りしも、時代の變遷なるべし。

因に云、この他に、さらに増補本といふあり。皆後世の凡庸作者が、原著の脚色をさへ改めたるものなれば、多くは、唯舞臺の變化のみに専らにして、人格をさへ破壊したり。卷首には、なほ作者近松門左衛門の名を存すれども、全くわらぬ拙さのものなり。増補天の網島の如きも、その一例にして、今日茶屋の段又は火燧の段とて、寄席などに語らるゝものは、其一部なり。この種の丸本は、頗る後のものなれば、其体裁も、多く五行の大字本なり。對比して、近松の妙趣を認むべき一助とはなりなん。

今一種、門左の名を犯せる丸本あり。そは、第一頁外題の下に、座本近松門左衛門と記し、卷尾に、眞の作者及び淨瑠璃太夫の名を連記し、而して、なほ前題の出雲の奥書と同様なるものを、近松門左衛門の名を以て記せり。板元は、京の山本九

兵衛、大坂北久太郎町吉川及び江戸大傳馬町鱗形屋なり、門左が名の高きが爲にかゝる異様なることを企つるに至りしなるべし。明和五年七月板、近松半二等が合作、讀賣三巴の如きもこれなり。この種のものには、往々近松物の翻案あり、亦参考に資するに足るものなきにしもあらず。

予が本書の出版を企つるや、百方十行本を得んとせしかど、遂に得ること能はず。武藏屋本及び博文館本は、ともに此の良書によりたりとは見ゆれど、其假字は、必しも原書のまゝならざるが如くなるが上に、必要な音譜たとへば、讀みさりの点及び詞、舞半太夫などの文字を全く省きたれば、地と會話との間の變化等をすら窺ふによしなきが故に、已を得ず七行本を本文とし、人に托して大學の十行本を以て、疑はしき部分を校正せしめ、細字を以てこれを右傍に校正せり。故に、異本とあるが十行本にして、實は正しき本なり。その部分のみを改めんは、却つて全体の統一を失ふ惧あれば、全くさかしらるを交へず、本文はすべて七行本をさながら存したり。

丸本中の点を以て記したる音譜、其他ハル、ウ、中、下、地色、フシ、キンなどの譜は、皆純然たる音楽上の記號にて、文學上に關係なければ、すべてこれを省き、唯文章上に異同あるべき種類の符合のみを存せり。而して、詞或は歌謠より淨瑠璃節に入るべきところの如きは、原書にはナヲス、地色ハル等種々の記號を用ゐれども、本書には皆一様に、地といふ文字に改めたり。其所謂の詞とは普通の會話に似たる音調を以て語る部分にして、所謂の地とは、勿論淨瑠璃節にて語る部分といふことなれば、普通の草紙地及び詞といふことにはあらず。従つて、實際、會話中の語にて、も地にて語る部分極めて多けれども、所謂詞といふ部分とは、自ら異にするものあり。例へば、なうそれですまばいとやすし(中巻おさんの語)といふが如きは、斷じて當代の會話語に非ず。まかも間接に叙したるものとも見え、所詮は、地にて語る部分なるが故に、實際は會話なれども、文章語の混じたるものなりと見るの外なきなり。これ予が特に、詞と地との區別を存したる所以なり。

讀み切りの句點(所謂章句切り)は、普通の句讀と混する惧あれば、字を缺きてこれに代へたり。例へば、よねがなさけの　そこふかき　是かや云々と記せるは、原書に、よねがなさけの。そこふかき。是かや云々とあるを改めたるなり。思ふに、この句は、淨瑠璃といふ律語のミターを知らんとするに、極めて必要なものなるべし。

この他、原書の記號を存したるは、義太夫節以外の節を用ゐる部分、即ち所謂サハリの記號例へば、ウタイ(ウタヒ)即ち謡曲歌俗謡舞(狂言などに見ゆる小舞の節なるべし)文彌、江戸等と、三重とこれなり、其説明を要するものは、勿論、書中に詳説したれど、そのサハリの記號を存したるは、亦普通の義太夫節を以て語る部分と、多少ミターの異同あるが故にして、三重の記號の略すべからざるは、三絃がこの譜に入るときは、普通の文章には決して省略すべからざる語句を省略することあること、例へば「長き別れと三重を以て中の巻を終るが如きものあればなり。蓋し、三重の三味線は、頗る長きものなれば、段切に近くこの三絃をひくときは、其の以後は、殆んど聴衆の傾聴せざるを常とするが故に、語り手も語らざること多く、終に文章の上にも、これを略することあるに至りしものなるべし。

以上の記號のみにては、或は、この種の讀書に慣れざる人の誤解を招くことを恐るゝが故に、更に、普通の文章としての讀句點及び會話の部分の記號を施したり。『○』印は即ちこれなり、而して、段の長さところは、區分して評釋する必要あれば、『印を附して、ことに分段を示したり。其他、右傍に記したる細字は、傍注及び假名遣ひの正誤なり、其疑はしきものは、更に註釋中に詳説せり。

本書が、諸種の點に於て不完全なるは、勿論なれども、特に、近松評釋の第一卷に於て、此の偉人を傳することを得ざりしは、予の最も遺憾とするところなり、今、幸にして、任に山口に在り、聞くと、ころ稍廣くして、疑ふべきもの益多し、乃ち更に信憑すべき根據を得て、予が近松評釋の第二卷に於て、この暗黒なる傳記の上に、多少の光明を與ふべき日あるを期す。

山口に於て

明治辛丑初夏

著者識



近松評釋 天の網島 

文學士 佐々政一 著

紙屋治兵衛  
紀國屋小春

天の網島

作者

近松門左衛門

紙屋治兵衛紀國屋小春は、勿論、この戯曲の主人公なり。近松が世話物には、かくの如く、男女の主人公を表題に冠するが、さらすば、表題中に、其主人公の名を顯すこと、殆んど常にして、然らざるものは、「堀川波の鞍」「女殺油地獄」等、僅かに二三のみ、これ、一は、其名が當時の京阪地方の人々に知れ渡り居りしが爲に、注意を惹き易かりしが爲なるべけれど、又、常に、人を先にして事を後にする傾向の、稍、おらはれたるものとも見ぬべし。「天の網島」とは、其の主人公が心中せし場所なる、大阪の淀川の上流に沿へる地名、網島に、かの天網をいひかけたるものにして、本書の「橋盡し」中なる「惡所狂ひの身の果は、かうなるものと定まりし、釋迦

天の網島

の教もあることか見たし愛身の因果經といへると同じ意味を暗示せるものなり没道義の傾向ありとさへ稱せらるゝ近松が作の表題としては稍珍らしきものといふべし。

近松門左衛門は長門の藩士相杜廣品が子相杜信盛が變名なり近松とは肥前國唐津西寺町近松寺に徒弟たり後遺言に依りて其寺に墓碑を建つるに至りし如き關係あるより自己の名稱としたるものなるべし門左といふ名の起源は未だ考へ得ず其僧なりし時の名を印海祖門近松寺の墓の隠し銘に見ゆといへれば門の字は或はこれより出でしにか或は其名も亦生國長門の門に出でしものか或は曰く其近松寺に在りし頃寺門の左側なる雜舎に在りしかば戲に門左といひしなり(近松寺に傳ふる話として才糸といふ三味線引の語りき)ともいへれど遽に信すべからず。

本篇は享保五年十二月六日初めて興行したるものなれば近松が六十八歳の時(其死に先つこと僅かに四年)の作なるべしこの作より後の作にして今日に存するものは油地獄宵庚申等一二に過ぎず。

この作も當時の實事に取らるものゝ如く治兵衛といふもの享保五年(或は

曰く七年)に死したりといふこと或る書に見ゆとぞ綱島大長寺に其墓あり。

### 上の巻

歌「さん上ばつからふんごろのつころちよつころふんごろで、  
までとつころわつからゆつくるくく。だが 笠をわんが  
らがらす。そらがくくるくも、れんげれんげればつか  
らふんごろ。」

當時の童謡なるべし淨瑠璃本の譜によりて或る淨瑠璃語り語らしめしに、今日の童謡と頗る相似たりき其意味全く推測し得べからず何等かの地口か、さらすば轉訛にてもやあらん今日の俗謡の終に附する拍子めきし語にも例へば「きびすがんく、いかいどんす云々」などの無味なるものあり七八十年前に江戸に流行したる歌にも「かんく」のう、さうれんす、さやきうです、三升ならへ、さわいはふみいかんさんめんこか、たはをでひうかんさんさんとしてつるつん(歌謡類纂)などいふもあり其全く無意味なるは一なり而してこれ、この新地の遊客の忽行き歌の一つとして先づ掲げたるなり。

地よねがなさけの 深そこふかき、是かや戀の大海を かへ  
 もほされぬし、み川、思ひくゝの思ひ歌、心が心と、むる  
 は門 行あんと 文うのもじが 開せき、 浮うかれぞめきの 仇あた上るり  
 やくし 役や物まね 真似納屋ハ歌、二かい 階さしきの 三しやみせん 味にひ  
 かれて立寄き 客やくも有、 紋もん日のがれて顔かくし、 隠あすこ  
 しせじと忍び風、 居中のきよが是を見て、 三保の谷、着たりけるイ身をのがれが  
 来りける 頭づきんの 経あころを取はづし、 掛二三度逃のびた  
 れ共、 下思ふおてきな 敷ればのがさじと、 飛とびか、 掛りひつたり  
 あり 西あやれ、 落せんせと、 止めたる女 景かけ清し 経ころと 頭づきん、 地  
 ついふみ 間かぶる 冠客もあり』

よねといふは、俳言集覽に「美しき姿をよびていふ、ある書に米と書てボツツと  
 よめり、菩薩の如く美しきといふこととぞ」とあれど、思ふに附會の説にはあら  
 じか、よは、良しの語根にてねは、親愛のねなるべく、粹人社会に、妓を呼ぶ語なる

が如し、洞房語園には、宿を遊仙窟にヨネとよめるより来れりといひ、又は、羽州  
 坂田の琵琶に巧なりし遊女の名より起りたりといふ兩説あれど、皆信すべ  
 からず。  
 底といふより海といふ縁語を出し、蜺貝で大海をかへるといふ語をもて「かへ  
 もはされぬ蜺川」とつけたり、戀の道は到底止め難しとなり、蜺川は淀川の  
 支流にして、曾根崎新地に沿ひて流る。思ひ唄といふ語、恐くは近松が造語な  
 るべし。心が心留むとは我心ながら制し得ず、遊客が門行燈の文字、即ち兼  
 ねて熟知せる貸席敷の前に足をどいむとなり、文字が隔は文字といふこと  
 ばより門司が關(硯の海文字が關とも古よりつけたり)といひて留むるとい  
 ふ語の縁語としたるなり。忽行き、萬葉にも「友の願を見えたり、そいめく、な  
 と同じ語源より出し語なるべし、今いふ素見古はすけんともいひぬ」など、同  
 じ大盡舞考證には、吉原徒然草を引きて、諷來は、鑛山語にて、役に立たぬ金の出  
 るをいふといへり、されど、鑛山語が却つてこの語より出しにはあらじか。仇  
 淨瑠璃の仇は、仇花などの仇と同じ實のなきことをいふなり。役者物真似は  
 「役者の物真似」なるべし。なやハ唄のなやは納屋なり、されどこの納屋といふ

語は此の時代には特殊の聯想を惹きしもの、如しこの書の下巻にも「毎晩ちよこく行く所は市の側の納屋の下」といひ歌念佛にも「濱納屋の下で組んぐ轉んづして居つた」といひ二枚繪双紙にも遊女を罵りてはしくのくら屋へ下り後には濱の納屋の影といへるなどすべて惣嫁夜鷹などの巢窟として認められたるものなるを證するものなりされば「納屋」は思ふに納屋端唄にして下等なる賣女社會の端唄の義かされど淨瑠璃本にこの假名を用ゐたるは殆んど常にツと讀むべきものにして端唄の如くはとよむことはなきを例とすれば「納屋」には唄を諷ふといふことならんかと疑ふものもあれど予の考ふるところによれば初にはなや唄とありけんを後世其原意を忘れてかく書き改めたるものなるべし今日は既に此の書の初板のもの存せざれば或は存するもあるべけれど未だ見ることは能はず斷ずるに由なけれど他の部分にも誤謬妙なからぬを見ればこの推測は恐く誤らざらんさて端唄とは長唄に對する端もの唄の義なり今日の所謂端唄即ち歌澤節の義には非ず。曳かむては勿論三味を引くこと、煙客のひき止めらるゝことゝをかけたなり。故日は物日の音便なり何事か物ある日にてたとへば正月五節句などの如く特

に花代祝義などを多く要する日なれば客き男がこれを通れて顔を隠すといへるなり洞房語園に「小袖の紋は五所なれば五節句祝の日を紋日といふ」と見えたるは例の附會か或はかゝる洒落より紋といふ文字は生じたるにや。去過しせじはかの吝き心より多く費さじとなり其去すごまのまど忍び風のまどと頭韻をなせり。仲居は今もいふ語なり貸席敷の女中なりその名をきよといふは女景清といはん料なり。三保の谷が着たりける云々諺曲景清のなにがしは平家の侍悪七兵衛景清と名乗りかけ名乗りかけ手取りにせんとて追うて行く三保の谷が着たりける背のまどるを取りはづしく二三度逃げのびたれども思ふ敵なればのがさじと胃おつとりえいやと引く程に云々といふ語の地口なりさればこゝの譜にはウタイ諺と記せり。お敵は目ざすものなどいふ程の義より來りしものか丹波與作にもそれについて小女郎そなたのおてき(情人)松坂の七二は何として見えぬぞなど見えたりさてこゝにさして用なきことなれど三保の谷といふ名正史に見えず新井白蛾が牛馬間にも其傳を知らずといひ或は小林新五といふものに關して同様の傳説ありともいへり諺曲作者の假想的人物なるべし後の七行本には「三保の谷」を身をのが

れとせり、謡曲八島の銚引に「三保の谷は身を遁れんと前へ行く」といふ句あれ  
ば、さてもありぬべしとも見ゆれど、なほ轉訛なるべきか。ひつたりの後に「い  
だきつきて」などの動詞を入れて心得べし。ごんせ「まやんせ」行かんせなど  
ひとしく「んせ」は「ませ」の音便なり、「ござりませ」「ごんんせ」「ごんせ」と省略したる  
ものなり。銚と頭巾とは彼は銚、此は頭巾なりとなり。ふみ冠るは中居の手  
に穿ることなるは勿論なれど、其かぶるは頭巾の縁語なり。

此の一段は先づ説話の舞台を描出したるものなり、遊廓そのもの、直接なる  
叙述を爲さずして、専ら遊廓中の活動を叙し而して、よく遊廓といふもの、  
鮮明なる印象を與へつゝ、なほ説話の一部分なるが如く感せしむ、既に尋常の  
筆に非ざるなり。其許多なる弄語、地口、縁語もかゝる賑はしき光景に對しては、  
大いに有効なるが如し。

橋の名さへも梅さくら花をそろへし其中に、南のふろのゆ  
かたより、今此新地に戀衣（紀）、さの國（春）やの小はるとハ、此十月  
にあだし名を世にのこせとのしるしかや、こよいハたれ（今宵）

かよぶこ鳥 おぼつかなくもあんどのかげ、行ちがふよね（妓女）  
の立かへり、

橋の名さへも梅櫻云々櫻橋といふ名は後にも見えたり、梅とは名殘の橋盡し  
にも二枚繪双紙にも見えたる梅田橋なり。南の風呂の浴衣より云々南の風  
呂とは南地の風呂屋となり、風呂屋の湯女といふものが一種の遊女なりしこ  
と、西鶴などにも屢々見ゆ、其湯屋は公然たる娼家となりけれど、なほ其家號は  
舊に依りて何々風呂と稱しぬ、嬉遊笑覽に「大坂の島の内の娼家は某風呂とい  
ふ、さくら風呂、ときは風呂といふ類なり」といへるこれなり、浴衣は湯女の暗喩  
にして、又戀衣の縁語なり、新地に「來（衣）」といひかけたりともきこゆれど、さ  
には非ざるべし、戀衣を「着」の國屋といひかけたるとは勿論なり、これ小春の  
略歴にして、南の新地の湯女なりしを、此の曾根崎の紀の國屋に轉住して、なほ  
戀衣着て嫖客を相手にする身の上なりとなり。此の十月に云々橋盡しに見  
ゆるが如く、十月十五日に、此の女は情死するものなれば、小春といふ名は、其前  
兆ならんかとなり。今宵は誰か呼子鳥云々、小春が心なり、かの名高き古今集  
の「覺束なくも呼子鳥かな」といふ句を以て、今宵は如何なる客か我をよぶらん、

覺束なしと物思ひつゝ、辿り行く様なり其おぼつかなきを直ちに行燈にいひかけて、燈光の薄暗き様にいひなせるは、先の盛なる叙景にふさはぬ様にも見ゆれど、小春とも心附かで行き違ひし他の技が、立ち戻りて話しかけたるは、なほ行燈の覺束なきあたりならざるべからず。

説話の文は、出来得る限り、速かに其流動を初むるを要すとは、修辭學者の夙に稱道する所、先づ物思はしき小春を点出し來りて讀者の注意を惹起せるは、よく其法を得たるものといふべし、且つ、花を揃へし其中に「といふ句を以て、小春が美貌を想見せしめ、僅かに二句を以て、其閱歴を説きたる、小春といひ、紀の國屋といふ、恐くば實際の名なる名詞の巧に運用せらせて、殆んど弄語の爲に作られたる名稱なるが如き感あるなどは、近松の筆としては普通のことなりとも、凡庸作者の企及すべき所に非ず。「此の十月に、仇し名を世に遺せとの兆かや」といふ句は、ある人は説話の上に在るべからざる豫言なるが如くいへれど、これ却つて、讀者の注意と同情とを惹く所以にはあらぬか、蓋し、本篇の如き構造の戯曲は、元來、讀者の熟知せる事實を基にせしものなれば、讀者の想像し得ざるが如き、事態の變化を以て、その感興を持続せんとするものにはあらず、故

に、小春の運命を豫知せることは、絶えて讀者の感興を損するものにあらざるなり。

「ヤ、小はる様か、なんといの、たがい一座も打たへ、貴面ならねば、便もさかかず、氣色がわるいか、地顔もほそり、やつれさんした、誰やらが咄でさけば、紙治様ゆへ、内から、たんと、客のぎんみにあはんして、どこへもむざとはおくらぬの、いや、太兵衛様に請出され、さいしよとやら、伊丹とやらへいかんす筈共聞及ぶ、とふでござりやす」といひければ、

何といのは、何といふ語の下に、いといふ音便を置き、更に嘆詞を延べてなうといひたるものを再び約したるのを附したるものなり、行くといふ「するといの」などの例頗る多し。貴面といふ語は頗る異様にさこゆれを當時の流行語なりしなるべし、「見」「目面づく」などの時代語とむかへて思ふべし。寢れさんした、「さう言います」「かう言います」などのこと、狭斜語、莖弱本などに極めて多く見ゆれば、さんすはさす、はさすの轉訛なるべく、言いますはござりやすの略言な

るべし。たんど但言集覽に「多きをいふ谷」となるべし。澤山といふに同じ」とあれど、或は多度の音便より出でしにはあらぬか。むざと今もいふ語なり、今の「ざつとしたこと」などといふ語と同一語源にして、みだりにのみだの轉訛か、むだなことなどといふにむかへて思ふべし。送らぬの、のはとやらなきといふと同一意味の接續詞なり、後に見えたる「請け出すの根曳」とは云々ののも亦、是なり。往かんすのんすも亦さんすのんすと同義なり「往かれます」より來れり。伊丹はかの酒に名高かき攝津の地名にして、太兵衛が住所なり。御座りやすのやすはますが、あすとなりて御座りのりの母音と結合して成りしものなり（Jussé）、今も京阪地方に「おしやす」「おいひやす」などいふは同種の語なり。

先づ主人公たる紙治と、一の主要なる人物にして心中の一原因を作りし太兵衛とを點出し來るのみならず、此の一友輩の語を以て、極めて自然に、この戯曲以前の出來事を示し終れり。事實は回顧的なれども、絶えて説話の進行を妨げざるに注意すべし。

「ア、もう伊丹く」といふてくだんすな、それでいたみ入（伊丹）

「いな、地いとしほなげに紙治様とわたしが中、さ程にもないことを、あのせいこきの太兵衛が、うき名をたて、いひちらし、（客といふ客へのきはて、内からの、紙屋治兵衛ゆへじやと、せく程にく、地ふみの便も叶ぬ様になりやした。ふしぎにこよいは侍志ゆとて河庄かたへおくらるゝが、かう行く道でも、もし太兵衛にあはふかと、氣遣で、く、かたき持同然の身持、なんとそこらに見えぬか。」

痛み伊丹入るといふ洒落は、物思ふ小春の語としては、如何はしくも感せらるれを、實は、これを以て、今出あひし技と、ことに親しきものにあらぬことを示し、且つは紙治さんと私の中、左程にもないことを、といふ語の唯表向きのいひわけに外ならぬことを示せるものに似たり。されば、この一段は、小春の誠意といは見るべからず。いとしほなげにのいとしほは、丹波與作にも途方があるまい、いとしほやなどとも用ゐ、その他にも頗る多し。いとしほといふ語の轉倒せるものか「茶がま

を「茶まが」から「だを」か「だら」といふ類の轉訛なり。而して「なげ」の「な」は、打ち消しの如くも聞てゆれを思ふに然らず例へば「はした」とは「した」などが同じ意味なるが如く、「い」とは「し」なげも亦「い」とは「し」げと同じく可愛いさうになさの義なり。せいこそ「せい」は「せ」なり、「こ」は「隠言こき」などの「こ」と同じく、「いふ」といふとを極めてあしざまにいひし語なり。せくは川をせくなどのせくと同じく逢ふ瀬を絶つことなり。成りやしたは又成りましたの轉訛。河庄は揚げ屋なり近松の著に見えたるは皆置き屋と揚げ屋と別なりこれ常時よりの京阪地方の娼家の常態なるべし。見えぬかえのかえは又かいともいふ、えは音便の爲に添ひし語なり多くるとかけれを正しくはえなるべく、嘆詞の「え」にはあらざるべし。

「調子、チ、そんならちやつとはづさんせ。あれ、一丁目から、南無阿彌陀、なまいだ坊主が てんがう念佛申てくる、其見物の中に、のんこに髪ゆふてのら、しい、だてしゆちまんとい、そな男、たしかに太兵衛様かを見た。あれ、こ、へ」といふ間

程なく、ほうろくづきんの青道心、すみの衣の玉だすき見物ぞめき行に取まかれ、かねのひやうしも出合子ごんく、ほでてん、く、こねぶつ念佛に、あだ口仇かみませ交せて。

ちやつと、チヨットといふと同じ語なれど、時の短かきことより、こゝには速なる意味に轉じて用ゐたり。なまいだ坊主は説教祭文などの最も唄に近き者あるべし、後の歌より見ても、唯なまいだ(南無阿彌陀佛)といふ拍子にて俗語、淨瑠璃の類を謠ふものと見ゆ。てんがう、俚言集覽には、癩痢の音轉とあれど、いかならん。「はててんがう」「てんがう飲み」などの語、この時代のものに多く、今も京阪地方にては小供のイタズラなどをいふに用ゐる。のんこ、山口地方にては、今も小僧丁稚などのことをのんこといふ語源は考へ得ざれど、こゝも此の義にて、真に元服せざる髪の結ひ方にはあらじか。油地獄に、湯兒與兵衛がお吉に呼び止められて、茶店に腰掛くる様をいひて「煙草一ぶく致さうかと、腰うちかくるものん、こらし」といへるのん、こは、唯、蕩樂者といふ程のことゝもさこの、なほ考ふべし。のらといふ語は近松にも極めて多く見ゆ「のら、こ」といふ



より轉じて、遊樂者のことをいふものなるべし。伊達、奥州の伊達殿の名より出たりといふは附會の説なるべし。かしてだてなどのだてにて、今「色男」なるなどの上を略して「ぶる」といふと同様の語か。炮礮頭巾は、維新前まで老人などの用ゐしものなれど古は粹士社會にさへ用ゐられしもの、如く、平假名太平記の、景季が廓通ひの装束にも、炮礮頭巾紫の色にひかる、揚屋町などに見ゆ。はでてんがうのは、では所謂接頭語の一種なるべし。

道具屋はんくわいりうのめづらしからず、門をやぶるは日本の朝ひなりうを見よやとて、くはんの木、さかも木引やぶりうれうこ、されうこ討取て、なんなく過る月日のせきや。なまみだ、なまいだ、く、く、

道具屋跡

道具屋とは、寛文、延寶の頃に盛にして、元禄寶永の頃までも生存せし、大阪の道具屋吉右衛門といふ者の語り出まし節にして、井上播磨などを初として、義太夫にもこの節を語ることも多く、「國性爺」中の此の條の如きも、十行節付本によるに、道具屋節にて語るところなり。さてこの段は近松が國性爺合戦、九仙山中

の一節、「國性爺」莞爾と笑ひ、焚燗流は……貫木逆茂木押破り、向ふものを敲き伏せ、逃るを掴んで人礮、右龍虎左龍虎討ち取つて、難なく過る月日の關や、碁盤の上も關ふき越ゆる秋の風、云々の句をさながら取りたるものなり。こは、吳三桂が九仙山上の碁盤に對して、自ら顯はれ來る天下の形勢の變遷を見る一段なれば、「月日の關を過ぐ」などもいへるなり。右龍虎、左龍虎とは、國性爺の敵なる關の大將の名なり。なほ詳しくは、該書を見るべし。當時、國性爺願る流行せしかば、世人は、かゝる零碎の句にても、よく理解せしなるべし。

文彌「まよひ行共松山に、似たる人なきうき世ぞと、ないつ、エ、く、ワハく、笑うつきやうらん、身のはて何と淺ましやと、しばをしとねにふしけるハ、めもあてられぬふぜい。なまみだ、なまいだ、く、く、

松山は名高き「梳久物狂」の女主人公なる傾城の名なれば、恐くば、宇治加賀が門下、富松薩摩が語りしと聲曲類纂などに見ゆる「梳久狂亂笠」といふ淨瑠璃の一節なるべし。文彌は、天和貞享頃、大阪の岡本文彌が語り出せし淨瑠璃の一派

文彌節



かく用ゐるしものか。

此の悪戯念佛を取り出でたるは、かつは舞台の變化の爲にして、且つはかの「覺束なき行燈の影」に、やゝ打ちまめりし讀者の想像を、再び賑はしからしめて、遊廓といふ華やかなる感念を忘れざらしめんとしたるものなり。其の見物の中に太兵衛を黠中し、一妓の口を假りて其人品を叙せしむ、極めて巧妙して、且つ自然なり。

人立まぎれに、ちよこく走、とつ河内屋屋にかけこめば、「是はハ早く、はやいお出。お名さへひさしういはなんだ、やれ、めつら夢しい、小はる様、く、はる、く、で小はる様」とあるじのくハ花車しやがいさむ聲。問是門へ聞える、高いこゑして小はる、く、いふてくだんすな。おもてに、いやなりと天李があるハ居いの。ナツ走り、とつ河内屋を武藏本には走りつゝと河内屋とあれど、誤植なるべし。どつかは、即ち急遽といふと、河内屋をいひかけたるなり、河内屋とは即ち河庄のとなり、さて、どつかはといふ語は、突然の突、或はどばかりなどのとより来りし

語ならんか、どか儲すれば、どか損する〔松崎與次兵衛〕などのどかとも關係あるに似たり。はる、く、遠方のとにいふは常なれど、久し振りといふ義に用ゐしを、未だ他に見當らず。小春にかけたる洒落の爲に、濫用したる者にはあらぬか。花車は遣り手といふに同じく、遊女をとりまわすもの、名なり。こゝにては、河内屋の女主と見ゆ、さて、やりてを花車といふは、將棊の香車より起こりし洒落なりといふ説もあれど、北村信節は、却つてやりては花車の車より出でたる語なり、といへり。就れか眞なるを知らず。元來、まわすといふ語が例へば、吾妻遊女の名がくるくまわらざ賭ぢや……まわらして見や〔壽の門松〕わが宿にて新兵衛を廻いた格とは違うたぞ。〔薩摩歌〕などの如く、思ふ様に立ち働くといふことに常に用ゐらるれば、花々しき車即ち花々しく廻るものといふ程のことにはあらじか。李天は國性爺の主要なる敵役なり。國性爺の道行といひし縁にて太兵衛を李天に喩へたるなり。先にもいふが如く、國性爺は非常に流行したれば、この比喩も、當時の聴衆には、極めて明かなりしならん。  
地ひそかれくたのみやすと。いふも、れてや、ぬつと入たる三人づれ。小はるどの、りとう天とは、ない名をつけて下

された。先禮からいひましょつれしゆ、内々咄した心中  
 よし、いきかたよし、床よしの小はる殿、やがて、此男が女房に  
 持か、紙屋治兵衛が請出すか。はり合の女郎、近付に、地成て  
 おきやとのさばりよれば、「エイ聞共ない、調ゑしれぬ人のあだ  
 名を立、手がらにならば、せいだしていはんせ、地此小はるは  
 聞共ない」と、ついとのけ、またすりより、

ない名とは、唯なき名といふことにはあるまじ、異常なる名、「奇怪なる名」など  
 いふことゝさこゆれども、他に類例を見ず。云ひましょは「云ひまうさん」が「い  
 ひませう」と轉じて、さらに「ましょ」といふが如く發音するに至りたるものなれ  
 ば、元來は「ませう」なれども、なうをのど記すが如く「ましょ」と綴らん方適當なる  
 べし。心中よし、意氣方よし、心中とは「心の中」といふことより、誠意、忠實などの  
 義に轉じ、「無心中か、心中か」「心中立てする」などと用ゐること常なり、俚言集覽  
 に、色道大鑑を引きて、「心中、心のよしあしをいふ沙汰にあらず、まゐるしをまて、志  
 をあらはす謂あり」といへる、或は情死といふことに用ゐるなどは、更に轉じた

るなり、意氣方といふ語は近松中にも多く見ゆ、王様のいきかたは、又格別なも  
 のぢや、「浪枕」「武家のいきかた」なづまぬ御馬油地獄、男色たてぬく詞の優しさ、  
 其いきかたに猶ほ泥じ「宵庚申」などの類これなり、これ等の例より推せば、唯行  
 さかたといふことにて、まかたや、りかたなどの義に外ならぬが如し、狹斜語な  
 るいき、粹などの義なるも、亦、或はこのいき方より出でしにはあらじか。女郎  
 といふ語の起源、俚言集覽に詳らかなり、この語は、當時、妓女を稱する、極めて普  
 通なる語にして、粹人も、さらぬも、皆等しく用ゐたるものゝ如し、よ、ね、傾城など  
 の如き、特色ある語には非ず。置けや、は、命令法、置け、の後に、や、といふ、嘆辭を附  
 したるものなり、おきやと記すは、假名違ひなり。のさばりよるののさは、のさ  
 く、歩むなどののさなり、ばるは、忿ばるなどのばるなり、傍若無人の有様をい  
 ふ。仇名の仇は、仇花などの仇にて、實なきことをいふ。聞きともないのども  
 は、たうも即ちたくもの切約なり。ついでとは、つとに音便いを附したるなり。

聞共なく共小ばんのひきできかせて見せう。貴様もよ  
 いるんぐハじや、てんま、大さか三がうに男も多いに、紙屋

の治兵衛、ふたりの子の親、女房はいとことし、志うとはおぼ  
 むこ、六十日／＼に、問屋の仕切にさへおはるゝるやうは  
 い、十貫めちかいかね出して、請出すの根引のとハ、とう  
 ろうがおのでござる。我ら女房子なけれバ、しうとなし、親  
 もなし、おちもたず、身すがらの太兵衛と名をとつた男、色  
 里でせんじやういふことは治兵衛めにハかなハね共、かね  
 持た斗は太兵衛が勝た、地かねの力でおしたらばのふつれ衆、  
 何にかたふもしれまい。こよいの客も治兵衛めじや、もら  
 を、此身すがらもらうた。くは志や、酒だしや、く。

天満大坂三郷天満は、先づ紙治が住せる地方を指したるなり。寛文頃の大坂の  
 町敷を記せるものに、北組南組天満と三分したれば、三郷とはこれをいふか、攝  
 津名所圖繪にも、此の邸は大坂三郷の西端にして云々などの語も見ゆ。六十  
 日は支拂ひの期限なり、今日も京阪地方には二ヶ月拂の慣習あり。十貫目

は、勿論銀目なり、當時の小判、即ち享保小判一兩は、銀五十匁七分貨幣秘録によ  
 るなれば、十貫目は二百兩弱なり。金銀の價値のことは、なほ中の巻を参照すべ  
 し。根曳き、遊女を大夫といふより、彼の秦の始皇が、松に大夫の位を興へしと  
 いふ故事にとりて、大夫を松の位といひ従つて落籍といふことをも根曳きと  
 いひならはしたり。蟬螂が芥、莊子に曰く、猶蟬螂之怒臂以當車軼。みすがら  
 絶えて保累なきもの、このこととはきこえたれど、他に類例を見ず、唯毛引草に「ミ  
 スガラ昆布にて作る菓子の名なり」といふこと見えたり、當時の流行語にて、菓  
 子の名にさへ用ゐられしものか、貫は、はもと貫、らを、とあれど貫はひの轉、貫  
 は、うなり、貫ふとは、他の客の席より妓を貰ひ來ることなり。  
 更に詳らかに、小春と太兵衛との關係を叙し、其對話の間に、自ら紙治が境遇を  
 明白ならしむ。従つて、孫右衛門が折檻も唐突ならず、語々荷もせざるを見よ。  
 圓王、何おぢやんす。こよひのおきやくはお侍志ゆ、地追付、見  
 えましよ。おまへへどこぞわきであそんで下さんせ」とい  
 へ共、はたへた顔付にて、圓ハテ、刀さすかさゝぬか、侍も町人

もさやくの客。なんばさいても五本六本はさすまいし、よ  
うさいて刀脇ざし、たつた二本。地侍ぐるめに小はる殿もらふ  
た。ぬけつ、かくれつなされても縁あればこそお出合申なま  
いだ坊主のおかけ、調ア、念佛のくりき有がたい。地こちも念  
佛申ぞ。ヤ、かねの火入、させるしゆもく、おもしろい。ちや  
ん、く、ちや、ん、ちやん。紙屋の治  
兵衛、小はるくるいが杉はらが紙で、一ぶこはんしちりく  
かかみで、内のしんだいすきやれ紙の、はなもかまれぬ紙  
くず治兵衛。エ、なまみだ佛なまいだ、なまみだ佛なまいだ、  
なまいだ、く」と地あばれわめく門の口、人めを忍ぶ夜のあ  
み笠。

おしやんす、おほせられます、おつしやいます、おしやんす。おつつけ、おひつけ  
の音便なり。はたゑたはててん、がうのはてははたゑの約なり、この語今も京

阪地方に存す、語源をまらず、花車の語には無頓着に申談らしき顔附にてとな  
り、ハテはいでなせ、同じ趣の發語なり、他人の語を打ち消す如き語氣を有  
す。なんばなにはせ。まいしのしは一種の接續詞也。侍ぐるめのくるめは、  
くるめるといふ動詞より出づ、くるむとは物を包みこむ義なれば、ともになせ  
の意にも用ゐらるゝなり。こちも他の多くの人代名詞と同じく、指示代名詞  
より來れり、こちらをこちといふこと、古く大鏡などにも見えたり。鉦の火入  
煙管、鐘木、當時の淨瑠璃は、操人形はなきにあらねど、眼よりも、主として耳に訴  
へんとしたるものなれば、かゝることをも曲中に叙する要ありしなり。煙草盆  
の火入を鉦にしたりとなれば、火入の鉦とあるべきを音調の爲に轉置したる  
なり。紙屋の云々、皆紙の弄語を以てしたり、杉原紙は播州杉原といふ處より、  
製し初めたる紙の名にして、小半紙は杉原を二つに切りたる紙といふ義にて、  
今の所謂半紙、即ちこれなり。一分小判紙、ちり塵紙男の一分、この語近松にも  
極めて多し、がちりぐにかたもなく成り果てたりとなり、一分は銀の一分と  
さかせて、小判の縁語となし、さて、小判紙に塵紙を列ねたるなり。わめく、わつ  
といふなせのわに、めくといふ語尾のそひたるなり。夜の編笠、晝の編笠は、嘗

時の風俗として常のことなり、夜の編笠なるが故に、人目を忍ぶ様あるなり。太兵衛が念佛節の巧致を見よ、味者或いはん、かく巧なる唄を謡はしむるは、却つて太兵衛が人格の一致を害すと、これ言を知らざるものなり。アリストールが所謂プロバブル、イムボシ、ピリチイ（有るらしくして實は有り得ざること）とは即ちこれなり。詩人は、苟も眞實らしく信せられなば、有り得ざることを描くを辞せず。此の段に於てさらに注目すべきは、孫右衛門が登場の唐突ならぬことなり。凡庸の作者なりせば、花車が豫言を用ゐず、突然夜の編笠を取り出すべし、これ唯、讀者を驚かすのみ決してこれを樂ましむる所以に非ず。沙翁が進むは流星の間を破るが如し、常に前を承けて後を起すとは、又かくの如きものをいふにはあらじが。

「ハア、ちり紙塵わたせた。ハテ、きつ甚い忍忍び様。なぜは道入いらぬ、ちり紙塵。太兵衛が念佛佛こわくば、地南無阿彌なむあみ笠實もろふた」と引引ずり入入たるすかたをみれば、大小くすんだ武士真の正正おん、あみ笠編ごしに、ぐつとねめたる。まん丸眼めたまはた鼓きかね

念共、佛とも出ばこそ、ハア、といへ共共ひるまぬ顔顔。小小はる殿春、こち此方ハ町人、刀刀さいたことはなけれど、おれ已が所所にたく澤さん山な新銀新のひかり光には、少々少の刀刀もね捻ちゆがめ曲ふと思ふ物、ちり紙塵屋屋めがうるし漆こし程程なうすもと手手で、此身身すがらとはり合張ハ慮外ア千万、さくら櫻ばし橋から中町中くだりぞめ忽行いたら、とこそでハ紙紙くず踏ふみ踏に踏じつてくりよ踏。皆皆おあやア、と身身ぶり斗斗は男男を見見がく、町一町ばいには、かつてこそ歸り歸けれ。」

わせたわごごつたつたといふ程の詞なり、さてわといふ語は、思ふに「わたらせ給ふ」なをのわなるべく、せも亦其せ、即ち敬語のせなるべし。大小くすんだとは「大小を指したる」といふとらしくもきこゆれど、さる意味の「くすんだ」といふ類例絶えて見えず。なほ大小のくすみたる「派出ならぬ實着らしき」武士といふことなるべきか。さてくすむといふ語を、派手ならぬことにいふは、はやく鎌倉大草紙

にも其例あり「すくむ」の轉倒したるものなるべし。この「くすんだ」を「くすねたる」の音便と見れば或は「身につけたる」といふ意味の流行語なりしかとも思はるれど、恐くはさにはあらじ。新銀は享保銀なり。以前の四寶銀は名高き銀二銅八の比なる悪貨なれば、享保に改鑄せられ、銀八銅二の良貨となりぬ。この戯曲初興行の翌年、即ち享保七年に四寶銀は使用を禁せられたり。中町下りの下りは、あたりといふ程の義なれど、ことに場末又は遠隔の場所に用ゐる。漆瀝しも亦紙の名なり、海さとの比喩なり。おぢやはおいでやのいを省きてでをぢに轉じたるなり。はいかつて「憎まれ子世にはばかる」なぞのはい、かゝるに傍若無人の態なり。元來はい、かゝるは幅といふ字を活らかせたるものなれば幅の廣さに過ぎて、さしはりのある意味より、憚るといふ意味ともなり、自ら幅を取りて遠慮せぬ意味ともなれるなり。一語が正反對の二意をあらはすとは、「おほろび」おほろびならぬ「けしき」けしきからぬ「なぞ」を同意に用ゐると趣を等しうすといふべし。

「何故はいらぬ」といふ句を以て、武士に装ひし孫兵衛が、店先の賑はしきに躊躇せる様見ゆるもをかし。ことに巧なるは編笠越の眞丸眼玉なり、編笠取らば敲き鉦めさし眞丸眼玉の粉屋が孫右衛門にあらん様もなきを、如何にも侍らしくして、まかも粉屋たるを害せず。陰辨慶の太兵衛は、このまめりがちなる淨瑠璃に變化を興ふるに、好箇の人物といふべく、其渾らす口のなほ紙の縁を失はざるもうれし。且つ「紙屑ふみにじつてくれう」といへる口氣に、太兵衛が紙治に對する敵意の程充分にあらはれて、後に實際紙治に對せし暴行も、極めて自然に聞こゆるなり。此語なくして、唯戀の敵といふのみにては、紙治と見て、突然投げんとせしこと、いかゞはしくもさこゆべし。

所がらばか者にかまはずこらへる武士の客。紙屋くくとよ  
 しあしのうへさ小はるか身にこたへ、思ひくづおれうつと  
 りと、ふあいさつ成おりふし、内からはしつてきの國やの  
 すきがけうとい顔付にて、調た、今、はる様おくつて参りし  
 時、お客様まだ見えず。なぜ見と、けてこなんだと、ひとふ  
 しかられます。地りよくないながらちよつと、と、あみ笠押あけ  
 めんでいぎんみ、「ム、そでない、きづかひなし。跡つめ



てあつほりと小はる様春したゝるたる樽の生醬じやうゆ油。くはし花車(クラッセ)

や様(逸菜)さらば、後に設青菜のひたし物と、口合九らく立歸る。』

けうといけうとい(キョト)の如く發音すなどのけうといと同じ中古語のけうとい(なつかしからず)の約まりたるものなれども意味は轉じて落ち着かぬ様をいふなり。なせ——なとて——なで——なせ。内は己が奉公する家なり。そでないは、勿論紙治ならぬをいふなり先にせく程にくといひしに向へて見るべし。あどつめてとは嘗て大學にて研究せし時にも種々なる憶説を聞きたれども確かに後の約束を爲して變らず通はしむる様にすることなり重井筒にも徳兵衛が房(遊女)の客の座敷へ行かんとするを見送る時の語にさは(節季)の商ひ跡をつめやとあり後のことを取り詰めて動かぬ様にするといふことより出しものにて其つめはつめひらきするなどのつめに等し。したゝる樽の生醬油……後に青菜の浸し物どもに口合なり。前者は「しつほりと」といふにつけて「またゝるく」(まみまたゝるう)などの類近松にも多しといふに「樽の生醬油」と何の意味もなくいひつづけたるとなさけ有馬

の水天宮の類に等し今宮心中にも鹽物町のまたゝる樽といふ語見え曾根崎にも生醬油のそでしたゝるき戀の奴と見えたれば當時に流行せし口合ならんか。後者は花車に對して後逢はうといふ語に青菜の浸し物を列ねたるなり。かゝる洒落は思ふに和歌のかけ語より起りて徳川期に入りてここに流行せしものゝ如し、恰かも枕詞序詞の類が其位置を轉じて原語の後に來れる如きも奇ならずや。

紀國屋が二人の逢ふ瀬をせくことのいかに甚だしきかを示すは、その情死の因を作る所以なり。

至極堅志こくかた手の侍 大き無に興おけうし、「こりやなんじやナヤ、詞人のつら面をめき目利するハ、身茶をちや入茶ちやわん碗にするか。なぶられには來申さぬ。此方屋のやし敷きハ難ひるさへ出入難かたく、一夜他のたしゆ出つも留るす守へ届ことわり帳断(コトハリ)に付、むつかしいおきてなれ共、お名聞捷て戀何したふたお女郎卒、どうぞと一座何をねがひ、小者速もつれず、先刻參て宿を頼何、なんでも一生の思

ひ出。おなさげにあづからうと存じたに、いかな、つこりと  
 とるがほも見せず、一ごんのあいさつもなく、ふところ  
 錢よむ様に、扱々うつぶいて斗。首筋がいたみハいたさぬか。  
 なんなくわしや殿、ちや屋へきて、さんじよの夜とさする  
 ことハ、ついにない圖とぶつ、けば、

留守居。田舎武士らしく装へれば後にも見ゆる如く倉居敷に勤番するものど  
 なして、其屋敷の留守居役なる監督者に断るといへり。お女郎。花車殿は、こと  
 に田舎者の口吻を描きたるなり。竟にないづ。方圖なしなといふとき、の圖な  
 り、決してなき状態なりとなり。

「茶入茶碗にする」といひ、「懐で錢よむ」といひ、「産所の夜伽」といふすべて比喩の癖  
 新にして適切なるを見よ、又「小者も連れず」といふ一句、従者なきい譯けとし  
 て極めて自然なり。

「お道理、く、いわくを御ぞんじないゆへ、御ふしんの立はづ、  
 此女郎にハ、紙治様と申、ふかいお客がござんして、けふも紙

治様、明日も紙治様ご、わきから手ざしもならず。外のお  
 客はあらしの木の葉で、ばらく。のぼりつめてはお客  
 にも、女郎にも、得てけがの有物、第一つとめのさまたげとせ  
 くハどこしも親方のならひ、地それゆへのお客のぎんみ。  
 のつと小はる様もお氣のうかぬハ道理、お客も道理、だうり  
 だうりの中とつてあるじの身なれば、御さけんよかれが道理  
 のかんじんかんもん。サア、わつとのみかけ、わさわさわつさ  
 り頼ます。小はる様、はる様」と、いへども、何のへんとうも涙  
 ほろりの顔ふり上、

曰くは「曰く因縁なごいふに同じ。登り詰めては、熱心になることをのぼせる  
 といふ語より来りしものか、類例極めて多し。肝腎、肝文、人体の肝臓、腎臓より  
 取りたる暗喩なり。わさく、わつさり「陽氣に」といふ程の語ときこゆ。生玉心  
 中に、今度の清水焙には利がある、わつさり、振舞はうなせといへるも同じ趣な  
 り、本朝俚諺には、大鏡のわさく、まうことく、しうきこゆ」といふを引きて、わ

さくを解したれど、（淺）僮言集覽にもこれを引用せり、全く別種の語なり、或はわろりののは所謂なるものなり。

「はら〜」といひ、怪我のあるものといひ、親方のならひといひ、皆動詞を略せるは、口調の急なることを表はせるものなるべし、さるにても、嵐の木の葉ではら〜といふ句は、語を見ても、地にはあらで詞なれば、花車が語としても、かゝる真面目なるべき時としては、稍いかゞはしき比喩の如く感せらるれど、或は、當時に極めて普通なりし語にや、花車の語は、既に叙したる紙治との關係を再説したれば、重複の嫌あるに似たれど、これ亦、孫右衛門をして、花車が話の紙治とやら云々と説き初めしむべき用意なり。

「あのお侍様、おなじしぬる道にも、十夜の内にしんだ者ハ、佛に成、といひますが、定かいな。」（且那）「それを身がしることか、だんな坊主におといなされ。」（問）「ほんにそうじや、そんなら、といたいいことが有、あがいすると首くくるとハ、さだめし

此のどを切るかたが、たんといたいでござんしよの。」（喉痛）「いたたまぬか、切てハ見ず、地大かたなことはつしやれ、ア、小氣味のわるい女郎じや」と、さすがの武士も、うてぬ顔。（面）「はる様、あよたいめんのお客に、あんまりなあいさつ、ちつと氣をかへ、地どりや、こちの人尋て来て、酒にせう、ミ、立出るかどハ、宵月の、かげかたぶきて、雲のあし、人足うすく成にけり。」

十夜、十月五日より十五日までをいふ、無量壽經に、此に於て善を修すること十日、十夜なれば、他方諸佛の國土に善をなす千歳に勝れり云々、故に十夜といふと、柔草に見ゆ、この間に死ねば佛になるといふこと、當時の諺なりけん。ちやうは定の字音なり、はやう宇治拾遺にも、里人の夢にも此の定に見えたりなどの例あり。おほかたのこと、大概のことにしておけなごど、他をたしなむることにいふなる大概のことに等し。うてぬ顔のうてぬは、氣の通らぬ、氣のきかぬ、無意氣ななごいふ風の語にて、今までは、咎めながらも、洒落なぞ言ひぬた

りしを其氣味わるき語をきゝて、真面目に、無意氣なる顔をしたりとなるべし、  
無粹者をうてずといふは當時の廓語なるべく、梅川忠兵衛にも「彼の田舎のう  
て、ずにせびらかされて頭がいたい、忠様は未だ見えぬか」など見ゆ。雲の足人  
足うすくのうすくは、雲の縁語なり。

小春の語、あまりに突飛なるに似たれど、これ其思ひくづおれて恍惚たる「餘に  
發したる語なればなり、小春は殆んど自覺を失はんとする境に在ればなり、而  
して、これ皆、孫右衛門が後の物語りの道を拓けり。花車を戸外に出したるは、  
孫右衛門との密談の爲なるのみならず、これによりて、人通りの少きことを叙  
し、更に紙治を點出し來るべき觀察點の變化を滑らかにならしむる所以な  
り、すべて、説話に於て、觀察點を變化せんとする所は作者の最も苦心する所に  
して、源氏の桐壺の如きも、桐壺帝と更衣が老母との悲愁を、交々描き出でんと  
しては、多く勅使を用ゐて、其勅使の往復とともに、讀者の眼孔を彼より此に移  
さんとせり。此の段の工夫も亦、頗るこれに似たり。

天満に年ふる 千早 ちはやふる 神に へあらぬ紙様と世のわに 御注  
口にのる計、小はるにふかくあふぬさのくさり合たるみし

めなハ、舞今ハむすぶの神無月、せかれてあハれぬ身と成は  
て、あはれあふせのしゆびあらバ、それをふたりが、さい  
ご日と、なごりのふみのいひかはし、毎夜くの死かくご、  
地玉しるぬけてとぼく、うかうか身をこがす。にうり屋で  
小はるが沙汰、侍客で河庄方と、み、に入より、サア今宵と、  
のぞくかうしのおくの間、客はつきんをおとがひの、いご  
く計に、聲聞えず。詞かハいや、小はるがともしに、そむけた顔  
の、あのやせたことハい、心の中ハ皆おれがこと、爰にゐる  
とふきこんで、つれてとぶなら、梅田か、北野か、地エ、しらせた  
い、呼たいと、心でまねく、氣ハ先へ、みハうつせみのぬけから  
の、かうしにだき付、あせり泣。』

鰐口俚言集覽に「神社に懸る鉦の兩面なるをいふ」と有り、唯、口といふことを神  
の縁にて、鰐口といへり。おほぬさ大祓の時、までをさしたる串なり」と大辭林

に見ゆ。こゝにては唯あふいとを神の縁語にかくいひかけたるなり。腐り合ふとは常にいふ語にして、今の腐り縁などもこれなり。勿論注連繩の縁なり。結ぶの神無月結ぶは繩の縁にして、今は恰も神無月即ち十月なり。首尾とは「内の首尾」といひ、首尾してなせともいひ、今も首尾よくなど用ゐる。極めて普通なる語なり都合などいふに同じ。吹き込むで云々吹くといふに飛ぶといひ、梅といひ、北野天満宮の所在といふ、皆かの「飛び梅の縁を用ひたるなり」。「立出づる門」の景色より、主人公紙治を描き出せること、既にいへるが如し、魂脱けてとぼくうかくといひ、身は空蟬の脱け殻のといへるなど、紙治が状態を盡せるものといふべし、先の小春が恍惚として、異様の言語を發したるにむかへて、心中の因既に成れるを見るべく、且つは、無謀にも關の孫六を突き込みし所以をも知るを得べし、二人の子の親なる、二十七歳なる紙治をして、かゝる無謀の擧に出でしめしものは實に、其空蟬の脱殻なることを記憶せざるべからず。

おくの客が大あくび。思のある女郎おとぎのおとぎで、氣がめいる、かどもしつかな、地はしの間へ出てあんどふでも見て

氣をはらさふ。サアござれ」とつれ立出れば、なむ三寶と、か  
 うしのかかげにかた身をすぼめ、かくれて聞とも内にハしら  
 ず。圓なふ小はる殿。よひからのそぶり、詞のはしに氣をつ  
 ければ、くハしやが咄の紙治とやらと、心中する心と見た、  
 ちがうまい。しに神ついたみへは、あけんも道理も入  
 まじとハ思へ共、さりとはぐちのいたり。さきの男の無分  
 別ハうらみず、一家、一もんそなたを恨にくしみ、万人に死  
 顔さらす身の耻。親はないかもあらね共、もしあれば、ふか  
 うのばち、佛ハおろか、地ごくへも、あたたかに、ふたりづれ  
 では、落られぬ。いたはし共、せうし共、一げんながら、武士の  
 役、見ごろしにハ成がたし。定てかねづく、五兩、十兩は用  
 に立ても助たし、神八幡侍めうり、他言せまじ、地心てい残さず  
 打あけや」と、ささやけハ、手を合せ、

気がめいるのめいるは音の「めりかり」などのめるといふ語より出でしなるべし。洗み入ることなり。南無三寶南無は梵語なり歸命又は歸依と翻す三寶は佛法僧なり元來ものを祈る時に佛法僧を呼びかくる語なれば、懺きて救を乞ひる時などに信者の口より自ら發すべき語にして驚きし時の間投詞ともなりけるなり。憎しみは今も名詞に用ゐる語なれど頗る異様なり。久志幾活の形容詞にこそ悲しみなどの語はあれ憎しといふ形容詞より來れりとも憎しみとはいふべきに非ず思ふに久志幾活と志久志幾活と俗語中に混同せしなるべし。暖かに二人連で行かんとしてもさううまうは行かぬとなりこの「あたゝかに」といふ語唯寒さに對する語にはあらず生玉心中にも「たのれもせちがなせちがらぬ」奴ぢやもの銀も見ずにあたゝかに請取をせうわいなわ冷語なりなど見えたり。一げん一見即ち初會といふことをいふ當時の廓語なり用例いと多し。

坐敷を端の間に移したるは、勿論後に關の孫六を突出さしめん爲にして、又、戸外と屋内との状態を交互描出せん爲なれども亦稍暫く時を移して、小春をして其恍惚の状態を出で、明におさんとの契約を守らんことを決心する餘裕を與ふる所以なり、孫右衛門が訓戒の理由として、「一家一門の恨み憎しみ」(一身の恥「不孝の罰」とつけたることに最後の「不孝の罰」に冠するに「親は無いかも知らねども」といひたる配置の順序に於て、稍所謂反漸層に似たれども「地獄へも二人連では行かれぬ」といふ語に對しては、これ亦至當の順序なるべし。ことにこの「地獄へも云々」といへるは、心中を戒むる所以としては、殆んど唯一最良の訓戒なるべし。

「ア、忝ない有がたい、なじみ、よしみも無いわたし、地御せ  
いごんでの情のお詞、涙がこぼれて忝い。ほんに、色外にあら  
ハるでござんする。いかに、紙治様としぬるやくそく、親  
かたにせかれて、あふせもたへ、さしあひありて、今急に請出  
すことも叶はず。南のものとの親かたと、爰とに、また五年有年  
の中、人手にとられて、わたしハもとより、ぬしは、猶、一ぶん  
たゝず。いつそ、しんでくれぬか、ア、しにましよと、ひくに

ひかれぬ義理づめに、ふつといひかはし、地志ゆひを見合せ、あ  
 いづをさだめ、ぬけて出よふ、ぬけて出よと、いつ何時をさ  
 いご共、其日おくりのあへない命、開わたしひとりを頼みの母  
 様、南邊にちんしごととして裏屋住、地しんだ跡でハ、袖ごひ非  
 人のうへじにもなされうかご、是のみ悲しさ、わたしこても  
 命は一ツ、開水くさひ女と思召も恥しながら、其恥をすて、  
 死にてもないが第一、地しなずにことこのすむ様に、どうぞ、  
 頼やす」と、かたれば、うなずくしあん顔、

色外に願はるとは、や、遊女らしからの引喻めけど、かゝる流行語にやありけ  
 ん。謡曲に往々見ゆるげに思ひうちにあれば、色外にあらはる」といふ語より出  
 なるべし。指し合ひ、思ふに、これ連歌俳諧の用語より来りしなるべし。南  
 の元の親方、即ち、南の風呂の浴衣たりし時の親方なり。  
 「不孝の罰」といふ語に據りて、此に一のプロットを描き出しぬ。小春は、既におさ

んとの契約を守らんことを決しぬ、即ち不孝の罰といふ語にたよりて、此に、好  
 箇の口實を作れり。「語れば點頭く思案、顔といふ思案、顔の一語ことに妙なり。  
 孫右衛門は其意外なる語に對して、殆んど思案の外なきなり。

そとにハ、はつと聞おどろく、思ひがけなき男心、木から落た  
 るごとくにて、氣もせきくるひ、扱は皆うそか、開エ、腹の立、  
 地二年といふ物は、かされた。根生くさりのきつねめ、ふん  
 込で一打か、つらはちか、せて、腹いよか、と、はぎりきりきり、  
 口おし涙。内に小はるが、かこち泣、開ひけうな頼ながら、  
 お侍様のおなさけ、ことし中、來春、二三月の比迄、わたしにあ  
 ふてくだんして、地かの男のしに、くるたびに、おやまに  
 成て期をのほしく、をのづから、手をきらは、さきもころさ  
 ず、わたしも命たすかる。何のいんぐハに、死るけいやくした  
 ことぞ、思へば、くやしうござんす」と、ひさにもたれ、泣有様、開

「ふ、聞と、けた、思案有。地風もくる、人や見る」と、かうしのし  
やうじばたくと。」

木から落ちたるは、木から落ちたる猿といふ諺より出たり、この諺世話盡しに  
も見え、はやく吾吟我集の狂歌にも用ゐたり。腹癒よか癒よは癒んを癒うと  
音便にして、さらにこれを延べて癒ようの如く發音したるものが約まりたる  
ものなれば、聞きたうもないを聞きともないと綴るが如く、かく綴らでは、語勢  
を示すこと能はず。くだんしては、くだされましてなり、今も名古屋の方言に  
は、下されをくだれといへり、其くだれのれが更に省かれて、ましてのまの母音  
を省きたるものを後に附したるなり。ござんすは、ござりますなり。

小春が老母を思ふ述懐のみにては、なほ紙治をして殺意を決せしむるに足ら  
ず、乃ち更に小春をして他し男に依頼せしむ、此に、紙治が關の孫六は、初めて扱  
き放されたり。先に、他の客は、皆のき果てといひ、嵐の木の葉ではらくく  
といへるは、小春をして、この初會の客に依頼せしむべき原因を豫め作れるも  
のなり。「泣く有様」とは、かの立ち聞きせる紙治の眼に映じたる有様に思ひ及  
ばしめん爲にして、ここに「泣きければ」とはいはざりしなり。されば、こゝに初め

て、格子の障子を閉さしめて、今まで障子の開き居しとに注意せしめ、且つは、紙  
治が白刃を無効ならしむる準備を成しぬ。元來、冒頭の如き浮れ素見の賑はし  
き端の間にては、かゝる悲劇を演出し得べきにあらねば、豫め「宵月の影傾きて  
人足薄く」なりたる光景を描き置きぬ。かの油地獄に、節句の前夜の宵の程、市街  
のたゞ中にて、絶えて近隣を驚かさずして、殺人の悲劇を演出せしめし奇工と  
相對して、一雙の巧緻といふべし。

立聞治兵衛が氣も狂亂、「エ、さすかうり物、やす物め。どし  
やうぼね見ちがへ、玉しををうばわれし。きんちやく切め。  
切ふか、つかふか、どう老やうじにうつる二人のよこ顔、エ、  
くらハせたい、ふみたい。何ぬかすやらうなづき合、おがむ、  
ささやく、ほへるさま。胸をおさへさすつても、こらへられぬ、  
かんにんならぬ。心もせきに、せきの孫六一尺七寸ぬきはな  
し、こうしのさまより、小はるが脇腹、爰ぞと見極め、ゑいと



つづくに、座はとをく、是はと斗怪我けがもなく、すかさず客がとびか  
 かり、両手をつかんで、ぐつと引入、刀のさげ緒下手ばしかく、  
 かうしのはしらにがんじがらみ、あつかとしめ付、「小はるさ  
 ハぐな、のぞくまいぞ」といふ所に、ていしゆ夫婦立歸り、是  
 ハ、とさハげバ、「ア、くるしうない、詢しやうじごしにぬき身  
 をつき込突あばれ者、うでをしやうじにくくり置。思案あり、  
 なはとくな。地人立あれば所のさハぎ、サア、皆奥へ。小はる  
 おじや、いてねやう。」

ど性骨のどは今もど畜生、どめくらなどいふぞなり、他を罵るときに如何なる  
 名詞の上にも冠す。巾着切、後にも強盗といひ、鑽倉賊といひ、狐といひ、狸とい  
 ふ類は、皆意味なき熱罵の語なり。關の孫六は半二が東海道七里渡などにも  
 見えたる、名高き刀鍛冶なり、心もせきといふ語と、頭韻を成さんが爲に出し  
 たるが如くなれども、紙屋にしてこの名刀を携ふるは、又決死の準備あること

を示すにも足るなり。手はしかくは、てはしこくの轉訛なり。かんと搦み今  
 「がんじよからみ」といふ、岩盤即ちしかどからむといふ語より來りしものか、さ  
 れど其意味はむやみにからむことなり。

「拜み囁き、噂るさま」と連用を用ゐずして、「拜む、囁く」と連体にしたるは、箇々の語  
 を判明ならしめんが爲にして、其順序も亦巧なる漸層なり。孫右衛門、刀の下  
 緒にて治兵衛を縛したるは、眞の侍めけども、なほ「かんとがらみ」といふ語に、孫  
 右衛門が性格は存せり、等閑視すべからず。「心もせきに以下の急激なる動作  
 に伴ふ、急促なる語調に注意すべし。」

「あい」といへど、見しり有脇わきざしの、つかれぬ胸には、はつと、  
 つらぬき、闘狂すいきやうのあまり、色里には有習ならひ、さたな  
 しにいなしてやらんしたら、ナア、河庄さん、わたしや良よさ  
 そうに思ひやす。「いかなく、身しだいにして、皆は道いりや、  
 小はる此方こちへ、とおくの間の影は見ゆれど、くくられて、かう  
 し手がせにもがけバしまり、身はほんのふにつな栗がるる犬

におとつたいき恥をかくこきはめし血の涙、あぼり泣こそ不便なれ。」

わしや、わたくしはなること勿論なり、このはがやと轉ずるは御座りますのますが、やすに轉ずると同じく、わたしのしの母音が、はの母音と結合したるなり (in last)。沙汰なし、沙汰とは評判などの義なり、波の鼓其他にも、「これ沙汰」といふ語を、大評判などの意に用ゐたるが多し、されば沙汰なしは隠密といふ程の義なり。煩惱に繋がる、大繋がる、は紙治の縛せられしことを、犬の繋がる、といひなし、かの「煩惱の犬」といふ舊き諺を用ゐたるなり。この諺は古く鷹筑波などにも見ゆ、煩惱とは淫に屬し痴に屬するものをいふと智度論に見えたり。

「あいとはいへど」より「色廓にあるなら」に至るまでは、譜によれば、地の文なり。ことに調を緩うしたるは、さきの急調に對して、注目すべき點なり。「影は見ゆれど縛られて」といふ一句によりて、更に説話の觀察點を戸外に變じたる、唯、輕妙といふの外なし。

ぞめきもどりの身すがら太兵衛。「扱こそ河庄がかうしに立  
たハ治兵衛めな、投てくれん」と、ゑりかいつかんで引かつ  
ぐ「あいた、た」あいたとハひけう者。ヤア、こりや、しほり付  
られた。扱ハ、ぬすみほざいたな。いきずりめ、どうずりめ、と  
て、はたとくらはせ、「ヤ、がんどうめ、や、ごくもんめ」とてハ地  
とバかし、「紙屋治兵衛ぬすみしてしはられた」とよぼ、り  
わめけば、行かふ人、あたり近所もかけあつまる。』  
さてこそ「さありてこそ思ひし通りなれ」といふ程の義なり。縛り付けられた  
のたは全現在、即ちテアルといふ意味の助動詞にして、今日普通に用ゐる  
半過去のだとはことなり。元來このたは全現在、なるたより來りしもの  
なれば、當初は、かゝる用法、却つて多かりしならん。盗みはさいたのは、さくは、  
今もいふといふ語に、嘲罵の意を寓して用ゐることあり。但言集覽にも、追善清  
十郎奴俳諧の「餅をカチンとはさく」といふを引いて、アクタイ語なりといへり。  
この頭には、如何なることにも、此の語を用ゐたりと見ゆ。いさずりめ、どうず

らめ、すりといふは、今も常に用ゐる語なり。さて、いきなりといふ語は、女腹切にも、今宮心中にも見えて、いづれも罵詈の語なるのみならず、油地獄には、いき女郎奴といひ、毒門松には、いき傾城の恥知らずといふ語も見えたり。又丹波與作には、死に女郎のふりは、奴といふ語も見ゆれば、生き、死になどいふ語をば、或る名詞の語勢を強くする爲に用ゐたること多かりしものと覺ゆ。どうずりの、どうは、ど畜生、どめ、くらのだに同じ。そのどは、貪欲などの貪か、或は胴より來りしものか、なほ考ふべし。すりとは、今もいふ語なれど、すり取る義なりとも、佛語より來れともいへり。くらは、せは、鐵拳を喰はしめよといふ義にて、この書の下巻にも同じ意味に用ゐたり。今日もいふ語なり。がん、盗め、獄門め、がん盗は三才圖繪にも、強盗の字を讀めり。獄門とは、獄門の刑にあふべき者となり。勿論、唯罵詈の語なり。蹴飛ばし、走らかすなどの語、古く平家盛衰記などに見えたり。飛ばし、の音便なるべし。

内より侍とんで出、<sup>飛</sup>「ぬす人よ、バリハおのれか、治兵衛が何ぬすんだ、サアぬかせ」と、太兵衛をかいつかみ、土にぎやつ

とのめらせ、おきればふみ付、ふみのめし、ひつとらへて「サア、治兵衛、ふんで腹いよ」と、足本につき付るを、しはられながら、ほうかまち、ふみ付、ふみさがされて土まぶれ。立あがつてねめ廻し、<sup>上</sup>「あたりはやつばら、よふ見物しておませたナア、一々につら見おぼえた、<sup>近</sup>へんほうする、おぼへておれ」と、へらず口にて逃出す。立よる人々どつと笑ひ、「ふまれてもあのおとがひ、橋からなげて水くらはせ、やるなく、とおつかけ行。」

のめらせ、今もフチノメスなどいふ、ハ、メスは、のめらすの略なり、思ふに、のびるなどの語より、波行と麻行との普通にて轉せしものか。頬がまちのかまちは、床の上、上り端などの横木をいふ語なれば、頬の兩方に出張りたる骨をいふにか、今物語には、頬骨のことを唯かまちといへり、今いふ頬桁といふ語にむかへて見るべし。踏みさがされてとは、隈もなく踏むことをいふなるべし、今もさ

わがさがすなどといふ語、上方にあり。へらす口のへらすは和訓栞に不滅の義なるべしといへれど、思ふにへり下らぬことなるべし。義長は少時は少しもへらぬ体に打ち笑つて「太平記」されど祐慶すこしもへらす「盛衰記」など、俚言集覽にも引けり、この類戦記文に尠なからず。

「橋から投げて水喰はせ」といひて、太兵衛の運命は暫くすべて讀者にも曲中の人々にも不明ならしめたり。戯曲より一の稍著しき人物を没了するには、良工は常に多少の用意を忘れず、如何に其運命を想像すとも、全体の構造に於て差し支へなき人物に對しては、特に讀者が想像の餘地を與ふ。

此に至つて否な、此の以前より、敏明なる讀者は、既にこのにせものなる武士の本体を疑はざるべからず、其小春を訓戒する語に於て「がんどからみ」といふ語に於て、業に既にこれを疑はざるべからず、今又奮然として治兵衛を救ひぬ、讀者の疑念はいよく加はり來れり、これ正に粉屋の孫右衛門の正体を顯はすべき恰當なる時にはあらずや。

人立すけ、侍立よつて、しはりめとき、づきん取たるめんてい。「ヤア、孫右衛門殿、兄じゃ人。アツア、めんぼくなや」とど

うと座し、土にひれふし泣いたる。「扱は兄御様かいの」と、走出る小はるが胸ぐら取てひつすゑ、聞く生めきつねめ。地太兵衛よりさき、うぬをふみたい」と、足をあぐれば、孫右衛門

うぬとはおのれの轉化なり、うさきををさぎといふにむかへて思ふべし、ア行と異なれども、れは勿論、良行略音にて省かれ、のはぬに轉じたるなり、とぬとの互に轉することは、中古語に極めて多し。

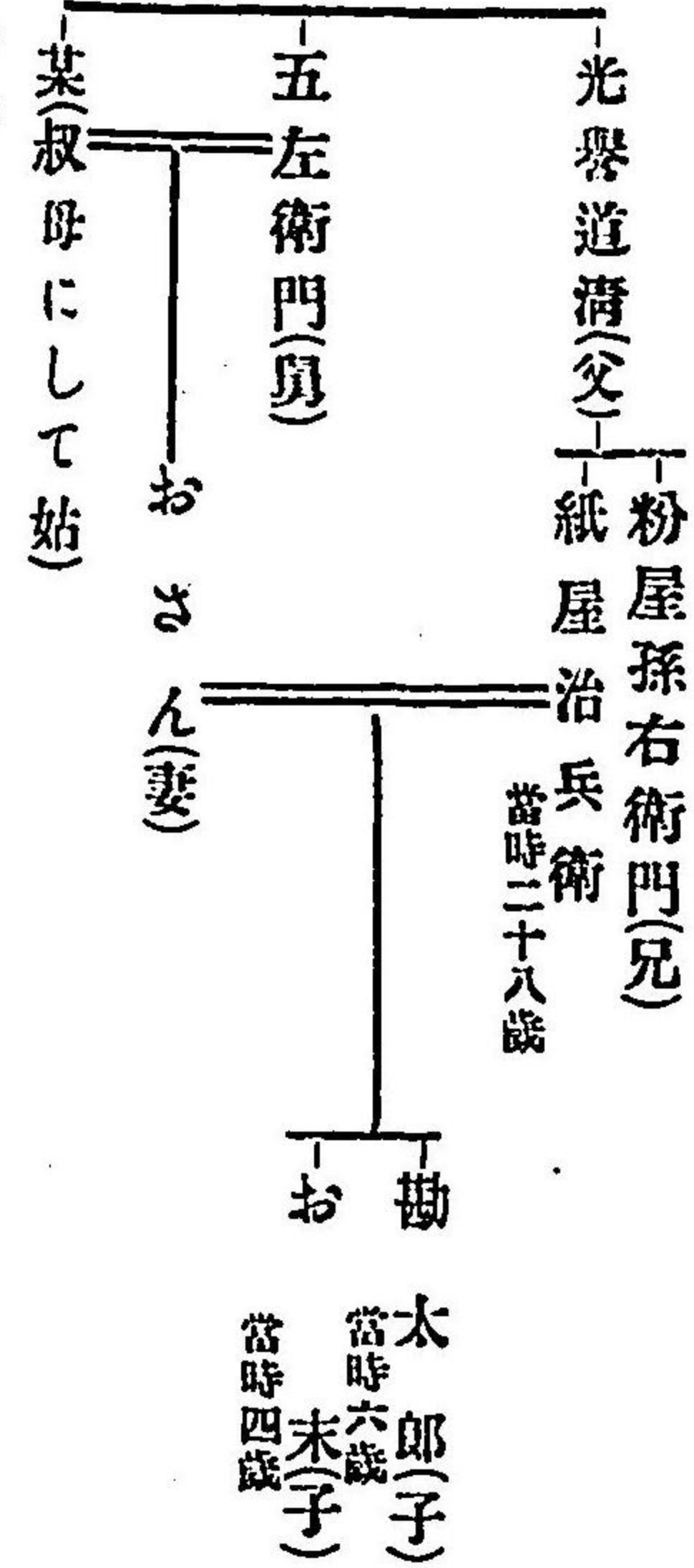
孫右衛門がなほ頭巾を着けたるは「客は頭巾の願の」といふ句に、既にあらはれたり。「さては兄を様かいな」と走り出でたるは、流石に小春の女らしき無分別なれども、亦よつて以て其性格を顯はし、かねては、かのこの十月に仇し名を云々の句とともに、讀者をして、少しく小春の舉動に疑點を挿ましむる所以なり。巢林子は、ここに其世話物に於ては、常に先づ疑はしめて、而して后これを救ふ、決して、唐突なる變化を以て、讀者を驚かすことを免めず、これ出雲半二等と選を異にする所以の一なり。

「ヤイくく、其たはけからことおこる、人をたらすハゆ

う女のしやうばい、今目に見えたか。此孫右衛門は、たつた  
 今、一げんにて、女の心のそこを見る、二年あまりのなじみの  
 女、心てい見付ぬうろたへ者。小はるをふむ足で、うろた  
 へたおのれがこんじやうをなぜふまぬ。エ、せひもなや、弟  
 とはいひながら、三十におつか、り、勘太郎、お末といふ、六ッ  
 と四ッの子の親、六間口の家ふみしめ、身だいつぶる、わ  
 きまへなく、兄のいけんをうくることか。志うとハおはむこ、  
 しょうとめハおばじや人、親同然、女房のおさんは、我ために  
 もいとこ、むすび合、重々の縁じや、親子中、一家一もん、  
 さんくハいにも、おのれがそねさきかよひの、くやみより  
 外、よのことは何もない。いとしひはおばじや人、つれあひ  
 五左衛門殿ハ、にへもないむかし人、か、のおい子にたをさ  
 れ、娘をすてた、お三を取かへし、天満中に恥か、せんとこの腹

立、おばひとりの氣あつかひ、てきに成、みかたに成、

たわけとは今も名古屋地方なごにて常にいふ語なり、思ふに「いわけなきこと」  
 を「いわけたること」とも古より用ゐれば、この「いわけ」の接頭語「い」が同じ接頭語  
 たと變じたるものなるべし、愚鈍などの意なり。たらす、倭名抄に癡狂をたふ  
 るとよめり、其使役相たふらすたふらかすともいふのふを省きたるものか。  
 勘太郎お末といふ云々、こゝに曲中に顯はれたる、紙治が一家中の人々の關係  
 を圖示せん。



おのれはやく宇治拾遺などにも、二人稱に用ゐたり、元來、一人稱としては卑下  
 の語なれば、輕蔑罵詈等のめたには、二人稱にも用ゐらるゝなるべし。いとし

いは、いどは、いさの轉訛なり。にべもない昔人に、にべもなくついたつ蟬や旅の宿、給猿籠などの例多し。にべとは、元來弓を造るに用ゐる粘着性のものなれば、粘り氣のなき情愛のなき、卒直なるなどの意なるべし。昔氣質の頑固にして、この遊惰の極に達したる元祿享保の若者に對して同情なきは、さもあるべきことなり。氣扱ひといふ語、他に用例を見ず、左右に氣がねして、種々に扱ひなすこと、はきこゆ、倒され、用法頗る異様なり。今もいふなる商買上の語をかり用ゐしものか。

かの太兵衛が嘲罵の中にありし一家の關係を詳らかにして、更に中巻の伏線を設く、天滿中に恥か、せんといふ語と、五左衛門が人格とは中巻の大破綻の所縁なり。

地やまひに成程心をくるしめ、おのれが恥をつつまるゝ、恩知らず。此はちたつた一ツでも行ききにまとか立。詞かくてハ家も立まじ、小はるが心てい見とどけ、其上の一思案。おはの心もやすめたく、此ていしゆにくめんし、おのれが病の

こんげん見とどくる。女房子にも見かへしハ尤心中よしの女郎、ア、お手がら。地けつかうな弟を持、人にもしられし、粉屋の孫右衛門、まつりのねりあゆか、氣ちがひか、つるにささぬ大小ぼっこみ、くらやしきの役人と、小づめやくしやのまねをして、ばかをつくした此刀、すて所がないわいやい。小腹が立やら、おかしいやら、胸がいたいとはぎしみし、泣顔かくす十めん、小はるハしうむせかへり、皆御道理と斗にて、詞も無涙にくれにけり。

包まるゝは連体にして、恩といふ字の形容の如くもきこゆれど、なは終止なるべし。これまでは、叔母の苦心を叙して、さらに「恩しらす奴」とよびかけたるなり。行く先に、的が立つ、後來到達すべき標的が定まる、即ち運命が悪と定まりて、決して良きことはなしとにか、當時の諺なるへし、的を立つとは、どにかく、的を据え置くことをいふ。祭の練り、衆今も、或は甲冑などをさへ着て、祭日に練り歩

く者のことなり、衆とは、元來名詞の複数を表す語なれども、此の頃には、夫婦の衆、「よい衆」など、少しく丁寧にいふ語として用ゐられ、複数の意味なきこと多し。ぼつこみは、はりこみの轉訛なるべし、さすといふことなり。倉屋舖、諸藩の倉屋舖といふもの、大阪にありて、江戸、京都の藩邸などの如く、留守居を置けり。小詰役者、劇場新話に曰く、制外子、只制外ともいふ、俗に色子、小詰のたぐひにて、町内の子供屋、野郎茶屋なり、嬉遊笑覧にも影間十四五なれば芝居へ出すといひ、未だ芝居に出ぬを影間といふことなど見ゆ。より三人づゝ、御役にて、舞台へ出す、腰元など多く入用の時はこれを遣ふ、云々。これにて、畧、小詰の何者なるかを推測し得べし。原太夫が「隣の疝氣」にも「つめ」の役者も、今はしやれて、手さへ付ると、我が方からとんぼり返り、など見えたれば、今のトツタめさしことをも、またるなるべく、大盡舞考證に引ける役者目利講には、二朱判吉兵衛が初舞臺の有様を叙して、我等は、座敷にての藝にて、こんな舞臺へ出たことがないぞと、樂屋へ引きかへしては、いらんとせらるゝを、小詰役者、是はといろくといめる。とあれば、申し上げますなどの類なるべし。小詰といふ語意は、樂屋の部屋の小さき所に詰めこまれ居ることをいふに、かないわいのわいのわいの仮名

を、武藏屋本には、ハに作れり、或は、古き丸本をさながら寫したるものか、丸本の仮名など、勿論據り所とするには、足らねど、丸本のハといふ仮名は、多くは、をわとよむ所に用ゐたれば、勿論、仮名遣多けれども、ふと、打ち傾ぶかるゝまゝに思ひよりしは、或は、今日のワ、イといふ歎辭は、元來、これを見よ、まことにおはしけるは、といへば、(宇治拾遺)など、は、といふ歎辭の後に、いといふ音便を附したるには、あらじか、本居翁が遠鏡などにも、ワ、イとあれど、なほ考ふべきに似たり。齒きし、みは、齒きし、りなり、さし、むも、さし、るも、元來は、同じ語なるべし。詞も、なみだとは、皆、お道理とのみいひて、他に「詞もなし」といふことを、涙にいひかけたること、勿論なり。

孫右衛門が長物語は、作者の頗る苦心せし所なるべし。本籍中には、かく長き物語りは、唯この一箇所のみ、巧なるものに非ざるよりは、多く、かゝる長物語りに於て、語勢を失ふが如し、ざるを、親、全前の叔母の爵、小春に對して、不孝の爵といひしに、思ひあはすべし、といふことを、主眼として、先づ一家の關係を説き、更に自己が、武士に装ひし所以をも、順序をも、すべて、讀者に明瞭ならしむることにも、よく、其悲憤の口氣を失はず、其プロットを、讀者に告ぐる語が、直ちに、紙治を

罵り紙治を戒むる語となりぬるに注目すべし。且つさきに群り來りし嫖客等をして、悉く太兵衛を追はしめしは、無意味なるが如くにして、實はこゝにこの悲劇を演出せんが爲なり。又徒らに看過すべからず。心緒錯亂せる紙治は、勿論直ちに答へ得べきに非ず、即ち泣き伏せる小春かの長物語りの爲に、動もすれば讀者が心象より逸し去らんとする小春を點出して、紙治をして、涙を飲んで、聲を發せしむべき餘裕を與ふ。蓋し、既に分別せし小春は、無分別なる紙治より、先づ語を成すべき力あるべきなり。

大地をたゝいて、治兵衛「あやまつた、く、兄じや人。三年先より、あのふるだぬきに見入れ、地親子一門、さいし迄、そでになし、まんだいの手もつれも、小はるといふ、やじりきりにたらされ、こうくハい千万。ふつつり心残らねば、尤、足もふみ込まじ。調ヤイ、たぬきめ、きつねめ、やじり切め、地思切たせうこ、是見よ」と、はだにかけたるまもりふくろ、月かしらに一

枚づつ取かハしたるきしやう、あハせて廿九枚、もどせば戀もなさけもない。こりや、請とれとはたと打付。「兄ぢや人、あいつが方の我らがきしやう、數あらためて請取て、こなたの方で、火にくべて下され。サア、兄きへ渡せ。」心得やしたと涙ながら、なげ出すまもりふくろ。

兄じや人、母じや人などいふ、或やは者ともかけれど、實はヂヤなるべく、兄である人「即ち兄なる人」のなるを近代語にていひしものなるべし。そでになし、但言集覽に衣の身に對して袖の如くすることにて、身にするの反對なるべしといへり。「年季の下女を身になして、隠すことも語りしは……卯月の紅葉」でもつれのは接頭語なり、もつれは糸の亂れもつる、ことより取りし比喩なり。ふつ、ふつと切る、ふつ、ふつと切るなどのふつ、ふつ、いかに同じもの、切る、この副詞なれば、断然など、同じ意に用ゐらるゝなり。やじりきり、庫の後を穿つ盗賊をいふ語。起請、誓紙なせとつ付けて用ゐること多し、語意は



かのうけひ(神意)をうけていふことにて、誓ひのことにいふなど、同じく信を起こして佛神の意を請けいふといふことか、法然上人の一枚起請などいふものを見れば、起請といふこと、必しも誓詞のみならず、さて起請といふ語は白川鳥羽院頃より有りしものなること、一枚起請、二枚起請、七枚起請、百枚起請などいふことあることなど、俚言集覽に詳し。月頭の起請とは、かの百枚起請などの遺風か。これやは、これはの轉と、これといふ代名詞より、呼び掛けの義となりしものに、やの接続したるとあり。このは後のものなり。くべて云々のくべは、ふるき語なり、はやく竹取物語に見ゆ。

始終むせびかへりし小春、涙ながらに守袋投げ出まじ小春決して、眞に狐に非ず、古狸に非ず、既に敏明なる讀者をして、多少の疑念を狭ましむべし。されども殆んど分別を失ひ盡し、紙治が狐とし、古狸とせしも、紙治が兄なる孫右衛門が意外なりし小春の語に、懃くの餘、人をたらすは遊女の商買と断せしも、眞に「づれも御道理」なり、唯、局外者なる讀者のみ、何等かの秘密の存すべきことを豫想せん。

孫右衛門押ひらき、「ひい、ふう、三イ、よ、十、廿九枚、かずそろふ、

外に一通女のふみ、こりや、何じや」と、ひらく所を、「ア、そりや見せられぬ、大じのふみ」と、取付を押のけ、あんどろにて上がき見れば、「小はる様まいる、紙屋内、さんより。」よみもはてず、さあらぬ顔にてくハ、いちうし、調、是、小はる、さいぜんハ侍めうり、今は粉屋の孫右衛門、あきないめうり、女房かぎつて此ふみ、せず、我一人ひけんして、さあよう共に火に入る。せいもん、にちがひハない。ア、忝い。それでわたしが立ます」と、又ふし、づめバ、「ハア、く、く、調うぬが立の立たぬとは、人がましいい。

これや何ぢやのこれやは、かのこれはの轉なり。侍、冥利、商、冥利、などの冥利は、幽冥より得る利益といふことにて、好運などといふに等し。其冥利をかけて己が言の偽なきことを誓ふといふことなり。女房限つて、我が最も親しきものなる女房をも、秘密の外に限り出して、何人にもきかせじとなり。立ちます面

目が立つとなり。

上巻の大破綻は既に成りはてぬ、されど、全曲の大破綻、或は大團圓に向つて、更に何等かの準備なかるべからず、讀者が小春の人格、或は愛情に對する疑念を、さらに深くするは、讀者が小春に對する感興を更に高くする所以なり。おさんが手紙はこれが爲に取り出されたり、明かなる分別を有し、且つあらゆる事情に通せる孫右衛門は、殆んど小春が心裡の一切の事情を諒し、了りぬ。小春が強て隠さんとせるものを、強て見んとしたるは、彼が胸裡に、なほ、小春が今日の述べに對して、妙なからぬ疑念あればなり、彼は固り紙治の如き、蕩兒には非ず、されども、亦五左衛門が如き、頑固老人に非ずして、元祿、享保の壯年なり、妓女に對しても、多少の同情なきには非じ、紙治は、既に無分別の紙治なり、既に一通の女の文に對して、答り立てすべき餘裕を、だに有せざるなり。

是、兄じや人、地かだ時片もきやつが面つらが見度ともなし。いざござれ。去ながら、此無念、口お惜しき、どうもたまらぬ。今生の思ひ出、女が面つら一ツふむ、ごめんあれ、と、つとよつて、じだ

んだ太ふみ、詞エ、しなしたり。地足かけ三年、戀しゆ床かしも、いとしか可ハいも、けふ今日といふけふ今日、たつた此あし一本のいとまこ乞ひと、ひたひぎハ際をはたとけて、わつと泣出し、兄弟づれ歸るすがたもいたく、敷跡を見送り、聲をあげ、なげく小はるもむごらしき。ふしん無中か、心中か、誠のこゝろハ、女房の其一筆ふでのおくふかく、たがふみも見ぬ戀こひのみち、わかれてこそはハ三重かへりけれ。

きやつはか(彼)やつの轉なり。だんだんだだばたすることなり、今も小供など、のぞたばたすること用ゐる。まなしたり、爲成したり、即ち爲し果てたりといふ義なるべけれど、常に失敗したりたること用ゐる。足かけ三年といふ、丸三年に對して、三年に跨りし月日といふことなれば、足かけは跨ると同じ暗喩か、孫右衛門の語に「三年餘りの馴染」といひ、紙治の語に「三年この方といひ、月頭の誓紙二十七枚といひ、こゝに足かけ三年といひ、中巻におさん語に「二年といふもの、巢守にしてといひ」橋盡した、丸三年も馴染まひで」といへり、かくまで

馴染の年限を反復したるは、他の曲には見えぬ例なり。思ふにおさんの手紙孫右衛門が工夫、或は五左衛門さへ小春の名を熟知せる。紙治が太兵衛に取られては男が立たぬといへるなど、皆其馴染の久しきこと、従つて評判の高きことより起りしことなれば、かくは反復せるにはあらじか。ゆかしは中古の語とや、異なり、いといは、いはし、の略なり。其。一。筆。の。奥。深。く。誰。が。ふ。み。も。見。ぬ。戀。の。道。奥。深。き。道。な。れ。ば。誰。も。踏。み。て。も。見。ず。と。な。り。勿。論。い。く。野。の。道。の。遠。け。れ。ば。ま。だ。ふ。み。も。み。ぬ。といふ歌を用ゐたるなり。

上巻は、主として小春と紙治との關係を叙したり、而して二人が戀を初めとして、太兵衛が横戀慕孫右衛門によりて間接にあらはされたる五左衛門が氣質治兵衛が抜刀を揮ふが如き無分別、小春がおさんの依頼を承諾し太兵衛が戀慕を斥けし意氣地等すべて、下巻の心中に到達すべき原因は、こゝは成熟しぬ。中巻以下は、この上巻中の秘密を開くことゝ、其結果を速かならしむることゝ、を主とせるが如し。

上巻に於ては、小春が全く主人公となれり、而して其結尾も亦小春の悲劇なり。されば、こゝに少しく小春が性格及び其戀を説くの要あらん。小春は意氣地強き傾城なり、この意氣地の爲めには、其戀をさへ犠牲にし、而して其戀を貫かんが爲には、其身を犠牲にせんとしぬ。されど其戀は、果して逍遙子のいふが如く意氣地より來りしか、太兵衛が横戀慕は、果して小春が紙治に對する戀愛を切ならしめしか、こゝは、なほ頗る研究すべき問題なるべし。近松の世話物に於ては、男よりも女の分別あることは殆んど常のことなりといふべく、これを傾城以外のものに見ても、歌念佛のお夏すら「騒がす袖にて隠し……忍んで逢ふのは清十郎、見通しにして給らうか、沙汰をするならするといや、幸、及物もこゝに在る」と、斷乎として誓文を迫る分別あり、卯月の紅葉のお龜すら「なうらたへてちや、心を納めて下さんせ」といふ分別は存せり。小春が他の行爲に於て分別ありといふことのみは、その紙治に對する戀が無分別の戀に非ずと斷ずる所以となすには足らじ。且つ、太兵衛の如き人物は、曾根崎に九平次あり、今宮心中に由兵衛あり、生玉心中に長作あり、壽の門松に彦作あり、皆敵役として、破綻の所縁を作るべき人物として、且つは、これによりて、女主人公の美貌等、男人の戀着すべき性格を間接に寫さんが爲めに描かるゝものなるが如く、すべて、主人公たる男女が、戀愛の熱を高むべき所縁と成たるものを見ず。小春が心中の刺

那に至りて、なほおさんに對する義理に思ひ及びしものは、これ亦分別を混せし戀なるが故に、相抱いて情死することを以て、一切を抛下し、圓滿なる満足を得ざりしが爲なりとは斷じ難きは、治兵衛もなほ、小供に對する未練を離るゝ能はざりし(逍遙子は、これを咎むべきに非ずといへども)にむかへて明かならん所詮、予は、此の點に對しては、未だ逍遙子が解剖に賛同すること能はず。紙治も小春も、等しく、人間として相慕ひ、相戀へり、其戀愛の途に圓滿なる結果を得べからざるを知るや、其の圓滿を妨ぐる所以なる浮世の羈絆を脱せんことを企てたり、小春が一度びおさんの手紙に接するや、其義理の爲に、一たひ其戀を犠牲にせんとし、孫右衛門の意見に接しては、老母の悲嘆にさへ思ひ及びて、情ありげなる武士を頼りに、紙治をも思ひ返さしめて、浮世的圓滿の境地に歸らんとさへ企てぬ。これ治兵衛が、中巻に於て、眞の前に頭を下げて、身代持直し御目に懸くれば云々といひし瞬間の分別に似たり。されど初會の武士に、あらぬ噂話を口走るまで恍惚たるべき戀愛の至情は、遂に思ひ切り得べきに非ず。末段、治兵衛に罵らるゝに及んで、斷乎として誓紙を投げ出ましは、紙治が、一たび小春を忘れて脇差に手をかけし(中巻末段趣には似ずや、中巻のおさんが自白

にして、今暫く遅かりせば、小春は必ず失戀に死すべかりしなり。

中の巻

ふくとく福徳に あまみ天満つ神の名をす直ぐに天神はし橋と行通ふ  
 所も神のおま御前へ町替いとなむわざも紙見世神店に、紙屋治兵衛と  
 名を付て、ち千は早振降る程買かいにくる、かみ紙は正直じき直し商やう賣ば  
 いハ所柄がら老なりし縮にせ縮なり。」

福徳には天満つの満つの序なり。天満神はかの名高き天満の天神なり元來、  
 この地を天満と稱するは天満宮鎮坐ましますが故なりと名所圖繪に見ゆ。  
 天神橋はかの淀川三大橋の一なり。千早振る程買ひに來る神の縁にて其枕  
 詞千早振といひ降る程多きを云ふ子虚賦獲獸若雨と俚言集覽に見ゆ買手あ  
 りといひかけたるなり。かみは正直神は正直の頭に宿るなどいへばその語  
 をとりて賣る紙に不正なるものなしといひかけたり。まにせの語源は未だ  
 考へ得ずにせは或はみせの轉訛かとも思はるれどいかにや。  
 「歸りけれといふ筋を受けて直ちに紙治の家に移りぬさて其店を極めて繁昌

せるが如く叙せるは女房おさんをして「まだ商買の尾は見せぬ」といはしむべ  
 き準備にして従つておさんが伶俐なる性格を描くべき一助なり。

夫が、こたつ火にうた假ね寐を枕屏びやうぶ風でかせ防ふせぐ、そと外ハ  
 十夜の人通り見世と内とをひとし締めに、女房おさんの心配  
 ばり、日假ハみじかし夕假めし時假市のかハ迄行使行にいて、玉は何  
 してゐることぞ。此地三五郎めがもどらぬことかぜ風がつめた冷  
 い、二人の子供がさむ寒からふ、おすゑ末が乳飲ののみ飲たいじ時ぶん分  
 もしらぬ。あほう阿房にハ何が成辛しん氣きなやつ奴じサや」と、獨百こと。」  
 うたゝうたゝ寐寐はううたゝつつ寐寐なり夢現の間にありて熟睡せざるをいふ。十夜の人通  
 り、十夜には別時念佛を行ふこと洛東真如堂より起こりて何所の寺にも行へ  
 ば參詣人の通行多きなり小春が十夜の中に死んだものは云々といへるにむ  
 かへて見るべし。市の側名所圖繪に、市場は天神橋北詰上手より龍田町まで  
 濱側通三町許の間なり天神橋より下手は市場に非ず市の側といふなりと見

え、市の側の園も載せたり。市場は、問屋、仲買等の軒をならべし所にして、市の側といふ所が、却つて、小賣商買の繁華なる町なり。市の側とは、元來、市の傍の義か、今日も大阪の町名には、天満のみならず、堀江市の側などの類往々存せり。此の三五郎のもぢらぬことの、のは、戻らぬことに、屬する指示代名詞にて、この、かくも戻らぬことよといふことなれば、此の阿房奴の、この、とは、其趣ことなり、も、ごるは、勿論、歸るなり、も、と、みなも、ご、な、ご、の、も、ご、即ち、本、元、などの意を働かせたるものにて、戻、も、ご、とは、別種の語なるべし。阿房には、何がなる、何が阿房に成るかといふことにて、其由來を疑ふ義より、唯、阿房といふことを深く嘆息せしまでの語なり。丹波興作にも、おじやれ出女などの義の身には、何がなる、といへり。ま、ん、き、は、ま、れ、た、い、なり、倭訓栞には、心氣なりといへれど、いか、あらん、辛氣とかくは、俗字なるべし、(俚言集覽に異説あり、考ふべし)。

うたゝ寐の紙治と、内外に心を配るおさんと、これ最も二人が性格を著明ならしむべき好資料なり。文体は、説話なれども、其の目的は、人格の叙述なり、偉人の筆は、決して等閑の語句を容れず、一語一句、悉く全班の目的に對して何等かの意義を有せり。

「調か様、ひとりもどつた」と、地走歸る、兄むすこ。調チ、勘太郎もどりやつたか、お末や三五郎は何とした。「宮にあそんで、ちちのみたいとお末のたんとなきやりました。」「そうこそ、そうこそ。こりや手も、足もくぎに成た。」と、様の寐てござる。こたつへあたつて、あたたまりや。地此あほうめ、どふせう」と、待かね、見せにかけ出れば、三五郎たゞひとり、のらのらとして立歸る。調こりや、たわけ、お末はどこに置いて來た。「ア、ほんに、どこでやらおとしてのけた。たれぞひろたかしらん迄。」とこそ尋て來ませうか。「おのれ、まあ、大じの子を、けがでもあつたらぶちころす」と、地わめく所へ、下女の玉、お末をせなかに「おふく」としや。調泣にないてござんした。三五郎もりするなら、地ろくにしや」とわめき、歸れば、調チ、かわひや、く地ち、のみたかろふの」と、おなじくこたつにそへちして、調是

玉 其あほうめ、おぼへる程くらはしや、く」と地いへ、三五  
 郎かぶりふり、いやく、たつた今、お宮でみかんを二ツづ、  
 くらハせ、わまも五ツくらふた」と、地あほうのくせにかる口  
 だてに、が笑ひする計なり。

泣きやりましたは泣きありまうしたりなり泣きありの泣きやもとなりしは、  
 唯泣きのきとありのあとの結合して一音となりしのみ(Nakari)而して、そのあ  
 りは進行的現在の助動詞にして、今のテキル、トルなどと同意なり、拙き直譯に、  
 ツ、アルといふもこれなり、即ち泣やるは泣いてゐるなり、稍轉じて泣くとい  
 ふことを少しく丁寧にいふ意に用ゐることもあり、暖まれや元來暖まれよ  
 といふに等しき命令法なれど、親愛の命令に慣用せり、のらくのらくの  
 轉訛か、のけたはシマツタなぞ、いふに同じ、除けたりといふことより、轉じ  
 て其事の終りしことをいふ助動詞となりしなり、まらぬまで、このまでとい  
 ふ語、近松に極めて多き一種の嘆辭なり、丹波與作の父様も、母様も、誰も一度は  
 死ぬるもの、來世でゆるりと逢はうまでなどにむかへて見るに、のみなどいふ

語と殆んど相等し、多くは云々するまで(のみ)のことなりといふ程の意味なれ  
 ど、こゝは少しく趣異なり、狂言昆布々施にいづればや、五貫取ればよいこと  
 はあるまでといへるまで、こゝのまでに似たり、怪我は和訓栞に、けがれ(襦)  
 の下略なりといへり、ろくにしや、和訓栞に、ろくは、まるくより轉じたるもの  
 なるべしといへり、但言集覽にもこの説を採りて、マンロクなどいふ語もこれ  
 と同語なるべしといへり、完全など云ふ程の義なり、今はろくでなしなど、否  
 定の語にのみ續くれども、當時はかゝる用法もありしなるべく、重井簡にも、ろ  
 くくゝに寝物語もあれかしとなど用ゐたり、輕口だてのだては男だてなど  
 のだてと同一意味なるべし。

二人の小供を描き出したるは、末段の道行中に回顧せしむべき準備として、夫  
 婦が別離の苦心を切ならんしめん準備として、既に前段に二度まで説きし所  
 に、更に讀者の注意を惹かんとせしなり、阿房の三五郎は、唯局面を變化せん  
 が爲なり。

阿房、あほうにか、つて、わすりよとした申、々、おさん様、西の  
 方から、粉屋の孫右衛門様と、おはご様、つれ立てお出なされ

ます。「是ハ、く、そんなら、治兵衛殿、おこそ、なふ旦那殿、おき  
 さしやんせ。は、様とおち様が、つれ立てござるげな。此み  
 ちかい日に、あきんどが、ひる中に、ねたふりを見せてハ、又きげ  
 んがわるからふ。」地おつとまかせ、とむつくとおき、そろばん片  
 手に、帳引よせ、「二一天作五、九引が三ちん、六引が二ちん。」七八  
 五十六に成、おぼ打つて孫右衛門、内に入ば、「調ヤ、兄じや人お  
 ば様、是はよふこそ、先、是へ。私は、只今、急なさん用いたし  
 か、り。四九三十六、六が一、八分で二分の、勘太郎よ、お  
 末よ、地は、様おち様お出じや。たばこぼん持ておじや。一三  
 が三、それおさん、おちや上ましましや」と、口ばや成。」

こころげなのけなはげなりの略言なれば「様子なり」といふことなれども、常に、  
 傳聞せしことなどの、稍確ならぬ意に用ゐたり。さげんは佛書の譏嫌より出  
 づ、元來、忌嫌などの義なり、人事を評露して譏嫌を避けず「首楞嚴經」などいへり、

されど稀には、機嫌の字も佛書に見ゆとぞ、なほ佛經字典等を参照すべし、國書  
 には、徒然草時代より見ゆ、世にまたがはんには、先づ機嫌を知るべし「徒然草」事  
 によりてよくさげんをはからふべきなり「十訓抄」などこれなり、今日の語とは、  
 稍趣を異にして、佛典中の意義に近きが如し。をつとまかせのをつとは、をい  
 といふ語なふ語、この語はやう源氏にも見ゆに、を列ねて、促聲に變じたるも  
 のか、今もをつと承知したなといふものこれなり、まかせは、まかせよ、即ち委任  
 せよ、といふ語より來りて、承け引きし意の間投詞となりしものか、舟子も來り、  
 荷物請取れ、まつかせと、心も勇む虎の皮「浪枕」下人が叫くまつかせ聲「全」まつか  
 せとかけ出る「生玉心中」など、促聲の音便を加へたるもの多し。二一添作云々  
 は、勿論割算の九九なり、二の段と三の段とを混合し、七八五十六より、更に亂雜  
 に乗算の九九を列ねたる、かつは弄語の爲め、且つは漫りに算盤を弄する状を  
 描きしのみ。三六が一、八分で二分のとは、一、八分を減じて二分殘こりし  
 ことを、二人の小供にいひかけたるなり。おちやは「御出でや」のい、をが省かれ、  
 でが母韻を失ひてや、ととも、拗音を作りしなり「Ochiya」。

二十九歳の、二人の兒の親にして、まかく無分別なる情死を演出すべきもの、今



日の常識ある男子としては、其因縁の未だ充分ならざるに、早くも情死と覺悟するに至りしものは、かく輕燥なる、寧ろ無邪氣なる治兵衛が性格、關つて力あることを知らざるべからず。これ蓋し戰國の亂麻を出で、僅かに皮相の文化と、遊惰の風俗とのみが成り出でし元祿享保の若ものに、極めて普通なる人格の一なりけん。

「いや、茶もたばこものみにハこぬ。是、たさん、いかにわかいとて、ふたりの子の親、けつこうな斗みめではない。男の性のわるいハ、皆女房のゆだんから。しんたいやぶりめをとわかれする時ハ、おとこ斗の恥じやない。地少めをあいて、氣にはりもちやいの」といへば、調おは様、おろかなこと。此兄をさへだますふかくこ者、女房のいけんなど、あたゝかにヤイ、治兵衛、此孫右衛門をぬくくとだまし、さしやうまでかやして見せ、十日もたゝぬに、何じや請出す。エ、うぬハ

なめ、小はるがしやくせんのおさん用か、地おきおれ」と、そろばん追取にはへくはらりとなげ捨たり。」

結構なは結構人などの結構なり、結構は馬鹿の唐名などいふ諺もあれば、人かよいなせいふ語と同じ趣の冷語なるべし。元來、結構は計畫、仕組みなどの意なるを直ちに仕組の美しきことに用ゐ、すべてよしといふ程のことに、狂言記などの頭より用ゐられたり。みめ、みるみえの約か、みめよしといふことを直ちにみめといふは、結構など、同じ用法なり。油断は佛典の故事より出でたりともいひ、又はゆたゆたのたゆたにもの思ふころぞに音便の添はりしものともいへり。持てやいの持てやな、持てやいなら(Mo-ya-i-nara)。暖かに、上巻の暖かに二人連では云々の暖かと同じ、うまく聴くべき奴かはとなり。ぬくくとお山やら、惣嫁やら、厚皮づらな晝日中、ぬくくと寐所まで手引きさせ、女腹切、ヤイ、餘程にあがけ、こゝなぬく、奴、鎗權三侍のぬけ、い、よう嘘つかんす、全など皆同じ語なり、ぬくしといふ語より來りしものなれば、暖かにと語源は相似たれど、慣用上、鐵面皮になど、いふ意味となれり。かや

すはかへすがかえずとなり其えをヤ行の如く發音するより又やと變じたるなり。うぬおのれのおのの轉訛なり。おさをれのをれば居るといふ過去の助動詞立つてをるなどのをるなりの命令法にして確定の意味をあらはす爲に用ゐたるなり止めてシマへなせといふに同じ以下この語頗る多し。

先づ女房の母をして其女即ちおさんを叱せしむさもあるべき様なり孫右衛門をしてまづ叔母の語を打ち消して一轉治兵衛を罵らしむ孫右衛門が激怒ことに叔母の手に對しても既に循々として説得すべき餘裕なきなり何ちや請け出すと忽然として罵倒する極めて妙治兵衛が意外なる如く讀者も亦愕然として注意を新にすべし。

是は近頃めいわく千万。せんどより後今ばしのといやへ二と天神様へ一とならでは志きるより外出ぬ私。請出すことは扱おき思ひ出しも出すにこそ。「いやんなく。夕部十夜の念佛にかうじうの物語、そねさきのちや屋きの國やの小はるといふわくじんに、てんまのふかい大じんが外のきや

くを追のけ、すぐ其大じんがけふあすに請出すとの是さた。地うりかい高い世の中でもかねとたわけハたくさんなと、いろくのひやうはん。詞此方のおやじ五左衛門殿つねつね名を聞ぬいて、きの國やの小はるに天満の大じんとは治兵衛めに極つた。かの爲にはおいなれど、こちらは他人。娘が大じ。ちや屋者請出し、女房はちや屋へうりおらふ。きるいさそけにきつ付られぬ間に取かへしてくれうと、地くつぬき半分おりられしをなふそうくしいしんへうにも成ことを、あかさくらさきと、けてうへのことと、をしなだめ、此孫右衛門同道した。孫系もんの咄にハ、けふハきのふの治兵衛でない、そねさきの手もきれほん人間の上々と、地きけば跡からはみ返る。そもい成病ぞや。そなたのてては、おばが兄。いとしゃくわうよ道せいわう生の沈を上、詞むこなり、

おいな男(オイ)なり、治兵衛がこと頼むとの一言ごん忘ハわすれねど、地其方をな  
 たの心一ツにて頼まれしか甲斐ひもないわいのナツと、かつばとふし  
 て恨泣』

まきゐまきみの轉か、或はまきみを略して、まきといへれば、まきのゐるところ  
 といふ意か、いやんな、おいや、おいひある、といふ語、狂言記に多し、その語よ  
 り出しなり。白人は、しろう、を洒落に音讀せしより來りし語か、西鶴などに  
 多く見えたれば、元來、公唱ならぬものを、遊兒等の間にて呼びし語なりしを、こ  
 の時代には、既にやゝすたれし語にて、老人達の間に、唯、賤業婦の名として用ゐ  
 られしものか、唯、白とのみいふは、なほ、この頃の通言なるべく、それにはあらぬ  
 白の風、卯月の紅葉、白と眺めて、白牡丹、生玉心中など、往々見ゆれど、白人とつ  
 けたるは、近松の他の著には、未だ見當らず。是れ、沙汰浪の鼓にも、人は知らぬ  
 様なれども、家中一ばいの、これ、ざたと云り、評判といふに同じ。買ひ高いや  
 すく、氣樂には、買買をせぬ、といふことなり。聞きぬいて、知りぬいて、なぞは、今  
 もいふ語なり、ぬくは、徹底の意なり。着類きとけのきとげといふ語、未だ解し

得ず、一錢一字、唯一錢といふこと、一金ちや金十郎、唯、きんちや即ち痴呆の義、な  
 きの如き當代の流行語にむかへて考ふるに、唯、語路の爲に添ひし語なりと  
 こゆ。取り返してくれ、くれ、うは、勿論、やらうに同じ、物をやることを、くれ、  
 とは、今もいふことなり。まんべう、けなげなり、といふ意より、轉じて、おどなし  
 く、疎暴ならぬをいふ、神妙に繩にかゝるなどいふ時には、孰れの意味にも解せ  
 らるれば、かゝる用法より轉訛し來りしものか、孫右衛門の咄には、云々、孫右  
 衛門の咄は、勿論、本人間の上々までなれば、聞けばは、聞さしに、といはでは、正し  
 くは、打ちあはねど、俗語に普通破格なるなり。

先の孫右衛門が痛罵に對して、女らしき口吻、極めて妙なり、いとしや、光譽道清  
 といふに至つては、如何なる遊兒も、肅然たらざるを得ざるべきなり。上卷の、孫  
 右衛門が小春に對しても、紙治に對しても、常に孝行といふことを先にして、説  
 得せると相對へて、孝といふことが、當時の商人社會の、唯一最大の徳義なりし  
 ことを想見すべし。更に、こゝに近松が巧致の一端を窺ひ得べきは、十夜とい  
 ふ語を、こゝに至るまでに、三度び利用せるとなり、十夜の中に、死んだものは云  
 云とは、小春が決意をほのめかしたる最初の語なりき、おさんが内外に心を配

る繁忙を叙しては「千夜の人通り」といひ而して此に十夜の念佛講を利用し、さらに後段に「千夜の如來のお蔭」といふ、一の十夜中といふ材料も、偉人の手中に入れば、かくも多様の資料となるなり。

治兵衛手を打、<sup>調</sup>ハア、よめた、く。取<sup>沙汰</sup>ざたの有、小<sup>春</sup>はるは小はるなれど、請出す大<sup>君</sup>じん、大<sup>相</sup>きにさうゐ。兄<sup>君</sup>きも御<sup>存</sup>ぞんじ先<sup>知</sup>日あばれてふ<sup>暴</sup>まれた、身<sup>踏</sup>すがらの太兵衛、さいしけんぞくも<sup>持</sup>たぬやつ、かね<sup>金</sup>ハさい所<sup>伊丹</sup>いたみから取<sup>寄</sup>よする、とつくにきやつめが請出すを、私<sup>押</sup>におさへられ、地<sup>度</sup>此たび時<sup>節</sup>せつとうらいと、請出すに極つた。我<sup>寄</sup>ら存もよらぬこと、「いへば、おさんも色<sup>ホ</sup>をなをし、<sup>假</sup>たとへわ<sup>私</sup>たしが佛でも、男<sup>茶</sup>がちや屋者請出す、其<sup>最</sup>ひいきせうはづ<sup>答</sup>がない。是<sup>此</sup>計<sup>方</sup>はこちの人<sup>最</sup>に、み<sup>最</sup>ちんもうそ<sup>無</sup>はない。か、様<sup>母</sup>、地<sup>誰</sup>せうこ<sup>私</sup>にわしが立<sup>私</sup>ます」と、夫婦<sup>別</sup>の詞<sup>別</sup>わりふもあひ、扱<sup>合</sup>はそうかと手<sup>サウ</sup>を打<sup>チ</sup>て、お<sup>チ</sup>ば、お<sup>チ</sup>い心をやすめしが、

調ム、物には念をいれうこと、地まづく、嬉しい、とてもに心落付爲、かたむくろのおやち殿<sup>疑</sup>、うたがひの念なきやうに、せいしか、すががつてんか。調何が扱、千枚でも仕らふ。

よめたくは、わかた、なり。讀み得たりといふ語を暗喩として用ゐたるなり。取り沙汰のどりは接頭語のみ。大盡金銀を浪費する富限者をいふこと勿論なれども、語源は諸説紛々たり。娼妓を大夫といふなどに對して大臣といひしにか、或は唯富限者といふ程の意味にも用ゐれば、大身といふことより來りしにはあらぬかなは考ふべし。徳川期以前にはなかりし語なるが如し。茶屋とは娼家は元來まことの茶を飲む茶屋なりしかば、その名の残りしものか、散茶、うめ茶、お茶挽くなど、茶に關したる語ことに靡語に多きも、或はこれが爲か、風呂といふなど、むかへて考ふべし。微塵は佛語なり。かたむくろは頑固の義なり、但言集覽には毛吹草に見えたりと記して、未考と附記したり、思ふに、堅胴(身体をむくろ)といふこと古語なり、著聞集にも見ゆの義か、或は傾くに接尾語を附したるものか、恐くは前者なるべし。

怒れる兄泣ける叔母愁ふる妻而して殆んど平然たる紙治好箇のコンツラストなり。既に二十九枚の誓紙を、こどもなく焼き盡して頼みざる紙治をして、さらに誓紙を書かしむ、愚痴なる女氣のさもあるべきとなれども、五左衛門が、この誓紙と信せざりしも故なきに非ず。

彌満足即則道にてもとめしと、孫右衛門懐くハハ中より、くま野牛の、こわうの村がらすひよくのせいし引かへ、今ハ天野ばつさしやうもん、小はるに縁切、思ひ切、いつはり申においてハ、上はほん天帝たいしやく、下はしだいのもんごんに、佛描そろへ、神描そろへ、紙屋治兵衛名をしつかり、血判をすゑて指出すを、國ア、は、様おち様のおかけで、わたしも心落付、地子中なしても、ついに見ぬかためごと、皆野よろこんでくださんせ、國尤々、此氣になればかたまる、あきなひこともはんじやうしよ、一門中がせはかくも、皆治兵衛為よかれ。兄弟の孫共かはいさ。

孫右衛門おじや、はやう歸つておやぢにあんどさせたい。世間がひへる子共に風ひかゑやんな。是も十夜如の来におかけ、是から成共おれい念佛南無阿彌陀なむあみた佛と、立歸る心ぞ、すぐに佛成。

熊野の牛王の村、鳥牛王といふこと諸説紛々たり、(但言集覽等を参照すべし)或は生士うぶすなの轉といひ、或は佛典の牛王佛の異名より出してもいへり、後者真に近きか、牛を、ごとよむは、牛頭馬頭牛頭梅檀などの例極めて多し、さて佛混淆の時代に、紀州の熊野神社より、其の神璽を捺したる紙を頼ちたるに、其印影鳥の形を成せるより、鳥といひならはしたるなり、其紙の裏に誓約などの文を記すことはいと古き慣はしにて、太平記にも告文を書きたること見ゆ。比翼の誓紙ひさかへ、比翼の誓紙は、鳥の縁より、かの在天願成比翼鳥といふ句を列ねたるなり、誓紙に、引きかへて、といはずして、にとを省きたるは稍異様にきこゆれど、類例多ければ、當代の普通語なるべし、これを省かぬものは近松には絶えて見えず。今は天罰起請文の天罰といふ語は、起請文の上に冠す

る形容詞か、或は今は天罰を受けてかゝる起請文を作るといふ義か、恐くは前者なるべしと思はるれど、未だ決し得ず。小春に縁切る云々は其起請文の梗概なり。上は梵天帝釋下は四大の云々、梵天帝釋は梵天即ち萬物を造りし神と、帝釋天即ち人間を支配する神との二神なり。四大は地水火風にして萬物の原素と佛典に記せるものなり。佛揃へ神揃へは、この外になほ許多の神佛の名を列擧せしなり。こなかなした兒のある夫婦の間柄となりてもとなり。世語かくのかくは、恥かくのかくなど、同じ語か、梅川忠兵衛に「高駄賃かく」といふ語も見えたり。兄弟の孫は兄弟なる孫、即ちお末、勘太郎なり。世間がひえるとは、稍異様なる語なれども、意味はさこえしまゝなるべし。風ひかしやんなはひかせあるな、おいひあるななどと比べて知るべし。の音便なり。心ぞ直に佛なる、知らぬが佛といふ諺をとりて、巨燧に治兵衛又ころりと一轉すべき準備としたるなり。

孫右衛門が既に誓紙を認むべき牛王を用意せりしは、かの下巻に治兵衛を探す段に「憎やく」の底心は、不便く「の裏町を」といへると同じ心にして、其罵倒も誓紙を強ふるも、唯改心せしめんとしてなり。故に、唯いよく「満足」といへるのみ、おさん、叔母等と諸共に狂喜するがごとく、淺慮ならず、加之、おさんが密書も既に披見せり、乃ち猶ほ、多少の同情と苦心とを懷きて「知らぬ佛」に促がされて立ちぬ。

門送おくりさへそこく國に、しき越るもこす越や、こさぬ中、こたつ火燧に、治兵衛又ころり被かぶるふとん蒲團のかうし島格于結。まだそねさき曾根崎をわすれず忘かと、あき呆れながら立よりて、ふとん蒲團を取て引のくれば、枕俤につたふ涙のたき漣、身もうく計、泣浮ゐたる。引おこし、引立火燧こたつ火燧のやぐら梯につ突きすへ据(スエ)、かほ顔つく借(チシ)と打誅ながめ、詞あんまり餘じや治兵衛殿、それ程名なごり名おしく借(チシ)バ、せい誓紙しかかぬがよいわいの。おと昨の月、十中一の猪ゐの子火燧にこたつ火燧明た祝儀とて、まあ、是此こ處で枕並ならべて此かた方、女房女のふと巢ころには鬼住がすむか、じやがすむか、地二年地といふもの巢すもり守にして、やう漸くは、様母おち様の陸おかけで、むつ睦ましい女い、め夫を

とらしい、ね物かたりもせう物と、たのしむ間もなく、ほんに  
 むごいづれ無情ない。さ程心残らば、なかしやんせ、泣其涙が、  
 規規み川がハへながれて、小はる春のくんでのみ飲やらふぞ。地エ、口き  
 よくもない、うらめしや」と、ひざ膝に抱だき付、身を投なげふし、伏くど  
 き たてゝぞなげきける。

中の亥の子に火燧、中の亥の子は十月中に三度び亥の日あること常のとまれ  
 ば、其中の亥の日をいふ。初冬の月は亥に建すとて、右より亥猪の節供なり、この  
 日に火燧あくるといふこと、今も俗間にいふことなれど、其の起源未だ考へず。  
 「亥は子多きものなりとて婦人これを羨みて神を祭るなどいふこと、葦草など  
 に見ゆれば、枕ならべてなごには縁あることか。すもりとは、解化せざる卵の  
 義なれば、源氏の橋姫に、泣くくも袂うちさする君なくば、われぞすもりにな  
 るべかりける」とあるは、父君の慈なくば、妾は生育せざりしなりと、中の君の詠  
 せしなり、こゝにいふ巢守は、空閨を守るといふ意なれば、少しく語意を異にせ  
 り、引き轉せしものか、或は近松が創意か。曲もない、身の首尾を思ふ様な傾城

ぢやと思つて下んすは、曲がない情ない「淀鯉」我も始は勤の身、素人の言ふこ  
 と、一つに聞くは曲がない「重井筒」などの例頗る多し、元來、歌謠の曲節より出  
 で、あまりに單調なりといふことより、情愛なきことに轉じて用ゐるなり。  
 「被る蒲團の格子縞」より「曾根崎」とつゞけたる極めて輕妙なり、格子女郎などの  
 名より見れば、元來格子戸の内に在るは下等の妓女なりしなるべけれど、格子  
 と遊廊とは縁ある語となれりしなり。増補本に「あたる火燧の小春時、まだ曾根  
 崎を忘れずが」と改めしは、この縁語を知らざりしにか、拙しとも拙し。  
 貞實なるおさんが、二年來の閨愁先に一たび安堵せし反動として、一時に迸發  
 し來りぬ、其頗る多辨なるも、絶えて貞實なる世話女房たるを害せず、否、若し  
 この怨言なかりせば、おさんは殆んど貞實の化身と成り了らん、この一段は、實  
 におさんをして、普通の人情に支配せらるゝ、生氣あるおさん、其人たらしむる  
 所以なり、貞實のみは人を作らず、義理は生命を有せず、人情と結合し、情慾と并  
 立して、こゝに初めて人格を生ずるなり。  
 治兵衛眼おしのこひ、同悲しい涙はめより出、無念涙は耳か  
 ら成共出るならば、同いはずと心を見すべきにおなじめより

こぼるる涙の色のかはらねば、心の見へぬは尤々。人のか  
 皮 着 着たちくしやう女が、名 なごりも、糸 へちまも、瓜 なん共ない。意 意ひ  
 恨 根 こん有身すがらの太兵衛、金 かねはじゆう、自 さいしはなし、妻 請出  
 工 面 すくめんしつれ共、地 其時迄ハ、春 小はるめが、子 太兵衛が心にした  
 加 添 がはず。少もきづかいなされな。たごへこなさんご縁きれ、  
 若 金 そはれぬ身にハ成たり共、詞 太兵衛にハ請出されぬ。もしかね  
 ぜきで、方 親かたからやるならば、見 物のみごごに、死 死んでみしよ、  
 退 ご たびく、放 詞をはなちしが、退 これ見や、退 のいて十日たため中、  
 地 太 太兵衛めに請出さるゝ、密 くさり女の四ツ足めに、心 心ハゆめ  
 残 よ くのこらね共、詞 太兵衛めがいんげんこき、身 治兵衛しんだ  
 代 い いきついでのかねにつまつてなんごと、脚 大坂中をふれ廻  
 り、間 とい屋中の付合にも、面 地つらをまぶられ、生 いき恥かく胸がさ  
 裂 ける 身がもへる、埃 エ、口 口おしい、横 無念なあつい涙、熱 血の涙、ね ねバ

い涙を打こへ、ねつてつ涙がこぼるる」と、どうごふして泣け  
 れば、はつご、おさんがけうさめ顔。

名残も絲瓜も絲瓜とは、今もいふ語にして、最も無益なるものを擧げて暗喩と  
 せしなるべし。丹波興作にも「恩も禮儀も、忠孝も、死ぬる身には絲瓜の皮、なごり  
 も見えたり。こなさん、このかたさまより來りし語か、或はこなさん、まともいへ  
 り、幾多の用例より見るに、親愛の意味を表する二人稱なり。金せきのせきは  
 かの「せく程にく」などの「せく」と同じ語にて「せき留むる」ことより、廣 廣く拘束す  
 るといふことに用ゐるものか。隱言はかげくちといふに同じ。いさつくは、  
 行き着くといふ義より、行き當る處まで行き着きて、動きのとれぬ様になりし  
 をいふなるべし。「息盡く」と武藏屋本には記したれど、信すべからず。まぶられ  
 は、まもられ「熱視せられ」のハ、行マ行の轉にて變化したるものか。「死につらまぶ  
 られ、日頃立てた正直も無になり」今宮心中、「七十に餘る母まで、各に顔をぶら  
 せ、無念に御座る」毒の門松などの例、頗る多く、皆、冷笑嘲罵などの意味を以て顔  
 を熱視せらるゝことなり。興ざめ顔は興味のさめたる様といふことより起



こりしものなれど、愕きて拍子ぬけのしたる様なる場合にのみ用ゐるなり、壽の門松の意外なる葛籠の中より、吾妻與次兵衛の出で来る段に「彦介はびつくりし、親方亭主も興ざめ顔」といへる「びつくりし」と興ざめ顔とは殆んど同じ意味なるが如し。

治兵衛が「身も浮くばかり、瀧なす涙は果して、單に無念涙、口惜し涙のみなるべきか、問屋中の交際に顔見らるゝ心配のみが、かくも二十八歳の男子を痛哭せしむるに足るべきか、否々、其くり返し、名殘も絲瓜もないといひ、夢々心殘こらすといへる、これやがて、其かよわき心の一隅に、なほ微かなる名殘惜しさと心のこりとの蟠まれることを示すものにはあらずや、而して、この微かなる、まかも有力なる未練が、其公然たる理由即ち無念さ口惜しさを煽動して、こゝに熱鐵の涙とはなりぬるなり。この點は、逍遙子が評釋、解き得て殘すところなし。

「ハテ、サテ、なんぼりはつても、さすが町の女房じやの。あのぶ

心中者、なんのしのふ。さうをする、くすりのんで、いのちのやうじやうするハいの。「いや、さうでない、わしが、一生いふまいこハ思へ共、かくし、つつんで、むざく、ころす、其つみもおそろしく、大じのことを打あける、小はる殿に不心中けし程もなけれ共、ふたりの手をきらせしは、此さんがからくり。こな様ンが、うかく、しぬるけしきも見へしゆへ、地あまりかなしき、女はあいみたかひご、きられぬ所を思ひ切、夫の命を頼む、こ、かきくといたふみをかんじ、自身にもかへぬ大じのこのなれど、ひかれぬ義理合、おもひ切、この返事。わしや、是、まもり、身をはなさぬ。是程のけんちよが、こなさんと、のけいやくちがへ、おめく、太兵衛にそふ物か、おなでハ、我、人、一むきに、思ひかへしのない物。しにやるハいの、く、ア、ア、ひよんなと、サア、サア、サ、どうぞ、たすけて、く、」と、

はげば夫もはいもうし、「取返したきしゃうの中、あらぬ女の  
 ふみ一通、兄きの手へわたりしハ、たぬしからいたふみな、  
 それなれバ、此小はる、死ぬるぞ。」ア、悲しや、此人をころして  
 ハ、女どしのぎりた、ぬまづ、こなさんはやういて、ごうぞ  
 ころしてくださるな、夫にすがり泣しづむ。」

利發増補本には發明に作れり其意なるべし。むざくむだの轉音にして、  
 だは又ひな(空)より來りしなるべし。あひみたがひはあひたがひ相互の中間  
 に、みといふ音便の入りしなるべし。相身相見などかくは皆あて字なり。ひよ  
 んな、萩原廣道は源氏の評譯にうたてといふ語を屢々ひよんなど譯せり。變あ  
 といふとは稍ことなり。はいもう、敗亡の字音にて、今日閉口なごいふほどの  
 義なるべし。猶もつゞけてうつ石に提灯も打ち破れ、由兵衛も敗亡し、今宮心中  
 などとも用ゐたり。おぬし、主におといふ美稱をそへたるものとも思はるれ  
 ど、俚言集覽には、わぬし、我が主の轉をのしなりといへり。そはとにかくに、當時  
 の用例を見れば、今のおまへといふ程の所に用ゐたり。

手紙の秘密が孫右衛門の口より出でずして、おさんの口より出でたる、既に巧  
 なり、而して其の自白が、おさんの性格を表はす所以となりしに至つては更に  
 巧なり、あらゆる事件、あらゆる會話が、常に、一面は事件の說話にして、一面は人  
 格の叙述なるは、近松が世話物に普遍なる特色なれども、ことに、おさんの言  
 語と舉動とに於て、最も著明なり、以下總て、此の点に注目すべし。かの「知らぬ  
 女の文一通」は「立つの立たぬとは人がまし」と罵倒したる治兵衛が念頭にも、  
 確かに、尠なからぬ印象をといめて、深き疑惑の源とならざりしにはあらず、只、  
 先には、激怒に壓せられて、これを思ふの暇なく、後には、兄に對し、妻に對し、未練  
 らしく尋ねもならず、獨り、晴れやらぬ疑惑と、かの微かなる未練とに、鬱々たれ  
 ばこそ、改心せし紙治の、なほ「晝日中」火燧に寝ころび、格子縞に涙も濺ぎたれ、今、  
 女房の自白に對しては、まづ、直ちに、十日近く苦しめりしこの問題を取り出で  
 て、をのしから行た文など、叫ぶものこれ、單なる文章上の照應のみにはあらず。

「それこそ、何とせん半が、ねも、手付を打つなぎとめて見る斗。  
 小はるが命は、新銀七百五十匁のまさねば、此世にと、むる

ことならず。今の治兵衛が四ツ三貫匁のさいかく、打みし  
やいでも、どこから出る。地なふぎよふさんな、それですまばい  
とやすし。

新銀七百五十匁、新銀とは享保銀にして、銀八銅二の銀質なれば、かの正徳元年  
改鑄の四寶銀の銀二銅八の悪貨に比して四倍の價值ありしなり、四寶銀は、享  
保六年十二月、即ち、この淨瑠璃の初興行より一年後に通用を禁せられたれば、  
著作の當時は、なほ、兩貨幣を混用せしものならん、新銀七百五十匁は、即ち四寶  
銀三貫匁にして、享保小判の百五十兩弱に當る、金額の概念を得んが爲に、これ  
を米の價に比せんに、享保、元文の頃は、米一石、三四十目の間なりしと、八木の話  
に見ゆれば、新銀七百五十匁は、米二十石程の價なり、而してこれが身の代の半  
金なれば、小春が五年の年期、上巻参照は、米四十石にして、百石高と稱する武士  
が九一年の収入に等し、百石の高實収は、普通四十石なり、勿論、當時は、米價の、他  
の物品に比して低かりしには相違なけれど、當時の百石取が、一年の収入を盡  
さずば、風呂屋上りの一妓女の身の代を購ふには、足らざりしなり、亦、以て當時

337267

の遊廊の驕奢を想見するに足るべし。四ツ三貫匁は、即ち、四寶銀の三貫匁な  
り、四つとは四箇にて新銀一箇に値する銀といふ意味なるべし。みしやくみ  
じやくにするといふ語なり、みさくといふ語、宇治拾遺に見ゆ、これらや語  
源なるべき、今も身代を粉にはたいても、なごいふと、同じ趣きなり。ぎやう  
さんは、今も上方にていふ語にて、こゝにては、紙治の言を、ぎやうくしといへ  
るなり、仰山と書くが常なれど、ふるくは、況山ともかけりとぞ、ぎやうくしの  
ぎやうにさま、權の音便、さんを附したるものか。

「春まさねば」といふ暗喩は、かゝる場合にはいかゞはしといふこと、早稲田の研  
究會にも評せられたりと覺ゆ、あまりに縦横なる筆の外れたるなり。「なうぎ  
やうさんな」より以下は、會話なれども、淨瑠璃にては、語る、地なれば、いと安しな  
どの、文章語めきし語をも用ゐたるなり。

立て、たんすの小引だし明て、おしげもないませの、ひほ付ふ  
くろ押ひらき、なけ出す一つ、み。治兵衛取上、ヤ、かねか、あ  
かも新銀四百め、こりやどうして」と、我置ぬかねた、めさむ

る斗なり。其（岩イ）そのかね（金）の出所も、跡でかたればしれること。此  
 十七日、いわく（岩イ）の紙のしきり銀に、さい（才）かくハしたれ共、そ  
 れハ兄（御）ごどだん（談合）がうして、しやうばい（賣）のおハ見せぬ。小はる（春）  
 の方ハきう（急）なごご、そこに四々の一貫六百匁、ま一貫四百匁（京今日）と、  
 地大引出しのちやう明（錠）て、たんす（單符）をひらりと、さび八丈、けふ  
 ちりめん（縮緬）のあす（明日）はない夫の命（不知）しらちやうら、娘のお末が兩  
 めん（面）の（紅絹）の小袖に、身をこがす、是をまけては、勘太郎が手  
 もわた（綿）のない（無）そで（袖）なし（無）のは（羽織）はおり（羽織）も（交）ま（交）せて、ぐん（郡）ない（内）の（仕）しま（未）  
 つして（着）きぬ（浅黄）さ（黄）う（裏）ら、くろ（黒）は（羽）ふ（二重）たへ（一）ちやうら（ちや）  
 うも（教）ん（丸）につ（馬）た（葉）のは（退）の（退）き（退）もの（退）かれ（退）も（退）せ（退）ぬ（退）中（退）ハ、内（退）は（退）た  
 か（退）でも（退）、そ（退）こ（退）に（退）し（退）き、男（退）か（退）ざ（退）りの（退）小袖迄、さらへて、物數十五色  
 内（端）は（端）に（端）取（端）て、新銀三百五十匁、よも（義理）や（貸）、かさ（貸）ぬ（貸）こ（貸）い（貸）ふ（貸）こ（貸）は  
 ない物迄も有顔に、夫の恥（義理）、我（義理）き（義理）りを（義理）、ひ（包）ご（包）つ（包）につ（包）、む（包）ふ（包）る（包）

しきの中に、なさけをこめにける。」

なひ（な）ませ（な）は（な）、惜（な）氣（な）も（な）無（な）い（な）に（な）、絢（な）ひ（な）交（な）せ（な）の（な）紐（な）繩（な）の（な）様（な）に（な）色（な）々（な）の（な）糸（な）を（な）よ（な）り（な）合（な）せ（な）た（な）る（な）紐（な）  
 といひ（な）か（な）け（な）た（な）る（な）なり、尾（な）は（な）見（な）せ（な）ぬ（な）、狐狸（な）の（な）化（な）け（な）た（な）る（な）が（な）顯（な）は（な）る（な）れば（な）、尾（な）を（な）人（な）に見（な）  
 す（な）とい（な）ふ（な）と（な）古（な）く（な）狂（な）言（な）など（な）にも（な）見（な）ゆ（な）れば（な）、それ（な）より（な）起（な）こ（な）り（な）し（な）暗（な）喩（な）なる（な）べし。四  
 四の一貫六百匁は、新銀四百目を四寶銀に換算したるなり。岩國、周防の岩國  
 にて、岩國半紙の産地なり。ひらりと、び八丈、ひらりと、は開くる形容にして、  
 飛ぶにひかけたりと、び八丈とは、藍色の八丈縮といふことにか、衣食住記に、  
 享保頃（な）に（な）流（な）行（な）せ（な）し（な）小袖（な）の（な）染（な）色（な）を（な）列（な）舉（な）した（な）る（な）中（な）に（な）、黒（な）と（な）び（な）とい（な）ふ（な）色（な）ある（な）こと（な）嬉  
 遊笑覽（な）に見（な）ゆ、兩面（な）の（な）も（な）み（な）の（な）云々（な）、無（な）双（な）の（な）紅（な）絹（な）な（な）れば（な）、其（な）火（な）の（な）如（な）く（な）赤（な）き（な）にと（な）り  
 て、焦（な）す（な）とい（な）ひ（な）か（な）け（な）た（な）る（な）なり。ま（な）げ（な）て（な）は（な）ま（な）げ（な）る（な）とは（な）質（な）の（な）七（な）と（な）昔（な）相（な）通（な）へ（な）ば（な）、其（な）七  
 の字（な）の（な）字（な）畫（な）の（な）ま（な）が（な）れる（な）に（な）取（な）り（な）し（な）洒（な）落（な）なり（な）と（な）ぞ。手（な）も（な）縮（な）も（な）ない（な）云々（な）、勘太郎（な）の  
 「種（な）なし（な）の（な）拾（な）羽（な）織（な）とは（な）き（な）こ（な）ゆ（な）れ（な）ど（な）、これ（な）を（な）ま（な）げ（な）て（な）は（な）勘太郎（な）が（な）手（な）も（な）………（な）ない（な）と  
 つ（な）け（な）た（な）る（な）意（な）味（な）明（な）ら（な）か（な）な（な）ら（な）ず、但（な）言（な）集（な）覽（な）て（な）なし（な）「今（な）の（な）袖（な）なし（な）羽織（な）の（な）こと（な）」の（な）條（な）に、  
 古歌（な）なり（な）と（な）て「我が戀（な）は（な）て（な）ら（な）で（な）ない（な）の（な）竿（な）づ（な）く（な）み（な）云々（な）」とい（な）ふ（な）歌（な）見（な）ゆ（な）、この（な）「て（な）な  
 し（な）」とい（な）ふ（な）語（な）の（な）暗（な）喩（な）上（な）の（な）意（な）味（な）は（な）手（な）も（な）出（な）ない（な）など（な）、同（な）じ（な）く（な）、困（な）窮（な）の（な）極（な）に（な）達（な）した（な）る

ことをいふにはあらぬか、さらば、こゝも、この袖なし羽織を質入れしては、勘太郎はいかにともせん方なしとの意を「縮も無い」にいひかけたるなるべし。郡内の云々、甲斐の郡内縞の淺黄裏なる衣服なると勿論なり、淺黄裏は後には、田舎漢の隠語の如くなりたれど、當時には流行せしなり、黒羽二重も、飛八丈も、京縮緬も、皆おさんが着物なるべし。一ちやうら、俚諺集覽には、一挺、蠟燭の轉訛なりといへれど、いかゝあらん、一つといふことを一ちやうといふは、蠟燭のみならず、鍬にも、鎌にも、小刀にも、或は豆腐にもいふ語なれば、この語に「野ら、大み」とらまなどの所謂接尾語ら、のそはりて唯一つのものといふ意味となりたるなるべし、意味は、今日もいふ如く、「唯一の晴れ着」といふ程のことなり。葛の葉ののきものかれもせぬ中は、葛はものにからまるものなれば、其縁にて「のきものかれもせぬ」といひつゝけたるなり。三百五十匁は、略、米十石の値なり、若し、假りに、質入の價値を、元價の三分の一とすれば、十五の着物が、米三十石に値するものなるが故に、小供の袖なしまでを平均して、一枚の着物は、米二石に値す、丁稚一人、下女一人の紙屋にしては、頗る贅澤なる風俗といふべし、嬉遊笑覽の衣服の部、或は西鶴物などを、照對して、當時の風俗を窺ふべき一助となすに足らんか。

「立つてたんすの小抽出し」に對して、「大抽出しの鎖明けて」といへるより以下、其得意なる弄語、縁語、係語、重疊し來る。箆笥より衣服を取し出す動作とともに、まづ、紙治がはかなき運命を豫言し、二人の子供に對する親心と、而して「仕未して着ぬ」女房氣質とをほのめかしたるは、決して單なる言語の末技として排斥すべきに非ず、加之、我國の言語は、動詞、形容詞、助動詞を以て終るを常とするが故に、縁語、係語等を利用して、語尾を省略するに非ずば、多くは伊列、宇列の音のみを以て各句を終るべく、従つて、極めて單調なることを免かれず、これ亦、我國の詩歌に所謂る弄語多き所以の一なるべし。

詞「わたしや子共ハ、何きいでも、男ハせけんが大じ、請出して小はるもたすけ、太兵衛とやらに、一ぶんたてゝ見せてくださんせ」と、地いへ共しじうさしうつむきしくく泣てゐたりしが、手附渡してとりごめ、請出して、其後、かこふて置か、内へ入るゝにしてから、そなたハ何と成ことぞ」と、いハれて、

地はつと行あたり、乳母阿ッ、ア、そうじや。ハテ、なんごせう、子共のうばか、飯たま、たきか、隠(イ)んきよ成共しませう」と、わつとさけび、ふし<sup>伏</sup>なづむ。詞あまりにめうがおそろしい。此治兵衛にハ親のばち、地天のばち、地佛神のばちハあたらす共、女房のばち一ツでも、將やうらいハようないはず。ゆるしてたもれ」と、手を合、口くごきなげ、爪バもつたない、それを<sup>奉(ナ)</sup>がむここかいの手足のつめをはなしても、夫(ナ)おつとへのはうかう、紙こいやのしきりかね、いつからか、着さるいをしちに、まをわたし、わたし<sup>私</sup>がたんすハ皆あき<sup>明</sup>がら、それ<sup>惜(チ)</sup>たしいさも思ふにこそ、何いふても、跡へんでハ返らぬ、サア、くはやふ小袖もきかへて、若につこり笑ふていかしやんせ」と、下にくんない、くろはぶたへ、羽嶋のはをりに、機(ナ)さやの帯金こしらへの中わきざし、こよひ小はるが血にそむこハ、佛やしろしめさるらん。』

着いでも、着でも、に音便いを附したるなり。將來は未來といふに同じ。勿体ない。勿体なしといふ語、早く宇治拾遺、太平記などに見ゆ、物體の省字より出づ。貝原翁の辨あり、と俚言集覽に見ゆ。問をわたり、間隙をふさぐといふことに、今の間にあはずなど、同じ趣ある暗喩なり。思ふに、こゝいかで思はんといふ意味とはきこゆれど、かの中古語に多き、この後に「アシクア」を省きたる語より出でしものか。あどへん、あどのまつりなどいふにひとし、後邊なるべし、生玉心中にも、これもあどへん、今言うてもかへらぬなどいへり。其他この語近松にいと多し。下に郡内云々は、勿論、治兵衛が衣装なれど、往かしやんせ」といふ句をうけて、おさんが、これ等の衣装を夫に着する様と讀まざるべからず。

この段の會話、輕妙にして、能く夫婦が苦慮を描き盡したり、そなたは何となることぞの一句は、眞に改悟したる紙治の面目を躍動せしめ、云はれてハツタと行き當り、云々の句は、絶えて怨恨の態を露はさずして、悽惋微茫情に堪へざるに至りて、聲を放つて泣く、おさんが楮表に躍如たる所以は、實にかゝる描寫に在り。治兵衛亦、寧ろ多情多恨の人なり、手を合せて口説き嘆くは、眞にこれ自

然の必至なるべく、男まさりのおさんが、決然、再び夫の恥と我が義理とに思ひ及びて、「にっこり笑うて往かしやんせ」といふに至つては、正にこれ人間悲慘の極圓滿なる境地の、到底達し得べからざるを認めつゝ、なほ強て微笑を装ひて、自ら其悲劇の中に入らざるべからず、義理はこれを責め、人情はこれを強ふ、涙あるもの、豈おさんに對してこれを滌ぐことを辞せんや。

増補本には、「云はれてはつたと行きあたり」以下を、「云ひさして打ちまはるれば、ア、何のいなア、必ず案じて下ださんすなへ、ハテモ、子供の乳母か、飯たさか、面倒ながら、眞實の妹々々持つたと思つて、いふも胸中で突きかける、涙呑み込み」で、夫に立る貞節は傍で見ると、いふも「改めたり、増補者の詩眼に乏しきことはいふも更なれど、これ全く、おさんが人格を打破して、没情的道義の模範を造らんとせしもの、全く人情の機微を解するものに非ず、彼此對照して、いよく、近松が靈腕を悟るべし。

三五郎「爰へ」と、ふるしきづ、みかたにおほせて、供につれ、金もはだ身にしつかと付、立出る門の口、「治兵衛ハ内においや

るか」とけづきん取て入を見れば、なむ三ほう、しうと五左衛門。「是は扱、おりもおり、よふお歸りなされた」と、夫婦はてんと、うろたゆる。三五郎がおふたるふるしきもぎ取て、ごつかとすはり、とがり聲、めらう下にけつからふ。むこのの、これハめつらしい、上下きかざり、わきざし、はおり、あつばれ、よいしゆのかねつかひ、紙屋とは見へぬ。しんちへのお出か、御せいが出ます。内の女房いらぬ物、おさんに隙や、りや、地つれに來た」と、口にはり有、にかい顔。

三五郎「爰へ云々の句は語句の上より解釋すれば、銀も肌身にしつかと付け立ち出る」と同じ主格ならざる可からざるが故に、治兵衛の語なるが如くなれども、前後の有様より推せば、三五郎を呼ぶも、風呂敷包を渡すも、必ずおさんの動作ならざるべからず、増補本には、跡の間では詮ないこと、サア、早うと、三五郎呼び出し、渡す風呂敷とつゞけて、明かにおさんが動作となせり。ざるにても。

「供につれ」といふ語より治兵衛を主格とすべきか「銀も云々」より主格を變じた  
 るものか、とにかくに頗る不明なり」一は音調の爲め、一は必ず人形芝居の伴ふ  
 べきことを豫期せるが爲め、かゝる破格の混在せるなり。けつからふ今も悪  
 体語にいふなる「けつかれ」の延音とは聞こゆれを言源は考へ得ず、かれはおも  
 しろがれなどの如き、形容詞の後に來る語尾の如くも聞こゆれど、常に動詞の  
 後に在るも奇なり。

「お歸りなされた」御精が出ます、二句極めて輕妙紙治は眞に新町に行かんと  
 して、舅の罵る所も亦廓通ひなるに在り、其嘲罵の聲の自然にして而して適切  
 なるは、主として其構想の然らしむる所なり。

治兵衛ハ、とかふのごんくも出ず。詞とつさま、げふハさむいに、  
 よふあるかしやんす。地先、おちや一ツと、ちやわんをしほに立  
 よつて、圓ぬしの新地通ひも、さいせんは、様孫右衛門様、お出  
 なされて、だんだんの御みけん、あついで涙をながし、せいし  
 をかいてのほつきしん。母様に渡されしが、まだ地御らんな

されぬか。「チ、せいしとハ、此ことか」と、くハい中より取出し、  
 圓あほうぐるいする者の、さしやう、せいしは、方々、先々、かき  
 出し程かきちらす。がてんいかめと思ひく、來れば、あんの  
 ごとく、此さまでも、ぼん天、たいしやくか。地此手間でさり状  
 かけ」と、ずんくんに引さいてなげ捨たり。」

發起心の發起は、鬼も發起などの「發起」にして、悔悟といふに同じ。

果然、五左衛門は、替紙を信用せざるなり。元祿享保は、徳川期前半の腐敗時代也、  
 戦國素朴の遺風を存せる古老と、新らしき奢靡の風に染みし青年との、最も衝  
 突し易かりし時代なり。予は、寧ろ、近松が世話物に、この種の人格の甚だ稀なる  
 所以を疑ふ、僅かに替の門松の淨閑あれど、これ亦其内心は、あまり粹人的なり。  
 この五左衛門一人こそ、近松に稀有なる、従つて近松を重くすべき所以の一性  
 格なるべし。思ふに五左衛門は、決して没情淡といふべきに非ず、「一家一門の參  
 會にも、常に紙治が放蕩を悔めること既に二年に餘れり、今いかゞはしき替紙  
 を見て、半は歡び、半は疑ひ、親しく其動靜を見んと欲するは、これ、ことに頑固な



らすとも、老人に普通なる舉動なるべし。而して改心を誓ひて半日ならぬに、新地通ひと誰が目にも見ゆべき治兵衛が風体を目撃す、五左衛門に非ずとも、何ぞ激怒せざるを得んや。

治兵衛をして一刻早く去らしめば、五左衛門をして半時遅く来らしめば、この悲劇は或は成立せざるべし。怪しき女の手紙を殘こして、中卷上半の小團圓を破壊し、更に治兵衛が起請、稍疑を挟むに足るべきを取り出で、おさんが身を擲ちて收拾せんとしたる後半の小團圓をも破壊し去らんとす。而して、彼と此と、皆後の大破壊の因を爲せるなり。

夫婦はあつとかほ見合せ、あきれて 詞もなかりしが、治兵衛手をつき、かうへをさけ、御腹立の段、尤ともおわび申すはいせんのこと。今日のたゞ今より、何ごともじひと思召、おさんにそハせて下されかし。地たとへば治兵衛、こつじき、ひにんの身となり、諸人の箸の餘りにてしんみやうつなく共、おさんハきつと上にすへ、うめ見せず、つらいめさせず、そ

ハねばならぬ大恩有。其わけハ、月日も立、私のつとめかた、しんしやう持なをし、おめにかくれハ、こころ、それ迄ハめをふさいで、おさんにそハせて賜ハれ」と、はらはらこぼす血の涙、たゞみにくひ付、わびければ、ひにんの女房にハ、猶ならぬ。さり状かけ、地おさんが持參の道具、衣類、數あらためて、ふう付ん」と立よれば、女房あハて、きる物の數ハそらふて有、あらたむるに及ばぬ。さ、かけふさがれバ、つきのけ、くつこ引出し、ヨリヤ、どうじや、又引出しても、ちんからり、有たけこたけ、引だしても、つき、れ一尺あらばこそ、つら、長持、いしやうびつ、是程から成たか、しうと、ハいかりのめだ、まもすハリ、夫婦が心ハ今更らにあけて、やしき浦島のこたつふとんに身をよせて、火にも入たきふぜいなり。はら、溢す血の涙、さきには唯身も浮くばかり、涙き居たりといひぬ、熱い涙、

血の涙云々の語は、治兵衛が言ひ譯のみ而して、この血の涙は、作者が証言なり。彼と此とは同語にして、用法は相異なるに注意すべし。猶ならぬのならぬは、今も用ゐる禁止の語にして「成らず」といふ義にはあらず。あはて「あはくし」「あはつかなどのあはより來りしなり。どうちやのどら」は語源定かならずとして、かくして「をどうしてかうして」といふより思へば、を濁りて「を附したるものとも思はる。ちんがらり、がらり」とは、空しく明きたる体なれども、ちんといふ語いと珍らし、一種の時代語にして、勿論意味なき接頭語なるべし。ありたけ、たけ、たけのこは、小又は粉の義なれば、有るかぎり、粉のかぎりといふ程の義か。一尺あらばこそ、それ惜しいと思ふにこそ、なご、相對して考ふべし。あらばこそよけれなどの趣なり。浦島の火燧は、浦島の子といひかけたるなり。

「私が簞笥は皆あきがら」といふ句によりて、讀者は既に「ちんがらり」なるべきことを豫想せり。故によく、おさんの周章狼狽に同情し、火にも入りたき風情に同情す。近松が、讀者をして常に局中の人物とともに喜愛せしむることの周到なる用意を思ふべし。

此ふろしきも氣づかいと、引ほごき、取ちらし、聞さればこそ、さればこそ、是もしちやいとばすのか。ヤイ、治兵衛、女房、子共の身のかははぎ、其かねておやまぐるひ。いけどうすりめ、女房共ハおばおいなれど、此五左衛門とはあかの他人、そんなせうよしみがな。孫右衛門にことわり、兄が方から取かへす。地サア、さり状、さり状と、七重のとびら八重のくさり、百重のかこみハのがる共、のがれたなき手づめのだん。「チ、治兵衛がさり状、筆でハかかぬ。是御らんぜ。おさんさらば」とわきざしに手をかくる、すがり付て、「なふ悲しや。とつ様身にあやまりあれバこそ、だんくのわびごと。あんまりりうん過ました。治兵衛殿こそ他人なれ、子共ハ孫かハゆふハござらぬか。わしやさり状ハうけさらぬ」と、夫にだき付、聲を上、泣さけぶこそ道理なれ。」

さればこそ、さればこそ思ふ通りなれ。いけどうすりめ、生き畜生の死に畜生  
 「いき拘摸め、どう拘摸め」などの罵詈雑言の語、近松に極めて多し。いけはいきの轉な  
 るべし、今もいけすかない、いけさうくしいなどいへり。女房どものどもは  
 「子ども」「女ども」「翁ども」などのどもにして古くより單數の後に用ゐたる例多  
 し。利運は利運に乗することの義なり。あかの他人のあかはあか裸などの  
 あかなり、赤貧赤條々などと同じ趣なれを譯語には非ざるべし。あかるきこと  
 即ち隠蔽するものなき義より、空しきこといへるなるべし。

おさんもげに道理なり、五左衛門の激怒はさらに道理なり、二人の道理に責め  
 られて、治兵衛は眞に身の置き所なきを感じぬ。其一たび自殺の決意を示した  
 るものは、断じて一時の狂言にはあらず、されどおさんの縋り附くに至りては、  
 由來、義理よりも情にもろき治兵衛、強いてつき放さんまでの力もなく、眼前の  
 妻子が嘆きに、しばらく茫然として自失せるなり。而してやうく、自覺し來り  
 しころは、小春に對する執着の念は、かの孫右衛門が所謂「舅の恨み」(下巻参照)  
 且つは、辛く成らんとせし金策の破れしが爲の自棄心に煽動せられて、嘗つて  
 一たび決心せし、無分別の分別に陥りはてしなり。

よい、よい、さり状いらぬ、めらうめ、こい」と引立る。「いや、わしや  
 いかぬ、あきもあかれもせぬ中を、何の恨にひる日中、めをと  
 の恥はさらさぬ」と泣わぶれ共聞入す。「此上になんの恥、町内  
 一ばい、わめいていく」と、ひつ立れば、ふりはなし、小がいなと  
 られ、よろくと、よろめく足のつまさきに、かはいや、はたと  
 行あたる二人の子共がめをさまし、調たいじのか、さまな  
 せつれてゆく、ちいさまめ、地今からたれとねよふぞ」と、したい、  
 なげ、ば「ナ、いこしや、うまれて、一夜もか、がはたをはな  
 さぬ物、ばんからと、様とね、しや。ふたりが子共か朝ふ  
 さまへ、わすれず、必く、ハやまのませてください。なふかな  
 しや」といひすつる、あとに見すつる、子をすつる、やぶに、ふう  
 ふのふたまたたけながき、わかれご三丑

あさふさ、朝廷に、毎朝餅、菓子類を奉るを御朝物といふ、これより民間にて

も朝食以前にもものを喰ふことをあさぶちといひ、女子の詞にあざぶさといふといふと、俚言集覽に見ゆ。今の小供のおめざめなどといふに同じ。維新前には朝廷の「おあさのもの」といひしときけば、民間の語も古く亡びしなるべし。くはやま、桑山の九子にして、小供藥なり。子を捨つる數に夫婦の二股竹、子を捨つる數はあれども身を棄つる數はなし」といふ諺、毛吹草、犬子集等にも用ゐたるふるき諺なればこれによりて子を見棄つることを叙し、而して、其縁にて二股竹とやいひけん。永き別れと、といひきりて下に動詞なき如きものは、今の段物の終にも多きのみならず、近松のものにも極めて多し。語るときに三重といふ三味の手を彈けば、其後は語らぬが常なれば、本文をも省けるなり。中巻は、紙治を寫すとともに、よくおさんを寫せり。上巻が小春を以て初まり、小春の悲劇を以て終りしが如く、この巻は、おさんを以て初まり、おさんの悲劇をも殆んど唯、當面の事象に對する反動的行爲なり。彼の戀は、彼をして極めてうぶなる子供らしき男となし果てぬ、圍うておくか内に入るゝにして、からが、そなたは何となるとぞといへる問題には、何の解答をも得ずして、唯、小春の爲に

立出でんとしぬ、身代持ち直し、御目に懸くれば知るゝことと改悟したれども、小春とおさんとの所置に成算あるには、わらず、脇差に手はかくれども、小春を思ひ切るべき、断然たる分別あるに非ず。二十八歳の二人の子の親にして、乞食になることも愛目せさせまじき大恩ある女房を忘れ、母なき宿に勘太郎、お末を殘こして、終に、小春と情死するに至る。其矛盾も、其無分別も、毎度々々の死覺悟、とぼく、うかく、身を心を焦すなる治兵衛には、女房の眼にさへ、死ぬる様子も見えし。治兵衛には、すべて、極めて自然なる動作なり。彼は、元來、熱し易く、激し易し、格子の間に白刃を貫きしも、身のいひ譯に脇差に手をかけしも、其、熱し易き心にして、これやがて、戀愛に熱すべき心なり。この戀愛の熱に狂へる彼は、逃るべからざる義理と、恩愛と、而して至當なる男の罵倒とに迫まられて、錯亂紛糾、茫然として、全く自我を失へり。其情人と死を共にすべき、新らしき希望に、微かなる安心を得るに至るまでの治兵衛は、唯、これ、形骸のみ。この巻の末段、唯、おさんの語ありて、治兵衛の語なきは、偶然に非ざるなり。おさんは、伶俐なる寧ろ冷靜なる世話女房なり。十夜の内外に氣を配り、箆筒を空くしても、商賣の尾は見せぬ働き者なり。されば、五左衛門が強硬なる所業に對しては、暫く其言ふ所

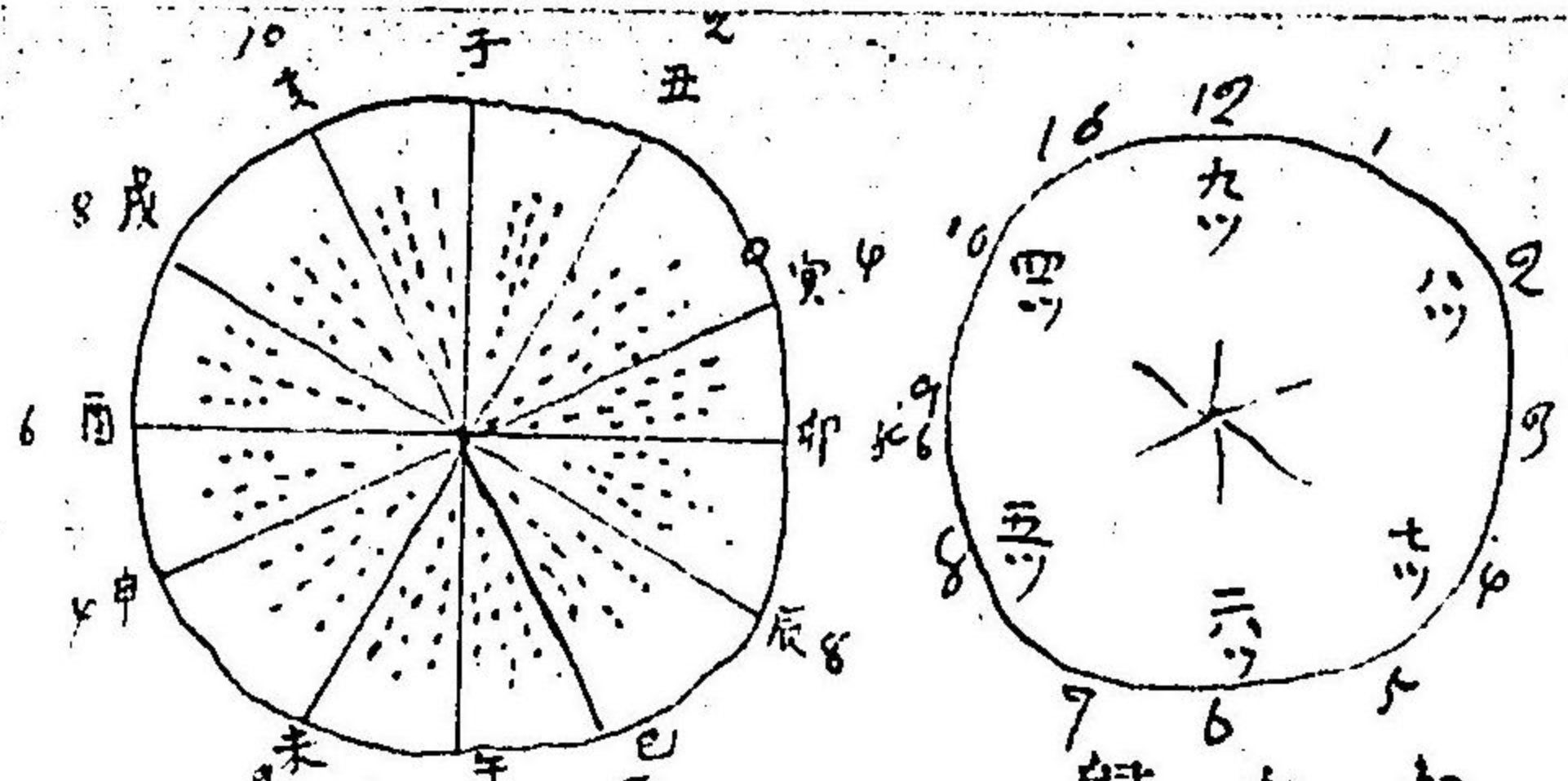
に任せて、徐ろに後圖を成さんとは企てたり、孫右衛門が下巻に治兵衛を求め、既に決死の覺悟ある紙治と小春との情交を認めながら、舅の恨に無分別も出うかとのみ疑ひしは、おさんの口より、既に一分始終を聞きたればなり。おさんは、五左衛門に拘束せられて、未だ充分に其苦慮計畫を果し得ざるに、小春と紙治とは既に情死せしなり。

五左衛門が單なる無情漢にあらぬことは、既にこれを説けり。おさんを取り返し、天満中に恥かゝせんと罵りつゝも、なほ二年餘の月日、辛棒し來しは、てに、兄をも叔母をも欺きて、偽の起請を書きしと見ては、はや堪忍の緒も絶ゆべきなり。今日「紙治の火燧」とて、義太夫の席などに語らるゝ増補本中の「時雨の火燧」に、舅が紙治に恩借あるが如く作りなし、そのおさんを連れ歸りしは、紙治をして小春に連れ添はせんが爲の苦肉の計と改めたるが如きは、全く五左衛門の人格を誤解したるものか、或は、目先の變化を覓めて、其人格を破壊したるものなり。此の段の増補本、廣く坊間に流布すれば、試に對照せば、近松が眞價を窺ふ一助たらん。増補本に心中の因縁なきに苦しみて、紙治をして太兵衛を刺さしめたるが如きは、就中、極めて不自然なるから、くりといふべし。

下の巻

こひ、なさけ、爰をせにせん、まゝみ川、ながるゝ水も、行通  
 ふ、人も、おとせぬうしみの、空、十五夜の月さへて、ひかり  
 かくらさかごあんごう、やまとや、傳兵衛を一字がき、ねむり  
 がち成ひやうし木にほん太が足取り、ちどり足、「ごよざ、く」  
 も聲ふけたり。かごのしゆ、いかふけたのと、上の町から  
 下おなご、むかひの、かごもやまとやの、くぐりぐわら、  
 つゝと入、おきいの國やの小はるさん、かりやんしよ、地むかひ、  
 と斗、ほの聞え、跡ハ、三ツ四ツあいさつの、程なく、くゞりに  
 よつと出、小はる様ハおごまりじや。かごのしゆ、すぐにな  
 すましやれ。ア、いひ残した、是、くはしやさん、小はる様に  
 氣を付て下さんせ、太兵衛様への身請がすんで、かね請取

たりやあづかり物。酒通ささせてくだんすな」と、地門の口からあすまたぬ、治兵衛、小はるが土に成種たねまきちらして歸りける。』



瀬にせん。峴川。瀬にせんは川の縁語なれども、又、まゝみ川に頭韻を成さんとせ  
るなり。瀬とは逢ふ瀬などの瀬にて、こゝを瀬にせん杜宇、老曾の森の杉の村立  
るなど、古より用ゐたり。音せぬ。丑みつ。時。草木も眠る丑満時などいへるより、  
水も音せぬとはいへり。さて、丑みつとは丑の第三刻なり。晝夜を各六時に分ち  
其一時を四刻に分つこと古の制なれば夜の八つ、即ち夜半を過ぐる一時に丑  
の時といふこれより、一時の四分の三を過ぎしときが丑の三刻なり。晝夜平分  
の日にて算すれば、三時半に當るなり。晝夜の長短に拘らず、晝を六時間、夜を六  
時間に分つこと、これ亦古の制なり。かど行燈は武藏屋本には、角行燈とあれ  
ど勿論門行燈なり。軒提燈などいふに同じ。一字書は一字宛はなして書ける  
なり。暗き行燈の文字にさへ注目せしめしは、萬籟寂たる夜景を思はしめんが  
爲なり。番太雅言集覽の増補には、穢多なりといれど、穢多に非ずとも番太小

屋といふに住みて、町内の火の番などするものをいふなり。番太郎と後に見え  
たるもこれなり。ごよざは御用心ごようじんの轉訛なるべし。後にも「せきせ  
き廻る火の用心ごよざ、云々」と見ゆ、今火の用心といふに似たるよび聲な  
り。いかうはいかんなきのいかど同じく、大の意にして、甚しくといふ意にも  
用ゐらるゝなり。迎ひの祝籠ものもは下女も祝籠もとなり。借りやんしよ  
— 借りませう。借りあしよ。借りやしよ。借りやんしよ。借りやんしよ。  
休ましやれ。休ませ。敬語あれ。請取つたれや。請取つてあれば— たれあ  
— たれや。

太兵衛が身請の談合成りしことを下女の口より説く、尤も巧なり。若し金せき  
で、親方からやるならば物の見事に死んで見せう。中巻とは、小春の誓言として、  
讀者の記憶するところ、小春は決して、此の身請に同意すべきに非ず、勿論其の  
談合は念佛講中にさへ噂せらるゝ程なれば、小春が耳には入れ、ど、今宵せき  
にせきし紙治の坐敷に送る程なれば、金請取りしは今宵なるべく、小春も、今初  
めて、確聞しけん。丑三つ時の物静なるに、小春治兵衛は、合圖の咳の聞ゆべき端  
近き二階座敷にあればこそ、土になる種蒔き散らして」とは列ねけるなれ。

ちや屋のちやかまも、夜一時やすむハ、八ツと七ツとの間に  
 ちら付たんけいのひかりもほそく、ふくる夜の川かぜさ  
 むくしもみり。「まだ夜がふかい、おくらせましよ、圃治兵衛  
 様のお歸りじや、小はる様おこしませ、それよびませ」ハてい  
 しゆが聲、地治兵衛くりにをぐハさと明、圃コレ、く、傳兵衛、  
 小はるにさたなし、みへ入れバ、夜明迄くられる、それ  
 ゆへ、よふねさせてぬけていぬる。日が出てからおこしてい  
 なしや。我ら今から歸るとすぐに、かい物のため京へのぼ  
 る。大分の用なれば、中ほらいの間にあふやうに歸るハふち  
 やう。さいぜんのかねで、そなたのさんやう合も仕廻、地  
 河庄が所へも、後の月見のはらひといふて、四ツ百五十め、請  
 取とつてたもらふしと、詞ふくしまのさいえつ坊が佛だんか  
 うたぼうが、ぎん一枚をかうしやれと、やつてたも、其外に

か、り合ハ、それよ、く、いそいちがはな銀五、是斗じや、仕廻  
 てねやれ、地さらば、く、もどつてあはふと、二足三あし行よ  
 りはやく立歸り。

茶屋の茶釜も夜一時云々とは、當時の諺なるべし。西鶴が、菟嶽本かにて見し様  
 に覺ゆれど見出し得ず。七つと八つとの間は、即ち丑三つ前後なり。短檠燈臺  
 のたけのひくきものをいふ。中拂ひとは大晦日と盆との二季の中間の支拂  
 なり、先にもいふが如く、二ヶ月拂が上方の習慣なれば、この十月も支拂の月な  
 り、こゝにはこれをいふなり。不定は前に見えし定の否定なり。四つ百五十  
 匁は、新銀四十匁弱米一石餘の値なり。西悦坊は計問なるべし。銀一枚云々  
 は、百目銀一枚のとなるべく、四寶銀の猶通用せし頃なれば、勿論、それなるべし。  
 新銀の二十五匁程なり、丁銀とて四十三匁内外のものあり、或はこれが、回向  
 しやれとは、勿論、情死をほめかせしなり。磯市が花銀五つ、磯市も、勿論、計問  
 なるべく、花とは纏頭なるべし。銀五つとは、何によりて數へしものにか、豆銀と  
 いふ最小貨は、大小不同なれども、これの數にて、大略の價值を稱へしものか。

「わきざしわすれたちやつとちやつと。詞何なんと傳兵衛、町人は爰安が心やすい、侍なれば其ま儘、せつ切ぶくするであろの。」  
 「我らあづかつて置いて、とんとしつ失念。小刀もそらふた」と、地地わたせば、取てしつかと指、「是さへあれば千人力。もふやすみやれ」と立歸る。「追付下おくだりなされませ。よふござりまもそこく楯に、跡はくろくをこつとりと、物音もなくしつ静まれり。」

小刀も揃うた、小刀は小柄なること勿論なり、脇差を預り置くこと當時茶屋の常法にして、小柄のみの失することなど妙なからねば、かく断れるは亭主らしき口吻なり、揃うたのたといふ助動詞、こゝにも全フル現在テラルの意に用ひたり。よござりま、嬉遊笑覧に寛保頃に「よござりましやうなふ」といふ語流行したりとて、ト養狂歌集、百物語などを引けり、其例より考ふるに「良く御座り申

さん」なうといふ嘆詞を附したるものなり、この語はその七八十年前の流行語の、さらに約まりしものなるべし、唯、客を送る語か、或は京に上らんといふを送る語か、恐くば前者なるべしと思はるれど、なほ考ふべし。  
 決死の治兵衛としては、稍多辯なるに似たれど、これ其決心が、一方に於ては、一の安心なればなり、されども、流石に心の落ち居ぬ趣は、脇差を忘れしことにはあらはれたり。

治兵衛ハつ、といぬるかほ、又引かへす忍び足、やまとやの戸にすがり、内をのそいて見る内に、まぢかき人かげ、びつくりして、むかひの家物かげに、過るまゝばし身を忍ぶ。  
 弟ゆへに氣をくだく粉や孫右衛門ハ先に立、跡にてつちの三五郎が、せなかにおいの勘太郎つれ、あんどうめあてにかけ來り、大和屋の戸を打たき、詞ちと物といませう。紙屋治兵衛ハいませぬか、ちよつとあはせてくだされ」と呼は



れバ、地扱は兄君きと治兵衛ハ、身う動ごきもせず猶忍ぶ。内から男のねほれ聲、今少時治兵衛様は、ま先ちつとさきに。京へのぼるとて、お歸りなされた。爰にては「ござらぬ」と。重て何の音なヒいも、な無みだはらく、孫右衛門、「歸らバ、道であ會ヒサツひそな物。京へとは合がてんがゆかぬ。ア、氣づか道ひで、身が震ふるふ。小はるをつれてハゆかぬか」と、胸にぎつくりよ横こたハる、心ぐるしさこたへかぬ、又戸をた叩けバ、更夜ふけてたれじヤもふねました。」御無むしんながら、ま一どお尋申たい。さいの國屋やの小ハる殿は、お歸りなされたか、もし治兵衛とつれ立行ていきはなされぬか。「ヤ、何じヤ小はるどのハ二かいにねてじヤ、進ア、先、心が落付た、心中の念はない。どこにか何處んで、此苦くをかける。一家、一門、親、兄弟が、かたつを片のんで、さうふをもむとハ、よも知しるまい。しうとの恨みに我身を忘わすれ

むふん無へつ別も出アやうかと、あ異けん見のたね種に、勘太郎をつ連て尋るかひもなく、今迄あハぬハ何事ごと」と、おろく涙の、ひとりごと。か聲くる、あ間いだのへだてねば、聞て治兵衛もいきをつめ、涙のみ込斗なり。」

脊中におひの勘太郎つれおひは負ひに甥をいひかけたるなりさればつれといふ動詞も、後の「駆け来り」も「戸をうち叩き」も、皆孫右衛門が働きなり。まちつとは「まうちつと」即ち、今少時なり。

二枚繪双紙の善次郎が兄を、覓むる條と同じ趣にして更に妙なり「ア、氣遣ひて身が慄ふ」の一句、肉身の情を描破し盡せり、治兵衛なるもの斷腸九回の念なからんや、されど、小春を「狐奴古狸奴」と罵りし時に、なほ太兵衛に請出させん無念さに、身も浮くばかり泣きしものを、彼は、今親しく小春の本心を聴きぬ、おさんの無事に家を守れりし時に、情死を決心せし紙治は、今既に改悟すべき時機を失へるなり、如何にして顔を立つべき様もなき身は、唯一死、我が戀の犠牲たるの外、何の處にか満足の面影をも覓めん。

「阿ヤイ、三五郎。あほうめが夜るくうせる所外にハしらぬ  
 か」と、地いへバ、あほうハ我名ぞと心得て、調しつていれと爰で  
 ハ恥しうていはれぬ。」しつているとは、サア、どこじや、いふて  
 聞せ。「聞た跡でしからしやんな。まいばんちよこ、ゆく  
 ところハ、いちのかはのなやの下、大だハけめ、それをたれ  
 がぎんみする。サア、こいうら町を尋て見ん。勘太郎にかぜ  
 ひかすな。調こくにもたぬと、めを持て、かハいや、つめたい  
 めをするな。此つめたさでしまへばよいが、地ひよつと、うい  
 めハ見せまいか。」にくや、くのそこしんハ、ふびんくの  
 うら町を、いざ尋ん、と行過る。」

うせるは、來るといふことをあしざまにいひし語なり、わせるは來られるのわが、  
 同行のうに通ひしものか、わせるは「わたらせらる」の約まりしものなるべし。  
 市の側の納屋の下、天満の市の側の納屋の下なり、納屋とは、上巻に云ひしが如

く、賈淫の巢窟なり。とくはたぬ、くは殺の義か、今も海岸の邊陲にては、殺  
 物を炊きたるものを、とくのめしといへり、殺類に對しても顔が立たぬといふ  
 ことなるべし。とくはちの轉音なり。

阿房を描きしは局面を變化せんが爲なり、大体、この淨瑠璃は、上巻の末段の太  
 兵衛の亂暴と、中巻の末段の五左衛門が強硬とを除けば、全篇あまりに打ちし  
 めりて、陰氣なれば、三五郎を以て、時々異彩を施すは至當なる構造なるべし。  
 「憎やく」の底心は不便くの裏町をといふ一句輕妙いふべからず、弄語もこ  
 こに至つて神に入るものといふべし、かゝる轉化の妙は、思ふに俳諧のうつり  
 より學び來りしものなり。

影へだたればかけ出て、跡なつかしげにのび上り、「心に物  
 をいはせてハ、十悪人の此治兵衛、しに次第共捨おかれず、  
 跡から跡まで御やつかいもつたいなや、と手をあハせ、  
 ふしおがみ、く、猶、此上のおじひにハ、子共がことを」と斗に  
 て、しばし、涙にむせびしが、「とてもかくごをきハめしうへ、

小はるやまたんと。

十悪は佛語なり、殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪慾、瞋恚、邪見をいふ。

五左衛門に對する悔悟は、なほ激する所ありて中正を得ず。人間らしき治兵衛が眞實純粹なる悔悟の語は、唯この一語のみ。げに彼が小春以外の人々に對する語は、激せしに非ずば、屈ぐるところあり、蔽ふところあり、未だ眞に眞情を披瀝し盡すべき勇氣なかりしなり。否、明かに其眞情を自覺する力だになかりしなり。彼は、今此に情婦と死を俱にすべき希望を得て、暫く其とほくうかうかの境地より、自己の本心に復歸せり、眞に自ら、十惡人なることを悟りぬ戀の爲に忘れはてし兩兒は、三五郎の背なる面影とともに、先づ念頭に浮びぬ、これ人情自然の逕路なり、然るを彼は一言だも、其大恩ある女房に及ばざりしものは、何が故ぞ、彼が後段に「おさんは男にとりかへされ、暇やれば、他人と他人」といひしを以て、男の恨におさんをさへ忘れはてしものと斷すべきか、否々、おさんに對する苦心は、其情死の刹那まで、決して全く忘れ果つるを得ざりしなり。過酷なる舅の所置は、寧ろ、僥倖にも、自ら欺くべき口實となりしのみ、おさんに對する恩義に思ひ及ぶことは、現下唯一の安心の地たる、情死そのものゝ安慰を破

壞する所以なり、彼は強ておさんを思はざらんとしたるなり、更だも、覺悟を極めし上は「といふ獨言の裏面には、必ずおさんが恩義に對する苦しみ記憶の影の潜めるなり。

大和屋 やまとやの くぐりのすき間さしのぞは、内にちら付人  
かげ、小はるじやないか、「待てとしらせのあいづのしは  
ぶき、エヘン、く、かつち、あへんにひやうと木打ませ  
て、上の町からばん太郎が、くる、く、たぐる風の夜ハ、せき  
せき廻る火やうじん、調こよぎ、地く、くも、人忍ぶ 我にハ  
つらき、かつらぎの 神がくれしてやり過し、すきをうかが  
ひ立よれば、くより内からそつとあく。」

く。く。たぐる風の夜はせきく。廻るたぐるとは小倉にて咳することはいふ。近松は唐津に在りしかば、小倉語も知れりしなるべく、古は、他にも行はれけん」と但言集覽にあれば「合圖の咳」の縁に來るといふ咳する風風邪といひかけさ

らにせきく(急きく)を咳にいひかくとつらねたるなるべし。葛城の神がくれ葛城の神は形の醜さを恥ぢて夜のみ岩橋をかけ賜へりといふ謠曲葛城などにも見えたる傳説によりてつらねたりとはきこゆれどかみがくれといふ語はまらず神かくし天狗にかくされたりなどいふことに俗にいふなりといふ語を變じて用ゐしものか。  
 さきの「よごさくも弊ふけたり」の一句も承應するところあり用意の周密なるを想ふべし。

「小はるか」待てか、治兵衛様。地は早ふ出たいと氣をせせせく程まはるくるま戸のあくるを人や聞付んとしやくつてあくれば、しやくつてひびき、みまにとさるく胸の内、治兵衛がそこから手をそへても、心ふるひに、手さきもふるひ、三分四分五分一寸のさきの地ごくのくるしみよりに、おにの見ぬ間とやうくに、明て、嬉しき年の朝、小は

るハ内をぬけ出て、たがひに、手に手を取かハし、北へいかふか、南へか、にしか、ひがしか、行末も、心のはやせし、み川ながる、月にさからひて、あしを、はかりに三重

明けて嬉しき年の朝は小春の春にいひかけたるなり。鬼の見ぬ間、鬼の見ぬ間(或は留守に)洗濯といふは古き諺と見ゆ嬉遊笑覧に、小供の戯にこの語を用ゐしことも見ゆ。流る、月にさからひては、影十五夜の月芽えての首尾にして、東方なる網島に向ひしなり。足をばかりにと終りしは、亦三重の三味を弾くべき所なればなり、されど、こゝは「橋盡し」の「走り書」にいひつゝけたり。

末段、車戸を開くところは、曾根崎のお初治兵衛が戸を開きて出るところと、頗る相似たり。彼には火を打つ音に紛らかして戸を開く趣向あり、此には拍子木に合せて咳する趣向あり、彼のわざとらしきは、これの自然なるに如かず。且つや、曾根崎にては、家内は既に目醒めたり、其後の頗る長き道行きに、追手のかゝらぬもいかいはしきを、此は再びまで呼び覺まされし不平げたる眠ぼれ聲も、はや静まりはてし寐入りば、ななりさるを、なほ、足をばかりに走りいでつ、遠く

網島に達する頃、寺々の鐘の聲に驚きて、初めて「とても生存へ果てぬ身の最期  
いそがんとは思ひ起こしぬ、鬼の見ぬ間とやうく」に明けて嬉しき車戸を脱  
れ出でし小春治兵衛には、これ極めて自然なる舉動なるべし。翁が健筆も、世話  
物の嚆矢と稱せらるゝものに比して、益々圓熟し來れるを見るべし。

### 名残の橋盡し

はしり走がきひ。うた諸ひの本近ハ衝(こ)このへり流う、やろ野う郎(ら)ぼう帽し子ハ若わ  
かむ葉らさき、あく惡し所よ狂ぐるひの身果のはてハ、かく新成行と  
定まりし果(ツマ)し釋や迦かのおし後(チ)へも有事ことか見見たし証う証き身因のいん  
ぐ果(ツマ)ハ証きやう。あす明ハ、世音上草のこと音く草さに、かみ紙や屋治兵衛が心  
中九と、あだ散名散ちり散行散さ散くら散木散に、ね根ほり根葉根ほり根を根、さ勝さ勝う勝し  
の、はん紙する紙かみ紙の紙其中知に有知共知し知ら知ぬ知死神が神み神に、さ勝さ勝は勝れ  
行商も、し商や商う商ば商い商に、う疎と疎き疎む疎く疎ひ親と親く親は親ん親念親も、と親す親れ親バ  
心歩ひ歩か歩さ歩れて、あ歩ゆ歩み、な惱や惱む惱ぞ惱道ナル理ナル成ナル」

走り書とは「足をばかりに走る」と前段より續けて、この「橋盡し」は走り書きに書  
きたりといはん料なり。元來、世話物は、時好に投すべきが爲に、最近の出來事を  
争つて場に登せんとせしものなるが故に、心中沙汰などあれば、まづ、道行きの

一段を草し、後に前段を加ふることも珍らしからず、背庚申の上巻が極めて全篇に縁遠きが如きも、思ふに後に加へたるが爲なり。この一篇も、近松が偶々京都に在りし時、此の心中沙汰起こりし爲に、急に呼びむかへて草せしめられたれば、駕籠を下るや否や、直ちに道行の一段を走り書きせしが故に、走り書と筆を起こしたりとも聞けり。謠の本は近衛流、近衛流とは、近衛關白信基より出し書風にて、今の謠本の文字もこれなれば、古より定まりしものと見ゆ。勿論「走り書」の縁なり。野郎帽子は若紫、野郎は半元服の若者をもいへれど、こゝは悪所の縁に用ゐたりと見ゆれば、妓童のことをいふか。若紫の野郎帽子當代の流行なるべし。謠の本は近衛流の句とともに「定まりし」といふ語の序詞として定まりしものを列ねしなり。根はり葉はりとは、今もあらぬことまでをも詮索することにいふなり。繪双紙は當時心中沙汰などの讀賣に繪など入れし摺り物を賣りしなるべし。淨瑠璃の丸本にも、繪入のものあれど、それにはあらず。「仇名散り行くに」に「櫻木をついけ、其木の縁に根はり葉はり」といひ、はりの縁に版といひ、版する紙に紙商賣をほのめかし、死に神とつうけたる、弄語の自在なる、殆んど驚く可きに非ずや、されども、あまりに巧なるが爲に、充分なる讀書力

なきものは、唯其の美しき楷調に酔ひて、動もすれば箇中の意義を忘れんとす。「道行」が、久しからずして、義太夫節に語らるゝこと稀なるに至りしも、今日の普通の讀者が、動もすれば道行きの文に興味を感ぜざるも、是れが爲にして、而して却つて、上方唄に、半太夫に、團八に、江戸長唄に、謠ひ物として、はなは久しく、近松が原作の儘なる道行きの一部、行はるゝもの多かりしは、其の楷調の流麗なるが爲なり。思ふに、道行きは新古今の和歌に似たり、其詞藻の巧緻が、動もすれば其内容を曖昧ならしむることあるは、蔽ふべからざる事實なり。

頗る蛇足に似たれども、今童蒙の爲に、この條の要旨をいへば、謠の本が常に近衛流なる如く、野郎帽子が常に紫なるが如く、放蕩の果は常に心中に終らざる可からざるか、明日は讀賣の繪双紙に、仇し名を謠はれんことも、商賣を疎かにせし因果ぞと觀念はすれども、なほ思ひなやむとなり、前段にも、屢、孝行、貞節をほのめかしたれども、かく直接に、因果を説けるは、こゝを初とすべし。近松が、痴男、痴女に對する同情の深きは、動もすれば、没道義とさへ稱せらるゝ程なれども、なほ健全なるものを、其の底所に存せり。世間に多い心中も、銀と不孝に名を流す、戀で死ぬのは一人もない「長町女腹切」といふ健全なる思想は、嘗て、其心胸

の奥所を離れざるなり。

頃は十月十五夜の月にも見へぬ 身の上ハ、心のやみの印  
 かや、今おくしもハ、あすきゆるハかなきたとへの、それより  
 も先へきへ行、ねやの内、いとしかハひとしめてねし、うつ  
 りかも、何とながれのし、み川 西に見て、朝夕渡る 此橋  
 の天神橋ハ、其むかし かんせうじやうと申せし時、つくしへ  
 ながされ賜ひしに、君をしたひてださいふへ、たつた一とび  
 梅田ばし、跡おひ松のみどりばし、わかれをなげき、かな  
 しみて、跡にこがる、櫻ばし、今に咄を聞渡る 一首の歌の  
 御あどく、かゝるたつときあら神の氏子と生れし身を持って、  
 そなたもころし我もしぬもとハと とへハ、分別の、あの、い  
 たいけなかいがらに 一ばいもなきし、みばし。  
 消え行くは、勿論露の縁にて、明日にもならで死に失すべきことをはのめかし

たるものにして、下の「移り香」にかゝれり。西に見ては、蜷川を西に見てなり。  
 天神橋以下の橋々は、曾根崎近傍及び網島に至る道路に近き橋々の名にして、  
 必しも、道路の順に従へるには非ず、勿論、悉く通行せるに非ず。あと老松は、跡  
 を逐ひ暮ふといひかけたるなり。跡にこがる、梅橋とは、飛梅ごとも、菅公  
 の愛櫻の枯れたりといふ俗説を用ゐたるなり。荒神とは、實は現神にして、現  
 界の人間の神となりしをいふなり。いたいけとは、今もいたいけ盛りなどい  
 ふ語にて、可愛らしきことより、小さきことに轉じて用ゐることなほ、「可愛らし  
 き」といふ語をも、小さきことにいふに等し、分別が小さき蜷貝に一杯もなしとな  
 り。蜷橋は短かき橋なれば、後の「短かき」の序ともなれるなり。  
 「何々盡し」などいふことは、思ふに、連歌俳諧の賦物より起こりしものなるべし。  
 賦物の古は形は、例へば、三代集の作者の名或は一地方の名所などの如き語を、  
 各句によりこむものにて、必竟、言語上の戯なり、勿論、頗る困難なることなるが  
 故に、作者の巧緻に感せしむるには足れども、詩としては、何等の用をも爲さず。  
 この段の如きも、許多の橋の名を列ねたる巧緻は驚くべしといへども、詩とし  
 ては、其橋名を用ゐたりといふことの爲に、一の價值をも加へず、否、これを用

ゐんが爲に其内容即ち治兵術が述懐に對しては無用なる迂曲の筆を用ゐたる痕跡はこの偉人の作に於ても著明なりといふべし天神橋より荒神の氏子と生れし身を以てといふまでは勿論強ひて列ねたるものにしてこの瞬間に紙治が心に浮ぶべき思想には非ず。

見<sup>短</sup>じかき物ハ我々が此世のすまる<sup>住居</sup>秋の日よ十九と廿八年の  
け<sup>今日</sup>ふのこよひをかぎり<sup>限</sup>にてふたりいのちのすて<sup>所</sup>どころ  
ちいとば<sup>童</sup>との末迄もまめでそはんとちきり<sup>契</sup>した丸三  
年も<sup>期</sup>なじ<sup>染</sup>まいで此さい<sup>災</sup>なんに大江橋あれ見や<sup>難</sup>なにハ小  
橋から<sup>舟カ入ル</sup>舟入はしのはまつた<sup>積</sup>たひ是迄<sup>來</sup>くれバくる程ハめい  
どの道が近付と<sup>途</sup>なげ<sup>歎</sup>けバ女もすがり<sup>願</sup>寄もう<sup>マッ</sup>此道がめい  
どかど見<sup>途</sup>かハす顔も見えぬ程<sup>交</sup>落る涙にほり<sup>細</sup>かハのはしも  
水にやひ<sup>没</sup>たるらん北へあゆ<sup>歩</sup>めば我宿を一<sup>日</sup>めに<sup>目</sup>見るも見  
返らず<sup>方</sup>子共の行衛女房の<sup>方</sup>あハれも胸におし<sup>押</sup>つゝ<sup>包</sup>み南

へ渡る橋ば<sup>柱</sup>しら數もかぎらぬ家々を<sup>如何</sup>いかに名付て<sup>軒</sup>八けん  
や<sup>屋</sup>誰と伏見のくだり<sup>下</sup>舟つかぬ内にと道いそぐ<sup>業</sup>此世をす  
て<sup>二</sup>行身にハ<sup>一</sup>聞もおそろし<sup>恐</sup>天満ばし<sup>天冠</sup>よと<sup>遊</sup>とやまとの  
ふた川を一ツ<sup>二</sup>ながれの<sup>流</sup>大川や水と魚とはつ<sup>遊</sup>れて行我も小  
はるとふたり<sup>二</sup>づれ<sup>一</sup>一ツや<sup>二</sup>いは<sup>一</sup>の三瀬川<sup>瀬</sup>たむ<sup>手</sup>けの水に請た  
やな<sup>一</sup>。

秋の日は短かきことの譬なれど今の時候は冬なればやゝ縁遠き語なるに似たり此世の住居を厭<sup>下</sup>き秋といひかけたものかまめは無事息災の義なり古語のまめ<sup>忠實</sup>なせの義今もまめ<sup>まめ</sup>しいまめに働くなぞいふはこれなりより轉じたるものか大江橋今の堂島の大江橋は貞享年中に架する所にしてもとは今の天神橋と天満橋との間に在りしとぞこの邊はやゝ道路の順序に従へるが如く見ゆれば或は當時古の橋の聴衆が記憶に存せりしを用ゐしにはあらずか南へ渡る云々天満橋を南に渡りしなり橋柱といふに數といひかけたり天満橋は名高き三橋の一なれば橋柱も數あること勿論なり八



軒家は大川南岸の町名にして、伏見よりの名高き夜舟の着する所なれば、誰と伏見と列ねたるなり。着ぬ先とは、夜舟が着けば、旅客の群衆すべければなり。淀と大和、淀川と大和川とは、天満橋の上流にて相會して大川となる。三つ、瀬川といふ川ありやなしや知らず、淀川と大和川との會流するところ、三叉をなすを、かくいひなしたるには、あらじかか、人の願をみつ川(山城)の(など)、拾遺愚草の長歌などにも見ゆると、同じ趣にて、「二つ又、に死ぬる願の満つ」といふことを、三つ瀬といひかけたものか。

十九と二十八年といふ文字は、二人の性格を知らんとするもの、記憶すべき所なり。

我宿を強て見かへらず、子供の行衛女房の哀れも胸に押し包みといへるは、紙治が、其戀愛の満足の爲に、故意に一切を抛棄せんとする苦惱を、はのめかしたるなり。孫右衛門が後る影を拜せる條の評に、参照して、治兵衛は悟れり、小春は悟らずとやうに、斷じたる逍遙子が、評釋の必しも、うべなひ難きを思ふべし。何かなげかん、此世でこそハそハす共、みらいはいふに及ばず、こんどのく、づつとこんどの其、さきの世迄も

夫婦ぞや、一ツはちすの頼にハ、一げに一部、げがきせし大じ大ひのふもんぼんめうほうれんげ京ばしをこゆれば、いとたるかのさしの玉のうてなにのりをへて、佛のすかたに身を成り橋。しゆじやうさいどがま、ならバ、ながれの人の、此後ハたへて心中せぬ様に、守りたいぞと、およびなき、ねがひも世上のよまいこと、思ひやられてあはれなり。』

夏書、夏三ヶ月九十日間、出家、修行の暇を得て、安居するが故に、夏断、夏經、夏書などをなす、俗人も亦これに擬して、夏中に經文などを書寫するを夏書といふなり。治兵衛が、法華經の普門品を夏書きせしとは、其人格より見て、やゝいかはしき觀なきに非ず。京經橋の弄語の爲に起こりし失敗か、或は當時一般にかかる風習ありしにか、未考へず。流の人、憂き川竹といひ、流れを立つるなごいふは、思ふに「浮れ女の浮」といふ字より起こりし暗喩なるべし。「うかれめ」といふ語は、はやく和名抄にも見えたり。

橋盡しはこゝにて終れり、すべて、二人が網島に向つて歩める様と、其感想とを

描かんと企てしものなり。橋名の爲に意を害するに近きものあれども、大体男女の胸中を交々叙し來る、巧ならざるに非ず。かの「明けてうれしき年の朝」といへる利那より、この薄弱なる男女が、やうく「自覺を増し來るにそへて、家と思ひ身を思ふ涙と戀愛の成就の裡に、強て満足を覓めんとする心との相争ふ様を、交々列ねて、終に「絶えて心中せぬ様に、守りたいぞや」といふ世迷言に終る。これ所謂、愛身の因果經にはあらぬか七十歳に近き巢林子が頭腦は、既に極端なる没道義の理想を容れず、所謂人を樂しましめつゝ、ひそかに教訓するを忘れざる、詩人の眞諦を得たるに似たり、よくこの點を讀破せば、これ斷じて誨淫の書に非ざるを知るべし。

野田の入江の水けぶり、山のはしろく、ほのぼのと、あれ、寺々のかねのこゑさうく、かうしていつ迄か、とてもながらへはてぬ身を、さいごいそがん、こなたへと、手に、百八の玉の結おを、涙の玉にくりまぜて、なむ南無阿彌陀佛あみ嶋の大長寺、やぶの敷そとものいさゝかは、ながれみなざるひのうへを、さいご所と

着にける。

野田の入江は野田の細江など、歌にも讀める名所にして、網嶋より東の方に見渡たさるゝなり。かうくとは鐘の響を、かくくにいひかけたるなり、頗る異様なるかけ語めけど、かの吉水僧正が長歌の「み山の鐘をつい」と我が君が代を思ふにも、などに比ふれば、ことに苦しき語ともいふべからずや。百八の珠の緒云々は、珠數の珠を泪の玉とともに練るとなり。大長寺は網嶋に在る淨土宗の寺なり。いさゝ川、いさゝ小川なごもも古くよりいへり、いさゝはいさゝかのいさゝにして、小さき意なり、小川といふに同じ。

こゝに、道行きは全く終れり。心中の段に、未來といひ、蓮臺といふが如き語多きは、怪しむべくもあらねど、因果經より初めて頗る佛者めきし語を用ゐしのみならず、法華經の夏書きといひ、珠數を爪繰るといへる、思ふに大長寺近傍の心中といふ事實より起りし聯想にして、一は、直に成佛得脱せしめん用意なるべけれども、前段の治兵衛の性格に對しては、既にいふが如く、やゝいかゞはしくも感せらる、この點より推しても、道行より筆を起こして、後に、前二卷を作りしものと思はる。

「なふいつ迄、うかくあゆみても、爰ぞ人のしにばとてさだ  
 まりし所もなし。いざ爰をわうじやうばと手を取、土にざし  
 ければ、「さればこそ、しにばハいつくもをなじこと、いひな  
 から、私わたしが道々、思ふにも、ふたりがしにがほならべて、  
 小はると紙屋治兵衛と心中とさたあらば、おさん様より頼  
 にてころしてくれるな、ころすまい、あいさつきると取かハ  
 せし、そのふみをほうぐにし、地大じの男をそ、のかしての心  
 中ハ、流石さすが一ざながれのつとめの者、義理ぎりしらず、いつハ  
 り者と、世の人、千人万人より、おさん様ひとり下のさげし、  
 恨み、妬ねたみもさぞ、と思ひやり、未みらいのまよひハ、是一ツ。  
詞私わたしを爰でころして、こなさんとこそ所をかへ、地地つ  
 とわきで」と、勢打もたれ、口説くどけば、俱ともにくどき泣。  
さればこそ、さうこそ、又は、きこそあるべき所なり、本のまゝにては解し難し。

往生は、往生安樂國など、用ゐて、他界に往きて、新らしく生るゝことなり。  
 挨拶切る挨拶とは、聲と鼻の挨拶の中に節立つ早苗月、卯月の紅葉聲と鼻の不  
 和といふことなりなどとも用ゐて、關係といふ程の義切るとは断ち切る事  
 なれば、こゝは治兵衛との關係を断つといふ義に解すべし。丹波與作にも、「そ  
 なたのおてき松坂の七二は何として見えぬぞ、……それは未生以前で、今は  
 挨拶きりくすしといふ馬追聲も聞ぬはいのなど、も用ゐたり。一座流  
 れ、一座々々にて、他の客に流れ移るといふ義か。ついは、日本紀の急居をつき  
 とよみたる語より出で、急なることに用ゐ、又轉じて、ついにそこにあるなせと  
 もいふと、俚言集覽に見ゆ、こゝのついでは、「ついでそこのついでに同じ、直ちに傍ら  
 にて」となり。

治兵衛は、扇におさんを取りかへされたるが爲に、自ら欺くべき口實あり、否な  
 其以前に於ても、既に戀の爲に一切を抛つべき覺悟は存せりき、ざるを、小春に  
 は、一たび其情死を思ひ止まりし理由のなは未だ滅せざるなり、彼の稍安んず  
 るが如く、此の稍安んせざるが如きは、これが爲なり、治兵衛にも勿論、妻を思ひ  
 子を思ふ心の全く消えはてしにはあらねど、こゝは小春に對しては頗る口外し

難き苦惱なり、さるを小春がおさんに對する苦惱は治兵衛に對して恥づべきものに非ざるが故に、これを口外することを以て、小春がなほ意氣地にかからざれしものとは斷すべからざるなり、(消遣子の評釋参照)彼が「小供の行方女房の哀を胸におし包むも、此が死んだ跡は袖乞非人の飢死もなさるべき老母を口にせざるも、これ皆互に恥ぢ、互に謹むが爲なり、彼も此も、唯、これ煩惱の塊僅かに戀愛の成就の裡に、微かなる満足の影を認めて、故らに一切を抛下せんとするのみ。

「ア、ぐちなこと斗、おさんハしうとに取かやされ、いとまをやれば、他人とたにん、りべつの女に何のざり、道すがらいふ通り、こんどの、こんどの、ずんと、こんどの先の世までもめをとちぎる此ふたり、枕をならべしぬるに、たれがそしる、たがねたむ、「サア、其りべつハたれがわさわたしより、こなさん、猶ぐちな、からだがあの世へつれ立か、地所々のしにをして、たごへ此からだハ、とび、からすにつつかれても、ふたりの

玉しゐつきまつハリ、地ごくへも、ごくらくへも、つれ立て下さんせ」又ふししづみ泣ければ、聞チ、それよ、此からだハ、ちすいくはふう、しぬれば空にかへる。ごしやう、七生、くちせぬ夫婦が玉しゐ、はなれぬ印がつてん」と、わきざしすバとぬきはなし、もとひきハより、我くろかみ、ふつ、ときつて「是見や、小はる、此かみの有中ハ、紙屋の治兵衛といふおさんが夫、かみ切たればしゆつけの身、三がいの家を出、さいしちんほうふずいしやのほうじ、おさんごいふ女房なれば、地おぬしがたつるぎりもなし」と、涙ながら、なげ出す。「ア、嬉しうござんす」と、小はるもわきざし取上、あらいつ、すいつ、なで付し、むごや、おしげもなげしまだ、はらりご切てなげ捨る。かれの、す、き、夜はのしも、共にみだるるあわれさよ。」

たりすべて「始終を通じて」といふ程の意義なりされども、このころには、稍變じて「道すがら」といへば、唯途中といふ程のこととなりぬ。今通りすがりに「なごいふすがりも同じ語なり。地水火風は先にもいへる四大にして、即ち當時宇宙を造れる元素と信せられしものなり。三界は上界、中界、下界をいひ、又欲界、色界、無色界をも、佛界、衆生界、已界をもいふされど、こゝにては「子は三界の首枷」  
 三界は水の上の泡などいふ三界にして、唯世界といふ程の義なり。妻子珍寶不隨者は、經文の句にして、意味はきこえしまゝなり。枯野の芒、夜半の霜が、切りすてし投島田ととも亂れしとなり。

男女の髪を切る様をかき分けし巧緻に注目すべし「ふつ」と切るは自ら男子の姿にして「はらりと切るは、どこまでも婦女の体なり。妻子珍寶不隨者にして、なほ小春といふ妻を、七生まで伴はんとす、吾人よりこれを見れば、唯矛盾の甚しきを見るのみしかも、其矛盾の間にすら強て一種の安心を求めんとする、これ治兵衛が苦惱なり。小春も亦自ら欺くべき所以のものを、竟るに急なり。嬉しうござんすと叫ぶも、亦自ら其所なり、彼も此も、豈に其矛盾を認るの明なからんや、唯何物かを捉へて、自らいひわけせんとするに急

なる亦憐むべからずや。

「うき世をのがれし、あまほうし、夫ふのきりとはぞくのむかし、とてものことに、さつぱりと、しにばもかへて山と川、此ひの上を山になぞらへ、そなたがさいご、我は又、此ながれにてくびく、るさいごハおなじ時ながら、しやしんの品も所もかへて、おさんに立ぬく心の道、地そのかかへ帯こなたへ、とわかむらさきの色もかも、むじやうのかぜにちりめんの此世、あの世のふたへ廻り、ひのまないた木にしつかとく、り、さきをむすんで、かりはのきじの、妻ゆゑ我もくびしめく、る、わなむすび、我と我身のしに、ごしらへ、見るにめもくれ、心くれ、こなさんそれでしなしやんすか、所をへたてしぬれ、そばに居るも少の間、爰へ、と手を取あひ、やいばでしぬるは一思ひ、さぞくつうなされうと、思へ、いと

い、く」と、と、めかねたる、忍び泣、首くびく、るもの、どつくも、しぬるにおろかの有物か。よしなことに氣をふれ、さい最この念をみださず、共西にし、く行と行月を如によらいとおがみ、めをはなさず、只西方をわすりやるな。心のこりのことあらバ、いふてしにや。「何もないく。こなさん、定めておふたりの子た、遺ちのことが氣にか、ろ。」ア、レ、ひよんなこといひ出して、又なかしやる。地父で、親が、今ゑぬる共、何心なく、すやすや、と、か、可ハ、い、や、ぬ、か、ほ、見、る、様、な。わ、す、れ、ぬ、ハ、こ、れ、ば、つ、か、り、と、が、つ、ば、と、ふ、し、て、泣、し、づ、む。」

捨身とは、尼法師の縁に、ことに佛語を用ゐたるのみ。抱帯が、若紫の縮緬にして、二重まはりの長さなりしなり。持場の雄子は、使の鶴など、列ねて、多くは子と思ふことに用ゐれども、かく妻故といふ謔もありしにか、後の畏結ひの畏は勿論、雄子の縁なり。氣にかゝるのろは、らむの轉らうなれども、既にかく約

まりし語なれば、綴字法を改むべきにはあらず。泣かしやるは、泣かせやるの轉訛なり。さて其やるは、狂言記などにも「おいひやる」「おしやる」などの例多し。思ふに、あるが、上の音の母韻と連りて、やるとなりしなるべし。

由來「暇を遣れば他人」と他人といふ口實は、「わしや去狀は受け取らぬ」と呼びしおさんに對し「治兵衛が去り狀、筆では書かぬ」といひし自己に對し、到底、充分なる口實となるに足らず、さらに新らしき口實を覓めて、尼法師の姿は、かるとも、なほ未だ安んずる能はざるなり。即ち、更に「捨身の品をかへて」辛うじて自ら慰めんとして、而して、なほ、小供等が寝顔の面影に惱まざる。嗚呼、三年の罪過は、一身を犠牲にしても、なほ贖ふに足らざるか。

小春の一言一句は、毎に治兵衛の苦痛なりき。治兵衛は、小春が詞の、毎に、自家が小安心寧ろ、あ、さ、ら、め、と破壞せんとするに苦しみて、百方口實を設けて自ら慰めん、とす、其、頗る、悟りたるが如く、安んじたるが如き語多きは、強て自ら慰めんとする、否な寧ろ、小春が言語の恐るべき攻撃に對して、其小安心を守らんとする抵抗力の發展なり。其、定めてお二人の子達のことか、といふ攻撃に對しては、既に何等の口實もなく、何等の抵抗方もなし。「ア、レ、ひよんなこといひ出して、

泣かしやる「嗚呼これ何等悲惨の聲ぞ人間遂に自ら欺くこと能はざるなり。治兵衛が自ら守るに急なりしは實に小春が僥倖なりき」何もないく」といへる語の裏面には豈に袖乞非人の母親ならんや治兵衛は自己の苦悶の爲に、又これをいひ出すべき餘裕なかりしなり。

聲もあらそふ村がらすねぐらはなれてなく聲ハ、今のあハれをさふやとていと涙をそへにける。聞なふあれをきやふたりをめぐむかひのからす、ごわうのうらにせいし一枚かくたびに、くまののからすがお山にて三羽づゝしめると、むかしよりいひつたへしが、地我とそなたがあら玉のさしのはじめにきしやうのかきぞめ、月のはじめ月かしら、かきせいしの數々、そのたびごとに三羽づゝころせしからすハいくばくぞや、つねにハ、かはい、くと聞、こよひのみみへハ、其せつ生の恨のつみ、むくひ、くとときこゆるぞや。

むくひとはたれゆへぞ我ゆへつらさあをとぐる、ゆるしてくれ」と、だきよすれば、「いや、わしゆへ」としめよせて、顔と顔を打かさね、涙にごづるびんのかみのへ、のあらしにこほりけり。」

哀を問ふやとては、問ふやと思はれてなり。鳥がお山にて三羽づゝ死ぬる當時の俗説か、他に見る所なし。鳥が哀に、三羽づゝ死ぬる當小供の面影に抵抗力を失ひし治兵衛も「いふことない」といひし小春も、今や、ともに其本心の愚痴に歸りぬ。後に響く晨鐘なくば、徒らなる恨悔の涙は、遂に際限なからんなり。

うしろにひく大長寺のかねのこゑ、なむ三ぼう長き夜も、夫婦が命みじか夜と、はや明わたる、じんてうに、さいこハ今ぞと、引よせて、跡までのこるゑに顔に、なきかほのこすな、のこさじと、につとゑかほのしろくと、しもにこゑて手

もふるひ、我から先にめくらみ、やいばのたて共泣涙。一ア  
 せくまい、はやう、く」と女がいきむをちからくさ、  
 ぜさそひくる念佛ハ、我にす、むるなむあみだ佛、みだのり  
 けんとうつとさ、れ、引すへても、のりかへり、七てん八とう、  
 こハいかに切先のごのふゑをはづれ、しにもやらざるさい  
 このごうく、共にみだれて、くるしみの、氣を取なをし、引よ  
 せて、つばもと迄指通したる一刀、急ぐりくるしき、曉の見  
 はてぬ夢さきへはてたり。』

莞爾笑顔しる。と、女主人公小春の容貌を形容せし唯一の句なり、名工は、言  
 語を以て圖畫を作らず、しかも紙治と太兵衛とが戀着は、其美貌を想像せしむ  
 るに於て餘あるなり。霜にこいて云々、以下は治兵衛の有様なり。えぐり  
 苦しきの苦しきは後の夢にかゝれるなり、苦しき夢を見はてぬにさめたるが  
 如しとなり。

最後の決心は、常に機會の將に逸せんとする時に於て成る、無意味なるが如き  
 晨鐘が、忽ち最後の決心を促ししはこれが爲なり、試みに、近松が描きし他の心  
 中を見るに、重井筒の心中は、月は傾く、東は白む時なり、今宮心中は、夜明も近づ  
 く、ちらく人通りもある頃なり、お嵯峨嘉平次は、既に明け行く鳥の聲に驚か  
 され、お初徳兵衛は、曉の知死期につれて絶え果てたり、蓋し、よく、人情の機微を  
 解するものといふべし。

近松が心中を描くや、常に、忌憚なく、最期の苦痛を叙して、人をして酸鼻に堪へ  
 ざらしむ、是一部の批評家の、頗る攻撃する所にして、予も亦必ずしも、深く辯護  
 せんとはせず、されど、當代の文化は、今日と比すべきに非ず、若し源物氏語の頗  
 る卑猥なる部分を、當代の風俗として許すべくば、戦國の殺伐殘忍の餘風、なほ  
 全く滅せざりし時代として、這般の描寫も、さまで讀者の惡感を惹くに至らざ  
 りしものとして、恕すべきにはあらぬか、且つや、近松が裡胸の因果經は、痴男痴  
 女をして、眠るが如き大往生を遂げしむるを許さざりしにはあらぬか、近松が、  
 殘忍ならぬ、女子の最期を世話物に描きしは、波の鼓のお種のみなるが如し、而  
 してそは、武士の及に倒れたるが爲のみならず、又、充分なる悔悟の後なるが故



に一時の過失は、よく一死を以て贖ふに足るべしとなし、が爲にはあらじか。  
 づほく、めんさい、うけふぐハに、はおり打させしがいをつくる  
 ひ、泣てつきせぬなごりのたもと見すて、かかへをびたく  
 りよせ、くびにむなを引かくる寺の念佛も切急かう、うえ  
 ん、むるん、ないしほうかい、平等の聲をかぎりひの上より、  
 一れんたく生、なむあみた佛とふみはづし、暫くるしむ、  
 なりひさご、かぜにゆるるゝごとくにて、しだいにたゆるこ  
 きうの道、いさせきとむるひの口に、此世の縁ハきればた  
 り。』

頭北面西右脇臥北枕に西向きに右を下にして死人を臥せしむること、佛法の作法なり。切回向といふこと知らず、淨土宗の一種の作法にや。有縁無縁乃至法界平等は、切回向する中の讀經の聲なるべし、法界とは眞如或は平等といふに等しく、又絶對といふに等し、現象界の對稱なり、現象界の有縁無縁と法界

平等とを合すれば、即ち宇宙の萬有一切を包有する名稱なり。いきせきとむるは、氣息をせき止むるといふことに、川の流を堰き留る樋といひかけたるなり。なりいせき、風、ゆらぎ、行由地、葉、山、以、手、持、來、飲、之、人、還、一、瓶、以、取、飲、之、持、於、樹、下。

頭北面西といひ、一蓮托生といふが如きは、皆因果經といひ、珠數爪繰るといひ、夏書といひ、尼法師といへるが如き佛語の脈をうけたる文字なり。此の段にては、紙治が、稍佛法を窺へるが如き趣あること、既にいふが如し。

朝出のぎよふがあみのめに見付て「死だ、ヤレしんだ、出あへ、  
 く」と聲々に、いひ廣たる物語、すぐにじやうぶつとくだつ  
 のちかひのあみ島心中と、めごとに、なみだをかけにけり。』

誓の網島、佛が衆生を成佛せしめ、解脱を得しめんといひし誓の網に洩れずといひて、其網の目を、漁夫の眼にいひかけたるなり。

元來、無邪氣にして多感なる男女が、偶々、現世の常規に抵觸して、慾界の執着に迷ひ、自ら闢らざる罪業を重ねたれども、慘澹たる苦悶と、自殺とを以て、一切の業因盡く其果を遂げぬ。即ち大慈大悲の諸佛は、この無邪氣なる、かよはき者を

導いて成佛得脱の靈境に上らしめぬ。  
 思ふに、宇宙は永遠なり、因果の連鎖は無始にして無終なり、而して哲人ひとり其初を見、其終を見る、大なる戯曲は小宇宙たるべし、永遠なる因果の連鎖に於て、唯其片輪を取り來つて、こゝに永遠を寓するものならざるべからず。哲學者は抽象によりて絶對を説き、詩人は具体の裡に永遠を寓す。網島の一篇は、實に人間の悲劇にして、而して又靈魂の喜劇なり。人間の大破壊は、やがて靈界の大團圓なり、かくの如きものはこれ、近松が佛者の信仰にはあらぬか、予は、勿論、近松が信仰の爲に、主張の爲に、此の篇を草したるものと斷するものに非ず、近松が目的は詩なり、美なり、されども、其有限の事象中に、無限永遠の理法を具するは、これ、妙くも、詩美の一特質にはあらぬか。

近松 天之網島 終  
 評釋

近代文學評釋第壹卷鶉衣評釋追考

鶉衣の評釋に對して、友人足立敏太郎君等より忠告せられしもの、及び再考したる所を、此の巻尾に附記して、その誤脱を補ひ、かねて忠告を賜はりし諸君に謹謝す。

第二頁、「多能はなくてもあらまし」といふ語を、莊子に出でしかと疑ひしは、全く誤謬なりき。こは、徒然草百二十二段、多能は君子の恥づる所なり」といふ語に出でたり、而して、そは、又、論語の「太宰問子貢曰、夫子聖者歟、何其多能也、云々、子聞之曰、太宰知我乎、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也」といふ出でたり、と、文段抄などに見ゆ。

二十二頁、「施蠶が忠をもどき」といふがよ、せ、な、しと思ひしも誤なり。太平記四卷「吳越のこと」の段に、范蠶が魚商人に粧ひて、魚腹中に詩を記したる片紙を収め、獄中の勾踐に送りたりといふ故事に思ひよせたるなり。

三十三頁、「たへめ、折しも」のめはぬの誤なり。已然の形なる終止と信じたるは全く誤讀にて、普通の連体なり。

三十六頁、「本間の狂言の本間」を苗字と思ひしも誤讀なり。俳諧綾卷に「たどは、

大藏賢狂言の家なりの狂言もあり、ふんとく興五郎(俄師めさしものなり)が狂言もあり、いづれも上手の名を得たり。そのうち、本間の狂言は、ならひの行儀をそむかず、立居もしはらしくて、云々などあるを見れば、本間の狂言とは、即ち大倉敷の狂言といふことにて、ほんとうの間拍子にあふ狂言といふことかなは、今の口語のほんま眞實といふ語も、これより出しなるべし。

八十五頁、「雲かゝる高間の山浪よする高師の濱は、新古今のよそにのみ見てややみなん、葛城や高間の山の岑の白雲、及び萬代集の仇浪の高師の濱のそなれ松なれずばかけて我戀ひめやもにとりしなるべし、さ或る人の教へぬさもあるべきか。

八十八頁、「ちもりは和泉境の遊廓乳守の里なり。  
九十四頁、「せみの小川の影ならずも」の引歌は新古今、石川や蟬の小川の清ければ、月も流をたづねてぞすむといふ歌なり。

明治三十四年七月十五日印刷  
明治三十四年七月二十日發行

定価金三十六錢

不許複製

著者 佐々政一  
發行者 三樹一平  
印刷者 三島宇一郎  
印刷所 弘文堂  
東京市神田區錦町二丁目十番地  
東京市神田區表神保町二番地  
同所(電話本局二三二六番)

發行所 明治書院  
東京市神田區錦町二丁目  
電話本局二四三八番  
關西大賣捌 吉岡平助  
大阪市東區備後町四丁目

# 明治書院出版圖書目錄

落合直文 合著 七版  
小中村義象

**大鏡詳解** クロース製 全一冊

定價金壹圓六拾錢 小包料百里以上廿四錢  
分本和製定價金壹圓四拾錢 郵稅金四錢  
國文の通弊たるや、流暢難雅なるも浮華纏綿に陥り易きにあり、獨り大鏡は然らず、流麗にして莊重、而も藤原氏全盛時代を細叙したるものなれば、國文の模範たるのみならず、國史研究者の必讀すべき書也。然るに古來完全なる註釋書なきは豈に遺憾ならずや、本書は落合小中村の兩先生が、該博なる學識を以て、之を精細註釋せられたるもの也。兩先生の新道に精通せらるるは江湖の既に知らるるところ本書の眞價に至りて贅言を要せざる可し。

落合直文 校  
小中村義象

**大鏡讀本**

上卷 金二拾五錢  
下卷 郵稅三拾五錢  
郵稅六錢

故文學博士 小中村清矩 閱  
和田英松、佐藤球合著 五版

**增鏡詳解** 背皮製 全一冊

定價金壹圓七拾五錢 小包料百里以上廿四錢  
分本和製定價金壹圓四拾五錢 郵稅四錢  
増鏡は大鏡と同じく三鏡の一にして鎌倉時代の國文歴史也、而して其文章の雅健なること、記事の正確なることは、國史研究者の必讀書也。然るに是又、古來註釋なきは、國史研究者の遺憾なる處也。本書は、和田英松の兩先生が、多年の苦心を以て、大に遺憾を補ひ、其の詳密なるは、校閱せしむる所のもの、加ふるに附録一巻は、澤原の索引、系圖、其の索引、年表、京師圖、同附近圖、里内表、澤原の索引、歴史の机上欠く可からざるものなり。増鏡研究者のみならず、歴史の机上欠く可からざる也。

和田英松 校  
藤球 校 文部省檢定済

**增鏡讀本**

和裝全三冊  
定價四拾五錢  
郵稅八錢

落合直文編 文部省檢定済

### 中等國文讀本

全十册

定價 一冊四錢各二拾錢 郵稅各四錢

本書は、落合先生が精選なる學識と幾多の研究により編次せられたるものにて、材料の豊富、程度排列の適當なる、以て讀書力を養ひ、作文の模範となし高雅なる思想を養ふ等國文讀本の眞目的にかなへるもの、一度世に出づるや非常の好評を得て、各學校に於て採擇せらるゝの榮を蒙れり。然れども、編者の斯道に思なる猶之を以て足れりせず。程度の適否分量の過不及等、實際教授上の得失を、中學、師範、高等女學校等の當局教員諸氏の意見に徴し之を參酌して一大校訂を加へ、文部省の教科書標準により、版を改めて更に公にせられたり。以て本書の完璧無瑕、世の潤々たる國文讀本なるものに比して、差隔天淵のみに非ざることを知るべし。

落合直文著

### 日本大文典

皆皮製 全一册

定價金壹圓七拾五錢 小色料百單並拾貳錢以上廿四錢 定價一、二、三各四拾錢 郵稅各四錢

文學士 落合直文校閱 内海 弘藏著

### 中等 日本文學史

クロース製 全一册

定價金六拾五錢 郵稅金八錢

落合直文著 訂正三版

### 新編假名遣

定價三拾錢 郵稅四錢

明治書院編輯部編

### 中 假名遣教科書

定價拾二錢 郵稅貳錢

故文學博士小中村清矩著

### 歌舞音樂略史

日本紙刷 全二册

定價金七拾錢 郵稅六錢

我神代の歌舞音樂より、徳川氏時代の歌舞伎、淨瑠璃、小唄、長唄、三絃、鼓弓の類に至る迄、其事實、起源、沿革等を細叙し、可憐、數十葉の圖譜を附して、説明したるもの、文學者の机上欠くべからざる書也。

今泉定介校 烏野幸次編

文部省檢定済

### 訂正 中學國史

和二册 裝

定價上卷貳拾錢 下卷三拾錢 郵稅各四錢 中學初級程度教科書として、能く其程度を考へ時間を量り、尤も簡明に編著せられたるもの也。

延岡中學校長 山崎庚午太郎 文 學士 大林徳太郎 合著

文部省檢定済

### 中 日本史要

クロース製 全一册

定價金七拾錢 郵稅八錢

本書は文部省に於て編定せられたる中學歴史科目に關り、之より少の補綴を加へて編纂したるものにして、其体裁や簡にして要を得、其文章や平易にして流麗也。

關根正直著

### 訂改 更科日記略解

定價卅五錢 郵稅四錢

平安朝時代に出でたるものにて、浮華淫逸の風なく、佳構貞操、女性の風情を見るは、獨り此更科日記のみ、然れども、舊本頗る錯亂多く解き易からざるを以て、此更科日記のみ、然れども、舊本頗る錯亂を正し解釋を加へ年表を添へたるもの也。

大久保初雄著

### 日本中文典

全二册

定價正編金廿五錢 續編金三十五錢 郵稅各四錢

近來日本中文典の著多しと雖も、繁簡其當を得ず、以て中學程度諸子の指導たるもの甚だ稀なり。本書は、著者が考案し、多年實地授業の経験と因りたりたるものにて、正確に於ては、初學者に難し通曉し易き様、文典の全体に付き簡明に説明を與へ、續編に於ては、必要なる部分を選びて詳説し、且つ各編の終に應用問題を掲げ、以て練習に便ならしむる等は本書の特色なりとす。されば中學程度の教科書には勿論、高等學校入學試験、教員檢定試験等受験者には最も適切なるものなり。

文 學士 大林徳太郎 合著 文部省檢定済 延岡中學校長 山崎庚午太郎

### 中 日本文典

和三册 裝

定價上下各金十五錢 金二十錢 郵稅各四錢

本書は第一巻に音聲、第二巻に語彙、第三巻に文章論と、編み分ち極めて平易なる文章を以て國文典の概略を敘述したるものなれば中學程度の教科書として尤も適當なるものなり。殊に編中處々に例題及練習問題を挿入したれば是によりて生徒の實力を養成し亦既修の智力を統括するを得べし。

和田英松合著 六卷迄既製

### 榮華物語詳解

和装美本 全拾五冊

定價每冊金四拾錢 郵稅六錢

榮華物語は、藤原氏全盛時代の國文の歴史にして文章の明麗麗麗なる、物語文の王と稱せらるゝ源氏をも凌ぐべし、其事の細密明瞭なる、外戚事柄の裏面を描出して餘す所なく、國文の歴史に志あるもの、必讀すべき良書なるは多難を要せず。然れども、未だ完全の註釋世なきは世の以て遺憾とする所也。本書は既に好評を得たる「増鏡詳解」の著者佐藤和山兩先生が多年刻苦研鑽の効に於て、其註釋の精細、考證の詳博なるは、前書に劣らざる事本院の信じて疑ざる所也。殊に、索引、系圖、年表、及附録一卷を附する等其れば、國文研究者は勿論國史に志あるものも必ず一本を備ふべき也。

前高等學校教授、小中村義象校  
東京女學館講師、國分操子撰

### 今昔物語讀本

定價廿五錢 郵稅六錢

文學士 鹽井正男著

### 新古今集詳解

和装 全六冊

一の巻定價金參拾五錢●郵稅四錢  
二の巻既成○三の巻以下印刷中

和歌は、優麗なる我國人が心情の美術品にて、誠ニ我が文學の花なり。而して新古今集の時代は最も隆盛進歩を極めて、よく幽遠巧妙に、よく修飾風致ありて、實に其蘊奥を盡し其の美妙を極めれば、心あらむ人、必ず此の集を味はざるべからず。されど、未だ親切に解釋せる良書なき故に、人多く其美を味ふを得ず。著者、こゝに、新に此の詳解を著し毎首の意義詞遣ひを詳細懇切に解釋せられ、且つ其の妙所々々の評論をも添へられぬ。著者が歌道の名に世の知らるゝ所本院の贅言を要せざるべし。

關根正直校  
金子元臣撰 文部省檢定済

### 徒然草讀本

定價拾八錢 郵稅四錢

### 徒然草讀本解釋

定價拾五錢 郵稅四錢

文學士 武島又次郎著

### 新撰詠歌法

和装全一冊 定價四拾錢 郵稅六錢

世に詠歌を教ふるの書多しと雖も、概ね因循なる和歌者流の手に出づるを以て、其弊陳腐腐澁にして兒戯と稱せらるゝ多し。此書は武島文學士が該博なる學識により、わが國古來詠歌學者の説に交ふるに西洋詩學者の説を以てし、最も斬新なる方法によりて、歌の本質を説き、種類を説き、裝飾を説き、聲調を説き、構想を説き一讀の下、直に詠歌の秘訣を悟らしむ。

文學士 高山林次郎序  
堀江秀雄著 再版既成

### 活少年

袖珍美本 定價貳拾錢 郵稅四錢

- 要目
- 一、世界の大事
  - 二、日本の國情
  - 三、日本の老人
  - 四、少年の責任
  - 五、家庭に於ける少年
  - 六、社會に於ける少年
  - 七、少年時代の價值
  - 八、立身の基礎
  - 九、獨立の精神
  - 十、將來の活事業

文學士 武島又次郎著

### 國歌評釋

和装全五冊 定價四拾錢 郵稅六錢

歌は能く讀むことの難きにあらずして、能く知るこの難き也。上下三千載我國の歌、數知らずと雖も、皆幽婉にして、含蓄あるを特質とす。其措辭の巧妙にして、命意の深遠なる、之を註し之を説くにあらざれば、到底初學の理解する所にあらず也。評釋の必要は實にこゝに於てか起る。今や武島文學士、精細の筆を以て古來國歌の秀逸なるものを選び之を釋き、之を評し、之を論じ、以て其美旨と光彩とを發揮せられんとす。

下田歌子題歌 柳橋桐子序  
跡見花蹊序 堀江秀雄著

### 理想の少女

袖珍全一冊 定價貳拾錢 郵稅四錢

- 要目
- 一、世界の情態
  - 二、日本の女子
  - 三、家庭に於ける女子
  - 四、女子の休説
  - 五、女子の學業
  - 六、女子の職業
  - 七、女子の責任
  - 八、女子の交際
  - 九、女徳の基源
  - 十、今後の女子

落合直文校閲

十六夜日記  
竹取物語讀本  
土佐日記讀本  
方丈記讀本

定價金八錢  
郵稅各四錢  
定價金八錢  
郵稅各四錢  
定價金八錢  
郵稅各四錢  
定價金八錢  
郵稅各四錢

本書は、從來ありふれたるものと異り、廣く異本を参照し、送り假名法、假名遣等を一定し、専ら讀本体に編纂したるものなれば、教科書として最も適當なるは勿論、別に詳細周到なる註釋を附録したる者あれば、自習用として最も便利也。

與謝野鉄幹著 (新体詩集)

東西南北

定價廿錢  
郵稅四錢

與謝野鉄幹著 (新体詩集)

天地玄黃

定價廿錢  
郵稅四錢

國語漢文研究會編 文部省檢定済

中等漢文讀本

日本紙刷  
全十册

定價一、二各拾八錢 五、十各廿五錢  
三、四各廿二錢 郵稅一册四錢、二册八錢、三册十二錢、四册十六錢、五册二十錢、六册廿四錢、七册廿八錢、八册卅二錢、九册卅六錢、十册四十錢

開成中學沼田頼輔著

中東洋史要

クロース製  
定價七拾五錢  
郵稅八錢

東洋列國間の治亂榮枯及び西洋との交渉を説き、大勢の變遷ある毎に詳細なる地圖と鮮美なる圖説とを挿入したるもの、教科書として又參考書として至便の良書也。

文學士野村浩一著

國史綱要

クロース製  
定價金六拾錢  
郵稅六錢

中學五年級用として編纂したるものなれば、更に制度、文物、外交等につきて最も簡明に説明し、問々正史及証録より摘抄して、外考に供へたり。

今泉定保元物語讀本

定價金拾五錢  
郵稅金四錢

平治物語讀本

定價金拾五錢  
郵稅金四錢

太平記讀本

定價金拾五錢  
郵稅金四錢

平家物語讀本

定價金拾五錢  
郵稅金四錢

保元平治物語讀本

定價金拾五錢  
郵稅金四錢

漢文を用ひずして、漢文の註釋をうつし、國文を用ひて、國文の優劣を避け、雄渾流暢二つながら具ふるものは、歴記文なり。而も其記事は悲壯勇烈、歴史上の事蹟なれば、國文の模範となり、歴史を知り、併せて、精神鼓舞の資となるもの也。本院茲に、新學に精通せらる、今泉先生に請うて、假名遣、送假名等を訂正して、此種の讀本を出版することにはなしむ。而して、別冊詳細なる解釋のあるれば、初學者に雖も、一讀理解するに難からざる可し。

島山健校 文部省檢定済  
金子元臣訂

神皇正統記讀本

定價三拾錢  
郵稅四錢

東京府師範 簡野道三著 文部省檢定済

高女子漢文讀本

日本紙刷  
全一册

定價一、二各廿五錢 三、四各三拾錢 郵稅各四錢

女子國語讀本

日本紙刷  
全八册

定價一、二、三、四各廿三錢 郵稅各四錢

東京府高等 女子師範 小島政吉著

女子本邦史要

クロース製  
定價六拾錢  
郵稅八錢

東京府高等 女子師範 小島政吉著

女子東洋史要

クロース製  
定價五拾五錢  
郵稅六錢

荒 泰次著

女子日本地理教科書

クロース製  
全一册  
定價金五拾五錢 郵稅六錢 附圖定價金三拾五錢 郵稅四錢

金子元臣著 第一卷既成以下續刊

### 古今集評釋

美本全五册 定價各四拾錢 郵稅各六錢

服部躬治著

### 戀愛詩評釋

全一册 定價三拾錢 郵稅四錢

村山自強 中島幹事 合編 文部省檢定済

### 漢文史記列傳抄

定價三、二各貳拾錢 四各廿五錢 郵稅各四錢

從來史記列傳を讀本とし出版せしものは、其配列すべて原本の儘なる故、難易の程度に不都合を見る。本書は此点に付て注意を加へたれば、教利用として適當なる味々を待たす。

金子元臣合著 再版既成

### 百人一首評釋

定價廿五錢 郵稅四錢

黒田侯爵題歌 口繪野中至氏夫妻曾像及富士山 四版 落合直文著 口繪野中至氏夫妻曾像及富士山 四版

### たかねの雪

定價廿五錢 郵稅四錢

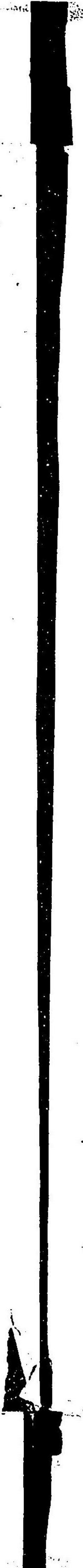
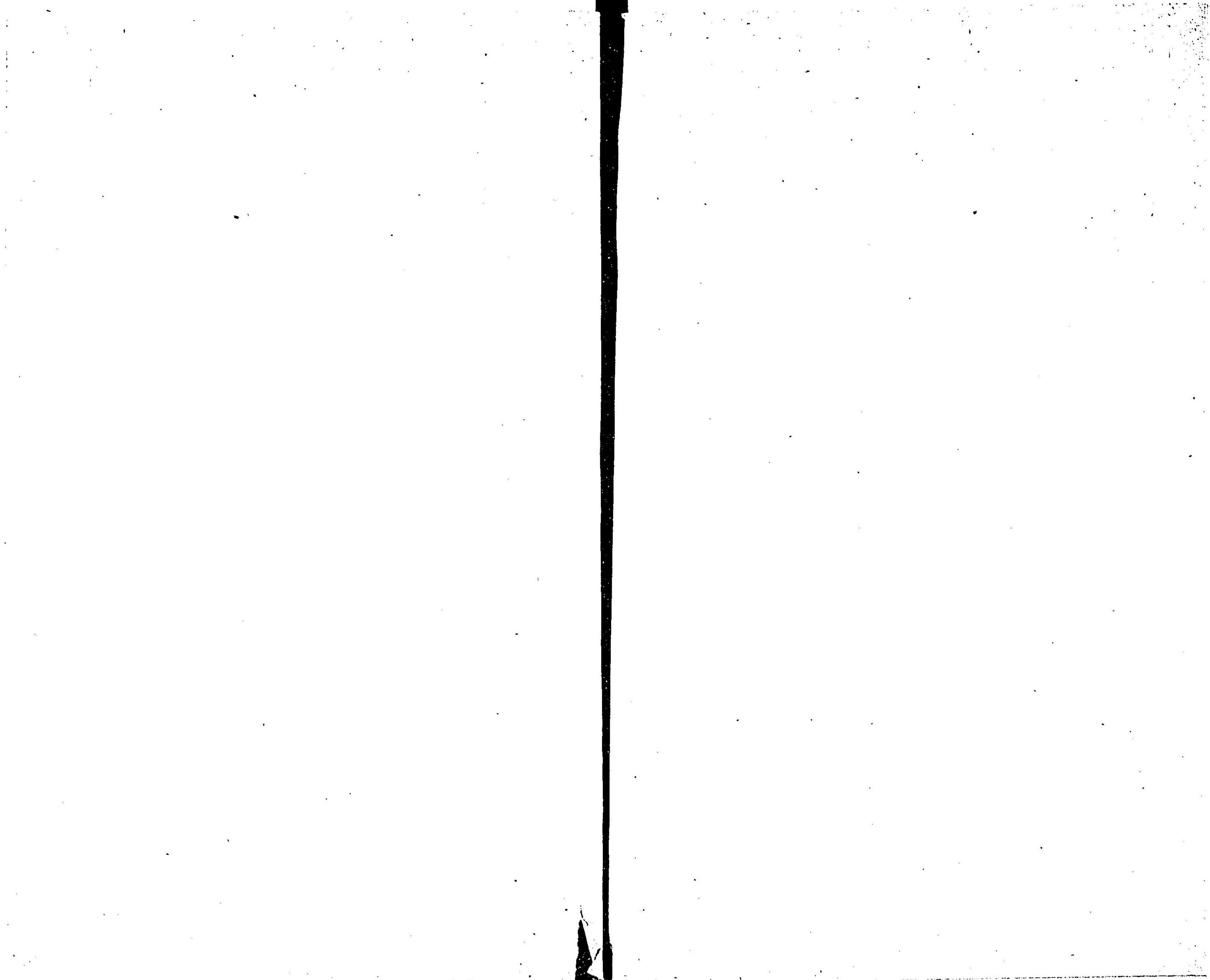
落合直文閣 藤井静子編 増補四版

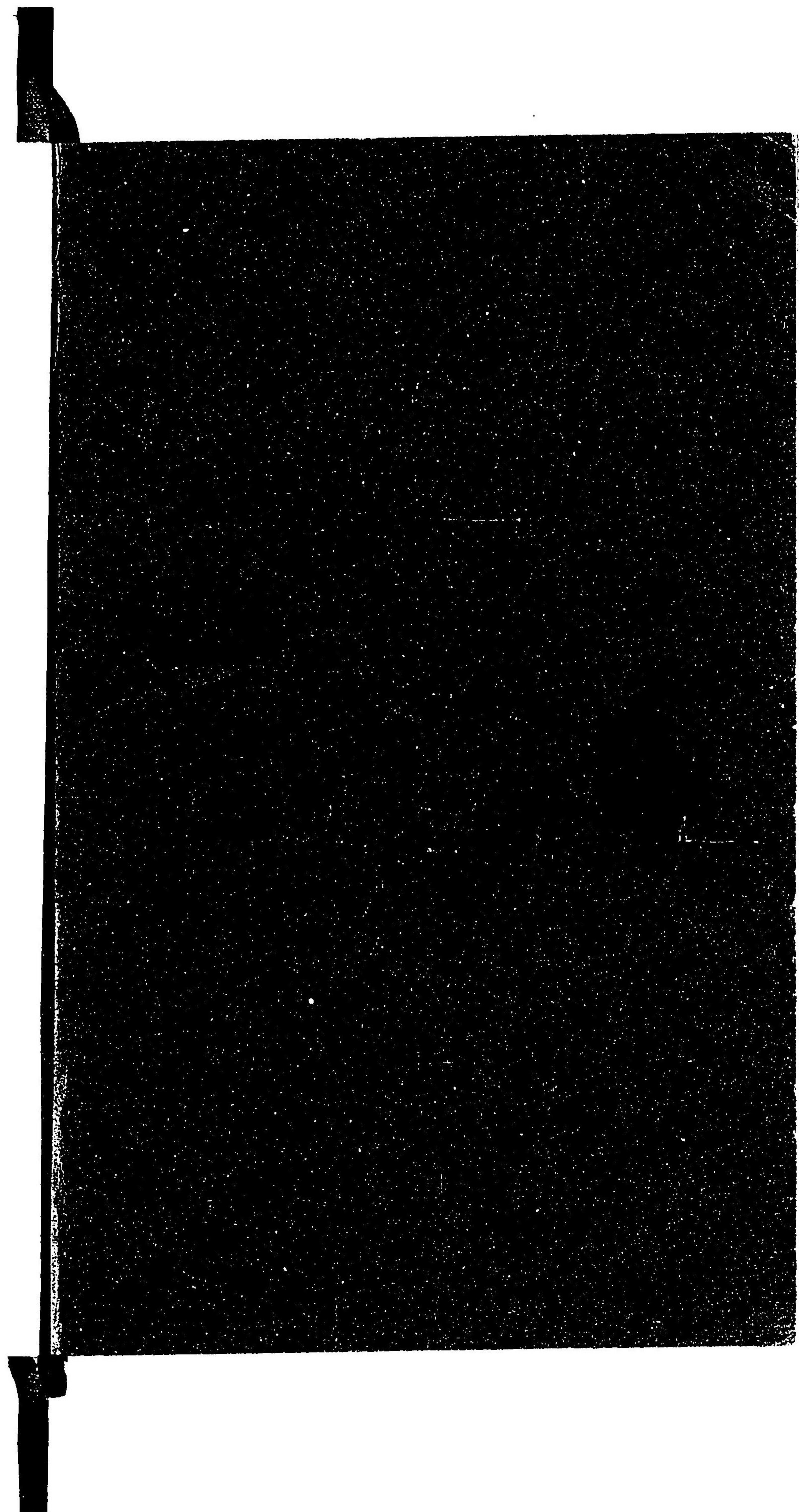
### 萩の下露

定價廿二錢 郵稅四錢

落合先生の門下開秀作家十數名の美文和歌を集めたるものにして、一々先生の嚴密なる校閲を経たれば、作文作歌の模範として絶無の好師友なる可し。









912.4  
Ti238St

(M)

近松評訳  
天の網島

国立国会図書館

088321-000-7

912.4-Ti238St

天の網島

佐々 政一 / 著

M34

DBI-0159

